

元和元年七月二十七日

三四〇

山城國法金剛院內六拾五石之事、全可寺納、并門前境內諸役免除之狀如件、

元和元年七月廿七日

家康朱印

法金剛院

〔御朱印帳〕 十

安樂光院

山城國乙訓郡物集女村之內百二十石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、安樂光院全收納、永不可有相違者也、仍如件、

寬文五年七月十一日

戒光寺

山城國乙訓郡石見上里村之內百六石事、并境內竹木諸役等免除、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、戒光寺進止、永不可有相違者也、仍如件、

北野觀音寺

山城國葛野郡西院村之內十石九斗餘事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、北野觀音寺全收納、永不可有相違者也、

違者也、

誠心院和泉式部墓所

和泉式部墓所領山城國葛野郡西院村之內十石事、任元和七年七月廿七日、(元方)同年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

長福寺

山城國葛野郡西院村之內九石八斗事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、長福寺全收納、永不可有相違者也、

悲田院

山城國葛野郡西院村之內九石餘事、任元和元年七月廿七日、寬永十三年十一月九日兩先判之旨、悲田院全收納、永不可有相違者也、

山崎神宮寺

〔權現樣御朱印寫〕
當寺領攝津國并河郡○御朱印帳、島東大寺村內五拾石事、如先規寄附之、全可寺納、者佛事勤行不可懈怠之狀、仍如件、

元和元年七月廿七日

權現樣 御黑印

山崎

元和元年七月二十七日

三四一

元和元年七月二十七日

三四二

妙法院

神宮寺

〔妙法院志稿〕 一 徳川家康知行目録

知行之目録

一九拾五石	山城國愛宕郡	鹿谷
一九拾三石貳斗九升	同	大原
一三百貳拾六石八斗	同	大佛廻リ柳原共
一貳百四斗 <small>(石貳九)</small>	葛野郡	牛ヶ瀬
一三百貳拾八石八斗	同	朝原
一五百八拾九石貳斗八升	乙訓郡	寺戸
都合千六百三拾三石五斗		

右全可有寺納并門前境内山林竹木諸役等令免除之狀如件、
元和元年七月廿七日 家康花押

蓮華王院

妙法院

〔御朱印帳〕 五十

山城國愛宕郡清閑寺村之内八石四斗谷山田村之内二石五斗合拾石九斗

事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日兩先判之旨、三十三間堂蓮華王院全收納、永不可有相違者也、
寛文五年九月廿一日 御朱印

〔華頂要略〕

四十一家 門下傳七院 長祐大僧都

同月賜東照宮御黒印、

山城國浄土寺村之内百五石之事、全可寺納、並門前境内地子諸役等、可免除之狀如件、

元和元年七月廿七日

御黒印

眞如堂

〔廬山寺文書〕

城〇山

山城國鳴川之内五拾七石之事宛行訖、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

黒印

廬山寺

〔御朱印帳〕 十

元和元年七月二十七日

三四三

廬山寺

眞如堂

元和元年七月二十七日

三四四

革堂領山城國愛宕郡深艸村內二拾石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

山城國葛野郡西院村之內三石五斗餘、愛宕郡三條五條之間四斗餘、合四石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、法傳寺全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

山城國愛宕郡大原鄉之內六拾九石事、并門前境內諸役等免除、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、來迎院進止、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

山城國愛宕郡大原鄉之內六拾七石事、并門前境內竹木役等免除、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、勝林院進止、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

山城國愛宕郡鴨川村之內二拾八石、丹波國船井郡土慎村內六拾五石、合五拾三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、遣迎院全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

山城國愛宕郡一乘寺村之內壹石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、六角堂全收納、永不可有相違者也、

元和元年七月二十七日

三四五

元和元年七月二十七日

寛文五年七月十一日

御朱印

雙林寺

山城國愛宕郡粟田口村之内三十四石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、双林寺全收納、永不可有相違者也、

〔御朱印帳〕五十

山城國愛宕郡大原草生村寂光院領八瀬郷之内三十石の事、元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判の旨にまうせ、全收納、永相違あるへうらさる者也、仍如件、

寛文五年七月十一日

御朱印

寂光院

廣隆寺

〔廣隆寺文書〕

○坤 京都

山城國太秦之内六百石之事、全可寺納、并門前境内諸役爲免許之狀如件、

元和元年七月廿七日

(家牒) 黒印

梅尾寺

〔高山寺文書〕

○二 山城

山城國一乘寺之内五拾八石之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

(家牒) 黒印

太秦 廣隆寺

梅尾寺

〔御朱印帳〕二十

當寺領山城國葛野郡畑村貳百六拾貳石餘、愛宕郡一乘寺村之内貳拾八石、合貳百九拾石餘事、并門前境内山林竹木等免除、任慶長六年七月廿六日、元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨進止、永不可有相違者也、仍如件、

寛文五年七月十一日

御朱印

高雄山

神護寺

神護寺

眞性寺

山城國愛宕郡三條千本邊之間壹石三斗餘、建仁寺廻九斗餘、葛野郡西院村

元和元年七月二十七日

元和元年七月二十七日

三四八

之內四石六斗餘、都合七石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、眞性寺全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

〔權現様御朱印寫〕

山城國西院內貳拾六石五斗貳升、二條三條之間拾五石九升、都合四拾壹石六斗餘之事、全可寺納候也、仍如件、

元和元年七月廿七日

權現様
御黒印

歡喜寺

歡喜寺

智積院

〔智積院文書〕

○山城

山城國葛野郡上桂村之内五百石之事、全可有院納、并境内竹木諸役等令免除之狀如件、

元和元年七月廿七日

朱印

智積院

〔大報恩寺文書〕

大報恩寺

大報恩寺

顯教密宗 勅願所

養命坊

一大報恩寺者用明天皇御建立也、二尊百濟國佛工、彫刻、云行基作唱誤也、本尊釋尊并十大弟子之尊像也、中興開山

者出羽國雄勝郡千福里住人藤原忠明子息也、廿爲鎮守五所之靈神、號多喜宮、實名義空上人、承久元年之

比也、并諸末寺、寺、經王堂、願成就、寺、北野、輪藏堂、學藏坊者也、

一松殿基房公、法性寺關白二男攝政太政大臣從一位御隱遁、而其比迄寺領

數多、其目錄別紙在也

一攝津國時枝庄相傳系圖開發領主源康基、日野中納言兼光卿女子、姉小路公宣實文卿、姉小路三位、聖勝、法觀上人、讓融、聖、明源上人、建武三年九月廿

自其以後、代々系圖別紙在也

一御代々御繪旨御判御下知數通在之、本知殘分、則太閤之御朱印迄無恙當

知行仕者也、

一奉祈一天太平之御願、被下御祈願之御繪旨、就中始置法華三昧之勸行、并

遺教經於今無怠轉、抽誠精所也、

元和元年

大報恩寺

元和元年七月二十七日

三四九

元和元年七月二十七日

七月廿五日

役者

三五〇

知行之目錄

一三拾八石九升

西院內

一四拾七石貳斗八升

京西內自二條迄

一貳石九斗

三本木之內

一拾壹石七斗五升

花蘭之內

都合百石

右全可收納并門前境內山林竹木地子等如先規令免除之狀如件、

元和元年七月廿七日

(家康)
黑印

養命坊

安樂壽院

〔安樂壽院文書〕

城〇山

當院領山城國竹田之內五百石之事、全可院納并門前境內竹木諸役等令免除訖者守此旨、佛事勤行修造等不可懈怠之狀如件、

元和元年七月廿七日

(家康)
黑印

因幡堂平等寺

〔御朱印帳〕

一十

安樂壽院

因幡堂領山城國乙訓郡石見上里村之內四拾石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

閻魔堂引接寺

閻魔堂領山城國葛野郡西院村之內五石六斗餘事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

普門院

山城國葛野郡西院村之內四拾八石、愛宕郡三條通東加茂川之間貳拾貳石、合七拾石事、并境內竹木諸役等免除、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、普門院進止、永不可有相違者也、

元和元年七月二十七日

三五二

元和元年七月二十七日

三五二

寬文五年七月十一日

御朱印

正光坊

山城國愛宕郡一乘寺村之内四石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、正光坊全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

清和院

山城國紀伊郡深草村之内四拾一石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、清和院全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

大德寺

〔龍寶山大德寺誌〕

大德寺領之繪旨院宣等目錄

東照宮御朱印

當寺領二千拾壹石

目錄在別紙

當任領諸塔頭領、今度相改定之訖、全可有收納、并門前境内山林竹木等、如先

規令免除者也、者守此旨、佛事勤行修造等無怠慢、彌可抽天下安全之精祈之狀如件、

元和元年七月廿七日

御朱印

大德寺

〔妙心寺文書〕

〇七 山城

已上

急度申入候、仍當寺領此以前御朱印御座候分、御繼目ニ可被成御朱印旨、從伊賀申來候間、内々被成其御心得、先御朱印并寺領目錄、伏見へ可有御持參候、此由、寺中へ可有御届候、爲其申觸候、恐々謹言、

金子八郎兵衛

七月十日

祇□(花押)

妙心寺

龍安寺 役者中

當寺領四百九拾壹石餘、目錄在別紙、全可有寺納、并門前境内山林竹木、如先規令

元和元年七月二十七日

三五三

妙心寺

元和元年七月二十七日

三五四

免除訖者守此旨佛事勤行修造等無怠慢彌可抽天下安全之精祈之狀如件

元和元年七月廿七日

(家康)
朱印

妙心寺

妙心寺高目録之事

一拾貳石七斗六升四合

西院

一百九十貳石七斗四升六合

西京

一八十貳石四斗六升六合

龍安寺前

一參十五石

西岳物集女

一百石

池上金臺寺

一四十參石

原村

一貳十五石貳斗六升

富田

惣都合四百九十壹石貳斗參升六合

妙心寺納所

右御朱印高當知行よて御座候

元和元年七月廿七日

宗寔(花押)

住持(一)

金地院

板倉伊賀守殿

右任御朱印旨全可有寺納者也

板倉伊賀守

元和元年七月廿七日

勝重(花押)

金地院

崇傳(花押)

〔龍安寺文書〕

城○山

當寺領七百貳拾石餘別紙目録在全可有寺納并門前境內山林竹木如先規令免

除訖者守此旨佛事勤行修造等無怠慢彌可抽天下安全之精祈之狀如件

元和元年七月廿七日

(家康)
朱印

龍安寺

龍安寺

元和元年七月二十七日

三五五

元和元年七月二十七日

寺領方高目錄之事

龍安寺

三五六

一百九拾七石七斗九升四合

西京

一七石七斗壹升六合

西院

一百九拾石五斗三升六合

龍安寺前

一卅五石

西岡物集女

一九拾六石貳斗六升

接^(權)芴原村

一百七拾四石七斗四升

同富田

一廿石

丹州森村

惣都合七百廿貳石四升四合

龍安寺役者

元和元年七月廿七日

^(實)壽珪(花押)

住持

^(權)惠稜(花押)

金地院

板倉伊賀守殿

右任御朱印旨全可有寺納者也

板倉伊賀守

元和元年七月廿七日

勝重(花押)

金地院

崇傳(花押)

〔權現様御朱印寫〕

當寺領梅津村之内參百五拾石之事常任領諸塔頭領今度相改別紙錄之全可寺納并門前境内山林竹木地子以下令免除之狀如件

元和元年七月廿七日御

^(權)朱印

長福寺

〔長福寺志稿〕

元和元年七月廿五日德川家康朱印

梅津村の内三百五拾石知行及門前境内山林竹木地子免除の件

天正十三年豊臣氏六百五拾石を給せしを德川氏大政を握るよ及び

元和元年七月二十七日

三五七

長福寺

元和元年七月二十七日

三五八

三百石を削り、三百五拾石とあり、南禪寺の崇傳か、本寺を末寺と
あり、其勢力を殺くの策み出ゝあるるし、此時崇傳が板倉勝重連署の
達文左の如し、

當寺領今度御朱印之高

合三百五拾石

右支配

一七拾六石九斗五夕

常住

此外門前境内地子人足等加之、

一二十二石三斗九升壹合

藏龍院

一六拾六石九斗壹合

正法院

一八石壹合

即心院

一貳拾六石六斗七升貳合

大慈院

一貳拾七石壹斗參升八合五夕

梅南院

一貳拾七石貳斗七升壹合

瑞光院

一貳拾五石三斗四升六合

知足院

一拾六石五斗八升八合
一拾四石三斗三升六合
一參拾石參斗七升八合
一八石七斗七合

移春軒

長德菴

松首坐(坐)枚雲軒

種德軒

都合參百五拾石

如右之支配可有收納如先規本年南禪令持寺法堅可申付候、本寺出仕役儀
等不可懈怠旨、依仰執達如件、

元和元年八月

板倉伊賀守

勝重判

金地院

崇傳判

長福寺

〔權現様御朱印寫〕

正受寺

山城國西賀茂之内拾五石之事、全可寺納、并門前境内山林竹木等令免除之
狀如件、

元和元年七月二十七日

三五九

元和元年七月二十七日

元和元年七月廿七日

正受寺

權現様
御朱印

三六〇

正傳寺

山城國賀茂之内百石之事、全可寺納并門前境内山林竹木等、令免除之状如件、

元和元年七月廿七日

正傳寺

權現様
御朱印

等持院

知行之目錄

一拾壹石六斗

西院之内

一百七拾四石九斗三升

西京之内

一百石

當院門前

一三拾五石六斗七升

丹波國何鹿郡
戶津川村之内

一四石三斗三升

同
巴府村之内

都合三百貳拾六石五斗三升

右全可院納并門前境内竹木諸役令免除了、者守此旨佛事勤行修造等、不可懈怠之状如件、

元和元年七月廿七日

等持院

權現様
御朱印

〔御朱印帳〕三十

芝藥師領山城國葛野郡西院村之内三石愛宕郡一乘寺村之内三石、合六石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、仍如件、

寬文五年七月十一日

御朱印

妙喜庵

山城國乙訓郡西岡鄉圓明寺村之内四拾四石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、妙喜庵全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

元和元年七月二十七日

三六一

元和元年七月二十七日

御朱印

三六二

寶嚴院

山城國愛宕郡田中村之内三拾壹石事并境内山林竹木等免除任元和元年七月廿七日同三年七月廿一日寛永十三年十一月九日先判之旨寶嚴院進止永不可有相違者也

寛文五年七月十一日

御朱印

讚州寺

山城國葛野郡西院村之内三石八斗餘愛宕郡三本木之内壹石壹斗餘合五石事任元和元年七月廿七日同三年七月廿一日寛永十三年十一月九日先判之旨讚州寺全收納永不可有相違者也

寛永五年七月十一日

御朱印

養林庵

山城國紀伊郡深草村之内三十一石之事元和元年七月廿七日同三年八月

〔御朱印帳〕

五十

廿八日兩先判の旨よほりせ養林庵全收納永相違あるへうらさる者也

寛文五年九月廿一日

御朱印

〔本光國師日記〕

四十

寛永九年五月八日出納大藏智恩寺寺領出入ニ付

ゑ山形右衛門大夫狀并御朱印知行割寫持來ル案在左○秀吉ノ朱印等略ス

山城國深草村之内三拾石之事宛行訖全可寺納并門前境内諸役等爲免除之狀如件

元和元年

七月廿七日

智恩寺

權現様御朱印

〔御朱印帳〕

一

山城國愛宕郡一乘寺村之内三石事任元和元年七月廿七日同三年七月廿一日兩先判之旨不斷光院全收納永不可有相違者也

寛文五年十一月三日

御朱印

不斷光院

知恩寺

元和元年七月二十七日

三六三

元和元年七月二十七日

三六四

不斷光院事、近衛殿先祖依爲菩提、所望ニ多、御朱印出申候、

〔御朱印帳〕

五十

法傳寺

山城國紀伊郡下三栖村之内六拾八石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、法傳寺全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

來迎堂

來迎堂領山城國葛野郡西院村之内拾七石九斗餘、愛宕郡田中村之内二石、紀伊郡芹川村之内廿五石九斗餘、都合四十五石九斗餘事、并門前諸役等免除、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

本覺寺

山城國愛宕郡深草村之内三十壹石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、本覺寺全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

見性寺

山城國葛野郡西院村之内拾四石七斗餘、愛宕郡三條五條之内貳石三斗、合拾七石餘事、任元和元年七月廿九日、^(七九)同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、見性寺全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

花開院

山城國葛野郡西岡郷有見上里兩村之内十一石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、花開院全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

元和元年七月二十七日

三六五

元和元年七月二十七日

三六六

御朱印

報恩寺

山城國葛野郡西院村之内七石壹斗餘事(任職方)元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、報恩寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

石像寺

山城國葛野郡西院村之内六石五斗餘事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、石像寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

淨教寺

山城國葛野郡土川村之内六石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、淨教寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

永養寺

山城國愛宕郡一乘寺村之内四石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、永養寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

寶幢院

山城國愛宕郡從三條五條迄之内三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、寶幢院全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

善長寺

山城國愛宕郡一乘寺村之内三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿

元和元年七月二十七日

三六七

元和元年七月二十七日

三六八

一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、(善)谷長寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

〔常福寺文書〕

城〇山

(包紙) 權現様御黒印寫

淨福寺

山城國一乘寺之内參石之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

御黒印

淨福寺

〔御朱印帳〕

五十

山城國葛野郡西院村之内壹石五斗、愛宕郡三條五條之間壹石五斗、合三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、勝圓寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

勝圓寺

西光寺

山城國愛宕郡一乘村之内壹石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、兩先判之旨、水荷西光寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

大恩寺

山城國愛宕郡從五條三條迄之間五斗事、任元和元年七月廿七日、寛永十三年十一月九日兩先判之旨、大恩寺全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

〔御朱印帳〕

二十

山城國宇治郡宇治郷之内三拾石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、白川藏坊全收納、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

〔誓願寺志稿〕

徳川家康朱印

元和元年七月二十七日

三六九

誓願寺

元和元年七月二十七日

山城國深草之内拾七石令寄附訖、全(可九)寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

家康朱印

永觀堂

〔禪林寺志稿〕 德川家康黑印

山城國淨土寺内四拾參石之事、全可寺納、并門前境内諸役爲免除之狀如件、

元和元年七月廿七日

家康黑印

永觀堂

圓福寺

〔御朱印帳〕 五十

當寺領山城國紀伊郡深草村之内拾八石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、全收納永不可有相違者也、仍如件、

寬文五年七月十一日

御朱印

圓福寺

〔佛陀寺志稿〕 德川家康墨印

山城國深草之内廿六石之事、全可寺納者也、仍テ如件、

元和元年七月廿七日

家康墨印

佛陀寺

三福寺

〔御朱印帳〕 五十

山城國紀伊郡橫久路村之内貳十五石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿三日、寬永十三年十一月九日先判之旨、三福寺全收納、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

佛陀寺

長講堂

長講堂領山城國葛野郡西院村之内貳十二石六斗餘、紀伊郡吉祥院村之内四石三斗餘、合廿七石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寬永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寬文五年七月十一日

御朱印

延壽寺

金佛領山城國葛野郡西院村之内拾八石四斗餘事、任元和元年七月廿七日、

元和元年七月二十七日

三七一

三七〇

元和元年七月二十七日

三七二

同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、永不可有相違者也、

寛文五年七月十一日

御朱印

西本願寺

〔山階記〕 西本願寺山科郷寺領之御朱印并田畑名寄寫、

權現様御朱印之寫

山城國山科郷之内貳拾石、和泉國之内○御朱印帳ニハ、大鳥郡築尾邑之内トアリ、貳百八拾石、都合三百石之事、全可有寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

御朱印

本願寺

西本願寺

〔御朱印帳〕

一

山城國葛野郡西院村之内八斗九升、愛宕郡三條五條之間壹斗壹升、合壹石(四升)事、并大谷道場川前境内竹木諸役等免除、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年(十一月)九月九日先判之旨、進上永不可有相違之狀如件、(止方)

西也 本願寺殿

筆者 久保五兵衛

〔御朱印帳〕

十

佛光寺

當寺領山城國愛宕郡菅谷之内三石、三本木内三石八斗、合六石八斗事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、全收納、永不可有相違之狀如件、

寛文五年七月十一日

御朱印

佛光寺

〔正法寺志稿〕

徳川家康朱印書寫

山城國粟田口村ノ内貳十三石五斗ノ事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

判○宛名 關ク、名

〔金蓮寺志稿〕

徳川家康黒印

山城國西院之内貳拾三石壹斗六升之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

家康黒印

四條道場

〔歡喜光寺志稿〕

徳川家康黒印

山城國西院之内六石八斗貳升、六條舊跡之内三拾壹石壹斗八升、都合三拾八石之事、全可收納候也、仍如件、

元和元年七月二十七日

三七三

六條道場
歡喜光寺

四條道場
金蓮寺

正法寺

元和元年七月二十七日

元和元年七月廿七日

六條道場

家康黒印

三七四

七條道場
全光寺

〔御朱印帳〕十

山城國葛野郡西院村内九石、乙訓郡物集女村内百八十八石、合百九十七石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、七條道場全光寺全收納、永不可有相違者也、仍如件、

寛文五年七月十一日

長樂寺

山城國愛宕郡岡崎村之内八石餘事、任元和元年七月廿七日、同三年七月十一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、東山長樂寺全收納、永不可有相違者也、

安養寺

山城國葛野郡西院村之内壹石、愛宕郡祇園廻十石、合十一石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、丸山安養寺全收納、永不可有相違者也、

市屋道場
金光寺

山城國葛野郡西院村之内二十六石九斗餘、愛宕郡三條五條之旨壹石五斗餘、合二十八石四斗餘事、任元和元年七月十七日、同三年七月十一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、市屋道場金光寺全收納、永不可有相違者也、

一條道場
迎稱寺

山城國葛野郡西院村之内十七石八斗餘、愛宕郡三條五條間五石壹斗餘、合二十三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判旨、一條道場迎稱寺全收納、永不可有相違者也、

秋野道場
稱名寺

山城國愛宕郡一樂寺村之内三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿七日、寛永十三年十一月九日先判旨、秋野道場全收納、永不可有相違者也、

極樂寺

山城國紀伊郡深艸村之内十七石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、極樂寺全收納、永不可有相違者也、

元和元年七月二十七日

三七五

東北院

元和元年七月二十七日

三七六

山城國愛宕郡一乘寺村之内六石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、東北院全收納、永不可有相違者也、

大炊道場
開名寺

山城國乙訓郡石見上里村内七十四石六斗事、任元和元年七月十七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判旨、大炊道場全收納、永不可有相違者也、

福田寺

山城國愛宕郡東五條通六石八斗事、任元和元年七月廿四日、同三年七月廿一日、寛永十六年十一月九日先判旨、福田寺全收納、永不可有相違者也、

莊嚴寺

山城國葛野郡西院村之内二石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判旨、莊嚴寺全收納、永不可有相違者也、

本國寺

當寺領山城國紀伊郡菱川村之内百七十七石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、全收納、永不可有相違者

〔御朱印帳〕

五十

也、仍如件、

寛文五年七月十一日

御朱印

本國寺

〔本法寺文書〕

城○山

山城國田中村之内拾壹石之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

黒印

本法寺

〔御朱印帳〕

五十

山城國愛宕郡一乘寺村之内壹石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、妙顯寺全收納、永不可有相違者也、

〔頂妙寺文書〕

城○山

山城國田中郷之内貳拾壹石之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

黒印

頂妙寺

〔御朱印帳〕

五十

元和元年七月二十七日

三七七

妙蓮寺

元和元年七月二十七日

三七八

山城國愛宕郡西岡寺戸村之内十石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、妙蓮寺全收納、永不可有相違者也、

〔本能寺文書〕

○坤山城

山城國鴨川村之内四拾石之事、全可寺納者也、仍如件、

元和元年七月廿七日

(家康)
黑印

本能寺

本能寺

妙泉寺

〔御朱印帳〕

五十

山城國葛野郡西院村之内四石事、任元和元年七月廿七日、同三年八月廿八日、寛永十三年十一月九日先判之旨、妙泉寺全收納、永不可有相違者也、

久遠院

山城國愛宕郡一乘寺村之内四石事、任元和元年七月廿七日、同三年八月廿八日、寛永十三年十一月九日先判之旨、久遠院全收納、永不可有相違者也、

大妙寺

山城國葛野郡西院村之内三石事、任元和元年七月廿七日、同三年七月廿一日、寛永十三年十一月九日先判之旨、大妙寺全收納、永不可有相違者也、

南宗寺

〔御朱印帳〕

三十

和泉國大鳥郡築尾村之内百拾石事、任元和元年八月廿八日、寛永十三年十一月九日兩先判之旨、南宗寺全收納、永不可有相違者也、仍如件、

寛文五年七月十一日

御朱印

〔參考〕

〔本光國師日記〕

八十

九月廿一日、龍安寺領村付ニ、伊州、金地加連判、遣々也、

一上方寺社、今度御續目之御朱印頂戴仕、何も忝かり候、一兩所伊賀双談ニ得上意所御座候と申上候、これも御機嫌能御座候、これハ貴布禰之御朱印と、重可被得御意とめと存知申上置候、内々可被成其御心得候、○上略

板倉勝重宛、九月二十八日附、金地院崇傳書狀、

〔貴布禰社訴論記〕

一元和元年、大權現様御朱印出申候時、賀茂ヨリ貴布禰境内之御朱印、信長公、秀吉公御續目ヲ、板倉伊賀守殿御取次ニテ指上ケ申候、又貴布禰之百

元和元年七月二十七日

三七九

元和元年七月二十七日

三八〇

姓ハ野中村之三石ヲ指上ケ、境内ト三石ト一紙ニ望ミ、境内ト共ニ、貴布禰之里ヘ頂戴可仕ト才覺仕ヲモ、賀茂ニハ曾テ不存之處ニ、伊賀守殿御押ヘ被成賀茂ヘ被仰聞ニ付而、始テ承リ、社中驚入御斷申上候ヘ、ハ、被爲得上意可被下候由御意ニテ候ヘとも、程ナク大權現様御他界被成候故、乍迷惑打過申候御事、

一元和三年、合徳院様御朱印出申候時、賀茂ヨリ御訴訟申上候ヘ、ハ、伊賀守殿ハ、前角之筋目のこと、被爲得上意可被下之仰ニ候、乍去寺社之事、との間、傳長老ヘモ理リ申候ヘと被仰候故、則傳長老ヘ參リ、度々御斷申候ヘとも、傳長老之御手前ヨリ相滞、社家中迷惑仕罷在候處ニ、貴布禰之百姓者、三石分頂戴仕候、殊ニ其三石之御朱印ニ社人中ト御座候由、百姓等、此五六ヶ年以來、社人之體、淡いとし、賀茂之下知をうむき、賀茂社家中迷惑仕候御事、○上下略、寛永十四年正月六日、附寺社奉行宛、上賀茂及ビ西池氏見連署、訴狀寫、

〔義演准后日記〕九十 閏六月十六日、伊州奉行金子八郎兵衛ヘ、門領高書并兩御所御判寫以下、以兩使、今日遣之、但傳奏衆ヘ可相渡由返答、

二十八日、壬寅 京都建仁寺兩足院東銳利峰 論語ヲ進講ス、九月ニ至リテ講ヲ終ル、

〔土御門泰重卿記〕一 七月廿八日、晴天、禁中ニ論語御講尺在之也、建仁寺

（東院利峯） 兩足院講之予、倉橋聽聞、諸公家數多也、

八月二日、晴天、御講尺、於御學文所也、

四日、晴天、禁中御講尺、終日御前ニ侍候也、御講終而、兩足院ト相伴申候、御振舞濟、長老歸寺申候、

七日、於禁中御講尺在之也、聽聞、家君番代ケツカイの故、番始之故、晝夜共相詰申候、雨少不止候、

十日、晴天、於禁中御講尺、即聽聞仕候、御振舞、長老、阿野宰相、予三人、長老相伴也、每度之事也、

十三日、晴天、禁中御講尺如常、

九月十六日、晴天、禁中御講尺也、予不存候故不參、

廿五日、今日禁中論語講尺相終申候、

廿七日、晴天、從禁中召候也、則御番也、兩足院拜領之物、今日御衰日之條、明日

論語講釋
終ル

元和元年七月二十八日

三八一

東鏡ニ物ヲ賜フ

上卿中御門資胤奉職兼事廣

昭實關白再任

元和元年七月二十八日

三八二

可遣候由仰也、

廿八日晴天、兩足院へ杉原十帖段子一卷被下候、御使予被仰付候、則持遣候、返札長橋殿迄懸御目候也、

〔言緒卿記〕七月廿八日、壬寅、天晴、請取番ニ參、論語講尺兩足院被申、致聽聞了、

〔孝亮宿禰日次記〕^四 九月六日、庚辰、晴、於禁中、論語御講尺有之、忠利依召參之、

關白鷹司信尚ヲ罷メ、前關白准三宮二條昭實ヲ以テ之ニ代フ、

〔公卿補任〕^{二五} 七月廿八日、關白宣下、上卿中御門大納言資胤卿、奉行職

事頭辨兼賢朝臣、

關白 從一位

藤信尙 辭退氏長者、^{二十六}

同昭實 七月廿八日、詔關白、^{六十} 氏長者内覽牛車隨身兵仗等如舊、

前左大臣 從一位

藤昭實 前關白、^{六十} 准三宮、七月廿八日、關白還任、

〔諸家傳〕^{中一} 二條昭實 ^{晴良} 公男 元和元年七月廿八日、還補關白、^{六十} 者内覽牛車

隨身兵仗等如舊

〔諸家傳〕

^{下一} 應司信尙 ^{信房} 公男 元和元年七月廿八日、辭關白、

〔弘誓院亮孝記〕

^一 七月廿八日、^壬 晴、二條殿 昭實公 關白宣下、御再任 上卿中

御門大納言資胤卿、奉行職事藏人頭弁兼賢朝臣、參仕弁光賢、大内記、大外記師生、左大史孝亮、少外記中原生職、史三善英芳、少内記安倍盛勝、

宣旨 官方三通卷籠懸帶一枚

左中辨藤原朝臣兼賢傳宣、權大納言藤原朝臣資胤宣、奉 勅、宜令關白

從一位藤原朝臣如舊爲藤氏長者、

元和元年七月廿八日 中務大輔兼左大史竿博士小槻宿禰孝亮 奉

左中辨藤原朝臣兼賢傳宣、權大納言藤原朝臣資胤宣、奉 勅、從一位藤

原朝臣宜如舊令内覽万機者、

元和元 中務大輔 孝亮 奉

左中辨藤原朝臣兼賢傳宣、權大納言藤原朝臣資胤宣、奉 勅、宜令關白

從一位藤原朝臣乘牛車出入宮中給者、

元和元年七月二十八日

三八三

元和元年

中務大輔

孝亮 奉

〔義演准后日記〕

九十

閏六月十一日、二條殿ヨリ熟瓜一折拜領、關白職御再任之由被仰出云々、御辭退可被成由也、

七月十日、早朝金地へ罷向、○中略、眞言宗法度ノコト、及ビ豐國社破毀ノコト、收ム、次ニ條殿關白職再任之事等物語、

十一日、二條殿關白職再任、昨夕御請被申入云々、珍重々々、

廿七日、大雨、明日二條殿關白宣下云々、珍重々々、及兩度御禮ノ儀ニ付、二條殿ヨリ飛脚來、

○昭實ノ關白ヲ罷メ、豐臣秀吉之ニ代ルコト、天正十三年七月十一日

ニ、信尙ノ關白トナルコト、慶長十七年七月二十五日ニ、昭實ノ關白ヲ

罷メ、即日薨ズルコト、元和五年七月十四日ニ其條アリ、

神龍院梵舜、增鏡三冊ヲ家康ニ獻ズ、

〔梵舜日記〕

九十

七月廿八日、壬寅、陰、二條之御城へ罷出、增鏡三冊、以傳長老上申也、御機嫌也、御仕合也、

〔附錄〕

梵舜二條城ニ候ス

〔梵舜日記〕

九十

七月廿日、甲午、天晴、二條之御城へ罷出、及御目覺也、(見)

廿二日、丙申、天晴、二條之御城へ罷出、

廿三日、丁酉、天晴、二條之御城へ罷出、

廿四日、戊戌、天晴、二條之御城へ罷出、

廿六日、庚子、天晴、二條之御城へ罷出、

廿九日、癸卯、天晴、二條之御城へ罷出、

卅日、甲辰、天晴、二條之御城へ罷出、無御出座、

○家康、片山宗哲ヲシテ、金地院崇傳ニ牒シ、梅尾地藏院所藏ノ智者大師別傳ヲ覽ント、便宜左ニ合致ス、

〔本光國師日記〕

八十

八月廿日、與安法印八月十四日之狀岡崎ヨリ來、兩替座之者歸上候由候、道惠方ヨリ智者大師別傳之本、梅尾之坊主ニ申候、次飛脚よて下候へとの狀也、彼梅尾之坊主ハ、無案内ニ候間、法身院迄、則折紙遣ス、案左ニ有之、

急度申入候、梅尾之坊主那古屋ニ在、別傳之本上申度由、與安法印迄被申由候、重之儀と被申、被返由候處、達上聞、其本早々御用ニ候間、從拙老方、

元和元年七月二十八日

三八五

家康智者大師別傳ヲ覽ント

梅尾地藏院所藏別傳ヲ家康ニ獻ゼン

元和元年七月二十八日

三八六

次飛脚ニ可指下由上意之旨、只今從法印飛札到來候間、梅尾之坊主ニ御尋候、別傳之本早々是迄可給候、彼坊主者無案内ニ候間、貴老ニ可被申立候、油斷有間敷候、恐惶謹言、

八月廿日

金地院

高雄 法身院 法座下

追申候、梅尾之坊主若又于今那古屋ニ逗留候哉、左様ニ候者、其様子具ニ御報ニ待入候、以上、

八月廿一日、法身院ニ返書來、案在于左、

昨日者尊札之趣、具ニ令拜閱候、抑別傳之義蒙仰候、則梅尾ニ御札相添慥ニ申達候、共、地藏院此中令他行候條、留守居者ニ申付、方々相尋、京都知音衆皆々不殘尋申候、留守人隨分情を入申候、共、于今地藏院居所知ニ不申候、多分者名古屋ニ罷越候ハ、不存義ニ候、自然自路も歸山仕候者、其上可申上候、隨分方々相尋申候、共、宿所不存候條、非疎略候、早々可及尊當候處、方々尋申候條、延引仕候、可預尊免候、恐惶頓首、

高雄山

片山與安
之ヲ返却
ス家康急ギ
トス之ヲ覽ン
崇傳旨ヲ
高雄法身
院ニ傳フ

法身院ノ
返書

地藏院某
ノ行方ヲ
搜索ス

八月廿一日

法身院

金地院大和尚様尊命

尙々、昨日戌刻御折紙到來以來、唯今迄晝夜之境も亦く、方々相尋申候、共、地藏院居所知ニ不申候、留守居之者、只今迄京都方々相尋候由、大形念を入候得共、爰元近邊ニ罷居不申候、自然名古屋ニ罷越候ハ、不存候條、疎意ニハ無御座候、以上、

右之狀ニ書狀相添、宗哲へ次飛脚にて遣ス、案在左、

態以次飛脚申入候、一八月十四日、從岡崎之御狀、一昨廿日、塗師道惠所ニ持越令拜見候、日限遅相届候間、不審ニ存、道惠書狀相添懸御目候、一別傳之義被仰越候、則梅尾相尋候、共、地藏院も今一人之坊主も不罷居由候間、高雄法身院へ折紙を遣尋させ申候、從法身院如此之返書にて御座候、彼坊主名古屋ニ逗留候哉、不審ニ存候、今日も歸山候者、別傳取寄急度次飛脚にて可進候、聊不存油斷候、當月十九日以書狀申入候、相達申候哉、一拙老儀、一兩日中ニ河内へ罷越候、彼地作事共申付、隙明次第可罷下候、其書中ニも如申入候、其内も早々罷下可然候者、便宜ニ御狀可

元和元年七月二十八日

三八七

崇傳地藏
院搜索ノ
顛末ヲ宗
哲ニ報ズ

元和元年七月二十八日

三八八

被下候、御前御次多之刻者、可然様ニ御取成奉頼候、恐惶謹言、

八月廿二日

金地院

與安法印様入々御中

一書令啓候、與安法印ハ飛札到來候、梅尾ニ有之別傳、次飛脚よて可差下由上意之旨、如此申來候、梅尾之坊主尋候へ共、留守よて本無之候間、其理申、與安迄返書差下候、次飛脚被仰付被遣、可被下候、拙老をりよてハ、路よて油斷も可有之候條、文箱之上ニ、貴様之御名をも被遊付被遣候て可被下候、猶様子使僧可得御意候、恐惶謹言、

八月廿二日

金地院

板伊州様入々御中

與安法印ハ別傳之義申來、折紙伊賀殿へ遣間、案認置在左、

急度申入候、然者梅尾之坊主、於名古屋ニ、知者大師之別傳之本御前へ上ケ被申候、僧正様御下之刻、持參被申候へと申候て、我等本返し申候へハ、御用之由被成御意候間、御尋被成候て、次飛脚にて御下候て可被下候、い

梅尾ノ僧
別傳ヲ家
康ニ呈ス

まゝ名古屋ニ逗留被申も不存知候へ共、自然梅尾へ罷歸候はんかと存申上候、恐惶謹言、○家康ノ名古屋ニ到着スルコト、八月十日ニ其條アリ、

與安法印

八月十四日

宗哲判

金地院様御侍者中

尙々別傳之本いそき御下し候て可被下候、憑存候以上、

○家康、林道春ヲシテ、金地院崇傳ニ牒シ、秀忠ノ爲ニ、記録ヲ求メシムルコト、便宜左ニ合致ス、

〔本光國師日記〕

八月廿八日、松平河内殿飛脚來、九月廿七日之狀來、則

返書遣ス、

一舊事記

一故事記

一律

一令

一續日本記

一續日

本後記

一文德實錄

一三代實錄

右

將軍様へ被爲寫可然記録、道春を以被仰出候間、此分道春へ申渡、

是ヨリ先、岡家俊ノ子平内、大坂ニ籠城ス、是日、家康、家俊ニ死ヲ賜ヒ、平

元和元年七月二十八日

三八九

内ヲ梟首ス、

〔駿府記〕七月廿九日、今日岡越前守（家俊）於妙顯寺切腹、同息平内梟首、明石掃部依爲縁座也、

〔寛政重修諸家譜〕

千二百二 岡家俊 九郎右衛門

家重 彌傳次、道和、今の呈譜、元春よ作る、

家成 平助、

家俊 宇喜多直家に在りふ、

今の呈譜よ、そしめ九郎右衛門、此ち越前守某よ作り、宇喜多秀家よ在りへ、朝鮮征伐のとき、秀家よ屬して、かの地よおもむき、慶長五年、同家の臣浮田右京亮某、戸川肥後守達安、花房志摩守正成等とおあしく、秀家の勘氣をうき、登の家をさり、越前守を南都へ蟄居し、此ち花房正成とよも、東照宮よ召出さま、采地六千石をたまふ、長男平内某、ゆへありて父の勘氣をうけ、此ち大坂の逆徒明石掃部助全登、外戚たるより、かまう手よ屬し、元和元年、落城此ち、江戸をいて切腹せしめらる、こまにより越前守も御疑をかうふり、七月六日、京都を妙顯寺

明石全登
ノ縁坐ニ
ヨル
家俊ノ系

家俊ノ履

宇喜多秀
家ニ仕フ
秀家ノ勘
氣ヲ受ケ
家康ニ仕
フ

長子平内
大坂ニ黨
ス
平内江戸
ニテ切腹
ス
家俊京都
妙顯寺ニ

テ死ヲ賜

次子家重
トナル

三子家成

明石全登
ト岡家俊
ノ關係

家康戸川
達安ノ大
坂内通ヲ
疑フ

達安強辨
シテ家康
ノ含ム所
トナル

をいて死をたまふ、彌傳次元春をその次男ありといふ、

家重 宇喜多中納言秀家よ在りへ、慶長五年、登の家を去て京師よ住し、小兒の醫葎學ふ、

家成 宇喜多秀家よ在りふ、

〔戸川家譜〕

其後合戦ノ頃ニハ、五月八日、大坂大坂方生死御詮義有、明石掃部

不知生死、岡越前守ハ、掃部嫡子平内（戸川達安）掃部と重縁なり、越前、この縁起よ

依て、平内と不和に成て、越前方流出て流浪し、今度掃部大坂へ籠るよ付て、

平内も城よ入り、京都よて大よ御穿鑿あり、肥後守ハ一所乃そ也、平内、越

前と内通之事可存と直に上意なり、内々越前守父子此間不通仕處を歴然

あり、中々内通有間敷由申上ル、御機嫌あしく御怒り、此儀知る事あらハ、汝

も同罪と上意あり、中々於私よハ申上旨差所なし、ケ様乃上意よても、別よ

申上る處ありと、御前を罷退く、後よ證據有て、越前ハ罪よ伏し、肥後守ハ初

中後内意ハ不存と證人申よより、無別義、此申様強過さるゆへ、後まゝ御心

よありしや、駿府よ詰しをのよは、御遺言乃御加増もあり、夫よ洩るとな

り、越前子平内茂尋出候へと乃よ、越前守よも被仰付、平内ハ備中の家人

平内家人ノ許ニ匿ル

平内耶蘇教ヲ信ズ

家俊ノ略歴

元和元年七月二十八日

三九二

伊賀四郎兵衛といふもの、寢所乃下よ穴淺掘て、夫婦給仕して隠し置、召使乃下女も不知とあり、六月末よ成つて、越前身上危き淺聞、平内京へ出、則肥後守預り、七月妙顯寺におゐて、越前能切腹に、平内老宗門乃よりにて請て切らる、越前二男忠兵衛といふもの御供申、江戸へ下る、於江府切腹に、宗門にあらはに、

○幕府、家俊ニ采地ヲ賜フコト、慶長九年八月三十日ニ其條アリ、

〔参考〕

〔浦上宇喜多記〕

岡越前守ハ豊前守嫡子也、家督ヲ繼テ、秀家ノ家臣明石飛驒守婿也、小田原陣ニモ勤ム、高麗陣ニモ行ケリ、慶長年中、家老役ヲ勤ム、戸川肥前守備前ヲ退テ、跡仕置ヲ仕ル、關原ノ節ハ、奈良ニ居テ出ズ、故ニ昵近シテ、備中ノ内ニテ七千石下サル、大坂亂ノ時、明石掃部ト縁者タルユヘ、長子平内大坂ニ籠ルニツキ、後ニ京ニ於テ越前モ平内モ切腹ス、二男忠兵衛ハ江戸ニ於テ切腹シ、家絶ルナリ、

〔武德編年集成〕

八十 七月廿九日、洛陽妙顯寺ニ於テ、岡越前守眞綱備中内八千石ヲ領ス、浮田カ舊臣也、誅ニ伏ス、其嫡子平内モ斷戮セラル、二男忠兵衛ハ東武ニヲ

岡平内ノ耶蘇教信仰

前田玄以ノ孫切腹

〔浮田秀家分限帳〕

一高貳万三千三百三拾石
岡元忠豊前守ノ父、家俊
イテ死ヲ賜フ、是ハ平内舅明石掃部介全登、耶蘇宗門ニテ、平内モ彼宗ニ歸伏シ、去年神君ヨリ、彼徒原主水ヲ坐セラレント有シニ、主水出奔シ、平内カ許ニ隠ル、ヲ露顯シ、平内ヲ放逐有シ處、大坂へ籠城ス、此科ニ依テ、岡父子三人ヲ誅セラル、○家俊、原主水ヲ隱匿スルコト、慶長十七年三月二十一日、幕府、耶蘇教ヲ禁ズル條ニ見ユ、三

〔附録〕

〔元和年録〕

乾 七月廿九日、德善院孫、於高安寺切腹

〔武德編年集成〕

八十 七月廿九日、前田德善院玄以ガ孫二人、○中略、氏家殺ノコトニ其條アリ、本京妙覺寺ニ於テ誅セラル、

三十日、丙辰公家衆門跡ヲ禁中ニ召シ、曩ニ定ムル所ノ禁中公家諸法度ヲ

頒チ給フ、

〔土御門泰重卿記〕

七月廿九日、晴天、近衛様ヨリ參候へ之由承候、則參

候、明日四時可致朝參候由、御振有之也、

卅日、晴天、諸公卿諸門跡有父母兄弟者一人不殘參内、御法度之書立傳奏廣

元和元年七月三十日

三九三

元和元年七月三十日

三九四

橋大納言御攝家前ニテ被讀候、重而書付寫可申候、覺悟候、
〔言緒卿記〕七月卅日、甲辰、天晴、禁中ヨリ公家門跡被召、將軍家ヨリ被申法
度、又從上被仰出法度被仰渡、重而可寫者也、

〔義演准后日記〕九十七月廿九日、及黃昏從京都、明日可參內由注進、

晦日、晴、出京、已初刻着宿坊、傳奏廣橋大納言江使者遣、何時可參內哉、尋暫休
息、二條殿ヨリ御使、軀而參內可有同道云々、鷹司殿、隨門、勸門、同道參內、祇清
涼殿、諸家諸門不殘出仕、大御所被出法度、各可存知由被仰出、兩傳奏彼一書
披露、各傾耳聞了退出、其以前御酒肴種々被下、

〔孝亮宿禰日次記〕四七月晦日、甲辰、晴、自關白殿二ヶ兩種拜領、依將軍大
御所法度書條々有之、今日諸家參內、各承之者也、極薦參之、

○禁中公家諸法度ヲ定ムルコト、十七日ニ其條アリ、

故秀賴ノ夫人德川氏千江戸ニ歸ル、

〔駿府記〕七月廿七日、御姫君關東御下向、內々雖相定、依雨降御延引云々、

晦日、已刻、御姫君關東御下向、阿茶局其外女中數百人御供、警固安藤對馬守、
〔寒松日記〕一八月廿日、晚御姫様着御、○寒松、コノ時、江戸ニアリ、

〔元和年錄〕乾八月廿日、大坂之姫君江戸へ御下着、七月晦日、伏見を御出、

安藤對馬守御供仕、お阿茶局以下女中百人御供也、

○故秀賴夫人德川氏、大坂城ヲ脱スルコト、五月七日ニ、本多忠刻ニ再
嫁スルコト、元和二年九月ニ其條アリ、

〔附錄〕

〔本光國師日記〕七十五月廿七日、御ひめ、東山へ御成ニ付、三重の折箱

上、御あちや、魚まで文遣ス、御あちや、魚へも、もろ白二つ折一つ上、松首座ニ
遣ス、

〔梵舜日記〕九十五月廿七日、癸酉、天晴、姫君様爲御見物、清水祇園三十三間

大佛已下御覽之由也、豐國へモ可有御參詣ヲ、大坂之穢中御憚之由仰ニテ、
無御社參候由也、予在所ニ令滯留、俄急罷歸也、

〔譜牒餘錄後編〕十一伊勢兵庫旗本五

覺

大坂落城之節、拙子窄人仕候處、天壽院様御耳ニ入、世忤之義不苦候間、早々
二條之御城へ參上可仕之御意ニ、與方へ被爲召寄罷在候、折節天壽院様

元和元年七月三十日

三九五

元和元年七月三十日

三九六

御座所^ハ御成被遊刻致御目見權現宮様世間廣御免殊京都之屋鋪迄致拜領有難上意于今屋敷所持仕候以上、

正月廿四日

伊勢兵庫

切腹ノ場

家康故氏家道喜ノ大坂籠城ノ故ヲ以テ其子左近内記八丸ニ死ヲ賜フ、

〔駿府記〕

七月晦日今日氏江内膳息男三人於妙顯寺^ハ、^家駿府政事録ニ切腹

是者父内膳入道大坂籠城故也云々、

〔武德編年集成〕

八十八 七月廿九日、^略中氏家内膳入道道喜ガ二男左近三

末子一人
天海ノ弟
子トナル

男内記四男八丸京妙覺寺ニ於テ誅セラル末子一人南光坊天海ノ法弟ト

成テ死ヲ遁後愛宕山康樂院ノ住侶トナルト云々、

〔元和年錄〕

乾 同廿九日氏家内膳子息於京妙覺寺切腹^{大坂籠城}

○氏家道喜大坂ニ籠城シテ豐臣秀頼ニ殉ズルコト五月八日ニ其條アリ、

〔參考〕

〔明良洪範〕

三 〇上略氏家道喜豐臣秀頼ニ殉ズル内膳浪人ノ後ニ男子

兩人出生セシヲ三男ヲ南光坊天海ノ弟子ニナシ四男ヲ八丸ト號シ未

左近等處
刑ノ有様

幼少成リシカトモ父内膳御敵對シタリシ罪ニ依テ嫡子左近二男内記四

男八丸三人トモニ京都妙光寺^(覺分)ニ於テ切腹シケルト也此時ノ有様ヲ見タ

リシ齋藤玄了ト云シ醫師ノ語リシハ虎落ノ中ニ敷皮ヲシカセテ三人座

ニ並ビ右近ハ二十四才内記ハ二十才八丸ハ八九才計ニ見ヘシ何レモ無

雙ノ美男ナリ八丸事ハ未タ幼少ナレバ不覺ノ事モ有ルベキカト思ヒケ

ルニヤ嫡子左近八丸ニ向ヒ御邊ハ我等ニ先立ベシト申ケレバ八丸カ曰

某事ハ未ダ腹切ヲ見ザルニ依テ如何様ニ切テヨカラシ存ジ申サズ候間

御兩人ノ御切腹ヲ見テ某モ左様ニ切申サントイフニ依リテ左近ハ彼レ

ガ様子未練ノ事モ有間敷ト思ヒ然ラバ我等ト内記ガ切腹ノ様子ヲ能見

テ汝モ其如クニセヨト云聞カセ左近諸肌脱ギ一文字ニ引廻シ首ヲ打タ

シム其時八丸ノ面色少シモ替ラズ身縊ヒシテ肌ヲヌギケルニ見物ノ老

若見ルニ絶ヘズシテ一同ニ聲ヲ立テ泣出シ皆々門外へ逃出セシト也八

丸ハ靜カニ脇差ヲ取テ弓手ノ脇ニ突立シニ其儘首ヲ打落サレケルト也

三男ハ南光坊ノ許ニ有リケルガ神君二條ノ城へ入ラセ給ヒシ時天海彼

ノ小僧ヲ具シテ御前ニ出テ氏家内膳コト此度大坂へ籠城仕候ニ付其子

四子八丸

元和元年七月三十日

三九七

天海弟子
ノ有免ヲ
請ヒテ許
サル

東叡山ニ
入院ス

山城康樂
寺ノ住持
トナル

矢野十左
衛門西川
八右衛門
永井助十
郎伊東猪

元和元年七月是月

三九八

供等御成敗ナサレ候段、御尤ニ存シ奉候、但シ此小僧ハ、拙僧ガ弟子ニ仕置ケルナレバ、一向ニ御免下サルベシト願ハレケレバ、神君聞シ召シ、氏家ハ古太閤ノ恩ヲ忘レズシテ、此度秀頼ガ最期ノ供ヲセシハ義士ナリ、然レバ出家ヲシタル子迄罪スベキ道理無ク思ヒ給ヘトノ仰有シトゾ、後年南光坊、彼ノ小僧ヲ召具シ、武州東叡山ニ入院シ給ヒケル、其頃寛永寺ノ坊中ニ、一人ノ浪人有リケルガ、俄ニ狂氣シテ本坊ニ切入リケレバ、兒喝食等ハ云ニ及バズ、年長シタル者迄モ逃込シニ、彼ノ内膳ガ三男ノ若小僧出向ヒテ、狂人ヲ組伏セ、持タル刀ヲ奪ヒ取りケルトカヤ、コレ氏家代々勇氣モ血氣モ連續セシ事ト、皆人々大ニ感心シケル、祖父ノ名迄モ著シケル、後ニ山城國愛宕山康樂寺ノ住持トナリケル、

是月、家康、故豊臣秀頼ノ臣屬ヲ采祿ス、

〔寛政重修諸家譜〕四百八 大橋重保長左衛門、剃髮號、元和元年、大坂落城ノ、ち片桐兄弟、茂よひ、其陣よあまゝもの、畠山民部大輔政信、毛利兵橋重次、矢野十左衛門、西川八右衛門、永井助十郎、伊東猪左衛門、某等、皆本領、茂たまひか、と、重保は痛手、茂負、蟄居せし故よ、其列よあけら、次、上

左衛門

畠山政信

毛利重次

長井正次

下略、重保、片桐且元ニ從ヒテ、茨木城ニ退クコト、及ビ元和三年、秀忠ニ仕フルコト等ニカ、ル、慶長十九年十月一日、ノ條ニ收ム、

〔寛政重修諸家譜〕

九十

畠山政信

致仕、號、休山、民部

母ハ貴志氏、元和元年

七月、京都にをい、を、て東照宮ヲ拜謁シ、寛永元年十月より、江戸よ來リ、ま、は、り、へ、た、く、は、つ、り、攝津國八部郡乃、うち、に、を、い、て、采地三百石を、あ、り、心、○下略、寛永諸家系圖傳、異事、ナシ、

〔寛永諸家系圖傳〕

百三

毛利重次

兵橋

大坂御陣のとき、市正ヲ屬シ、

大權現ヲ、ま、さ、の、ひ、ま、く、ま、つ、る、此、よ、上、聞、リ、達、を、め、し、出、さ、れ、く、市、正、ヲ、屬、せ、ら、れ、

〔寛政重修諸家譜〕

六百二

毛利重次

兵橋

母ト、お、く、且、元、卒、シ、テ、男、出、雲

守、其、弟、半、之、丞、爲、元、に、屬、シ、テ、か、の、領、地、攝、津、國、茨、木、み、あ、り、○上、下、略、重、次、片、木、城、ニ、退、ク、コ、ト、及、ビ、寛、永、十、七、年、家、光、ニ、仕、フル、コ、ト、等、ニ、カ、ル、慶、長、十、九、年、十、月、一、日、ノ、條、ニ、收、ム、

〔寛永諸家系圖傳〕

六十

長井正次

勝左衛門、生國、同前

元和元年七月より、大權現

を、よ、び、台、德、院、殿、よ、は、ら、へ、と、ま、つ、る、と、し、四、十、六、歳、よ、し、て、死、を、法、名、梅、岳、淨、意、○寛政重修諸家譜、異事、ナシ、

○六月采祿セラレシモノ、及ビ采祿ノ月日詳ナラザルモノ、便宜左ニ

元和元年七月是月

三九九

合敘ス、

加藤正方

〔寛永諸家系圖傳〕

六十九 加藤正方庄兵衛尉 祖父光成一あいき子とほそ

しめは秀頼の許りあり、元和元年六月、めし出されて大權現よはりへまつる、そのち台徳院殿をよび將軍家よつりへまつり、いま齋藤攝津守り組り屬し、御小姓組乃番をほそむ、

織田元信

〔寛永諸家系圖傳〕

五十五 織田元信主水左衛門 幼少より織田信雄りはり

その後秀頼よつりふ、大坂御陣の後、めし出されて、東照大權現りはりへまつり、江州栗本、甲賀二郡よをひく、領地二千石をよほる、

片桐貞隆

〔寛政重修諸家譜〕

六十三 片桐貞隆主膳 元和元年、江戸よはり、台徳院

殿よはりへたてまつり、こほそし加増ありて、すへ一萬六千四百石、淺領に、まろち千三百石餘を、さたよ預らまし、與力此給知にあてらば、

青木一重

〔寛政重修諸家譜〕

六百六 青木一重忠助、所右衛門、民部少輔 城ヲ知り、剃髮スルコ

トニカ、ル、本年四月、替のち二條城よをいり召出けまふ、ひ東照宮よはりへまてまつり、父り采地、茂合を、攝津國豐島、兎原、備中國後月、小田、淺口、五郡、及ひ伊豫國此うちをいり、一萬二千石餘を領し、豐島郡麻田よ住

井上利義

〔寛政重修諸家譜〕

九百八 井上利義初利中、小作、次兵衛 父がために質となりて、大

坂の城中にあり、元和元年五月七日、落城のとき、のがれて八幡の社僧岩本坊がもとに潜居す、そのち板倉伊賀守勝重をよび、織田有樂、父定利とよび、たしきにより、相ばかりて崇源院殿になげき申せしにより、東照宮これをきこしめされ、その君のために戦死せしもの、子なれば、御にくしみなしとて、二條城にめされ、初めてまみえたてまつる、時に十歳、このとし江戸にまいり、台徳院殿につかへたてまつり、○下略、寛永諸家系圖傳、異事ナシ、父定ニ六日ノ條ニアリ、

○青木一重卒スルコト、寛永五年八月九日ニ、マタ、伊東長次采祿セラ

ル、コト、本年五月九日ニ、各、其條アリ、

〔参考〕

〔武徳編年集成〕

八十八

大坂七組頭ノ一員、青木民部少輔一重ハ、今春秀頼ノ使節トシテ上京スル處、神君是ヲ抑ヘ留ラレシガ、落城ヲ聞テ、斷髮シ、高野山ニ隠ル、是人ハ昔年今川ノ從士タリシカ、氏眞沈淪ノ時ヨリ、神君ヘ仕

青木一重
大坂落城
後高野山
ニ隠ル

へ、姊川ノ軍ニ眞柄十郎三郎直隆十郎左衛門カ子也ヲ討捕、一重ガ弟モ、御當家ノ臣河澄氏ガ養子ト成リ、源五郎重經ト稱シ、味方ガ原ニ忠死シ、其末弟次郎右衛門可直モ、頃年神君へ奉仕ス、一重ハ先年御家ヲ退テ、丹羽長秀ニ仕ヘケレレ、其父民部少輔重直入道法印、故太閤秀吉ニ仕フルユヘ、一重モ又秀吉ニ昵近シ、七隊ノ長トナリ、勇武ノ譽有ヲ以テ、遂ニ神君召テ、大坂ノ本領ヲ賜リ、諸侯ニ列ス、

伊東長實

同ク大坂七隊ノ長伊東丹後守長實ハ、落城ノ後、高野山ニ至リ蟄居シケルカ、召テ舊領ヲ賜リ諸侯ニ列ス、世ニ稱スルハ、京尹板倉伊賀守秘計ヲ盡シ、去冬陣ノ節、其臣朝比奈兵左衛門ヲ伊東ガ方へ附置、當夏陣ニハ、同人ヲ樋口淡路守ニ屬セシメ、其内應ヲ得テ、城方ノ謀略ヲ聞届言上スルユヘ、丹後守遂ニ恩許ヲ蒙(ル)リト云ヘリ、然レレ、彼樋口淡路守事ハ、板倉ヨリ免許ヲ乞ヒシガ、神君御許容ナク、秀頼ノ簾中ノ庖厨大隅與五左衛門トレニ浪客ト成ル、佐々孫介ハ裏切ヲ約シ乍ラ其沙汰ニ及バズ、亂後色々虚言ヲ吐テ、賞ヲ貪ラントセシカバ、神君甚ダ憎ミ玉ヒ、是ヲ誅セラルト云々、

織田信高

織田主水信高ハ、信長ノ連枝武藏守信行ノ孫ニシテ、七兵衛信澄ノ子也、二歳

ノ時、父信澄、舅ノ明智光秀ニ與シ、大坂城中ニ亡滅ス、時ニ信高、乳母ガ懷ニ入テ、邊土ニ隱レ、成長ノ後、藤堂高虎カ許ニ隱ル、庚子ノ亂ニ、高虎ガ留守トシ、豫州今治ニテ戦功ヲ顯シ、其後秀頼ニ仕ヘ、今度モ前ニ記スル如ク、茶磨山下ニテ、傑然タル退口、神君敵ナガラモ、其勇敢ヲ感セラレ、御家人ニ列シ玉フ、其名ヲ三左衛門ト改ム、彼母ハ頃年大坂ノ簾中ニ仕ヘシカバ、亂後ニ簾中ノ御吹舉モ有リシト云々、

畠山正信

常徳院惠林院二世ノ柳營ノ管領タリシ畠山尾張守政長ガ四代ノ後裔次郎四郎正信、頃年大坂ニ遊歴シ、片桐ハ彼舊臣タル故、其助力ヲ得ル處、片桐兄弟大坂ヲ退去シケレバ、政信モレニ離散シ、去冬當夏兩陣ニ列シ、聊軍功ヲ遂ル、故台徳公ヨリ召テ、祿ヲ賜リ、高家ニ列セラル、後民部ト改ム、遂ニ入道シテ休山ト號ス、故太閤秀吉以來、片桐市正ガ與力タリシ毛利兵橋重政、織田掃部介、信正カ外孫、小林太兵衛元長、長井助十郎正次、本領ヲ安堵メ、市正嫡子出雲守高俊ガ組トナリシガ、其子孫、時ヲ得テ御直參ト成ル、同主膳正貞隆ガ與力ニテ、同ク大坂ヲ退去セシ、矢野十右衛門、於丹波、領七石川八右衛門、於攝津、領三百廿石、伊藤猪右衛門、於同州、領百六十石、本領ヲ安堵シ、元ノ如ク貞隆ニ附屬セラル、然ルニ其苗孫、常憲

毛利重政

井上利儀

三好直政

淺井政賢

公ノ時、直臣タランコヲ直訴ノ、各改易セラレ、齋藤新九郎利之入道道三ガ庶子長井隼人利道ガ子井上小左衛門利定ハ、秀頼ノ臣トシテ、五百石ヲ領シ、騎士五十人ヲ預リ、戰場ニ命ヲ殞ス、神君其舊家ヲ斷シ、コヲ憐ミ玉ヒ、其子治兵衛利儀時ニ十歳ニシテ、二條ノ城ヘ召テ、御家人ト成シ玉フ、

秀頼ノ臣田屋茂左衛門政高ガ子三好左馬介直政モ、其母關東ノ大御臺所ト從弟タル故、遂ニハ百人扶持ヲ賜リ、御家人ニ列セラレ、是人ノ子ヲ石見守政盛ト稱ス、又淺井周防守政賢ハ、備前守長政ノ落胤ニシテ、淀殿并ニ關東大御臺所ノ連枝ナレ、大坂落去以後、恩許ノ御沙汰ナク、京極忠高ノ領内若州小濱ニ蟄居シ、斷髮ノ作庵ト號ス、

八月 乙巳 朔盡

一日、乙巳、日蝕、

明白ニ見

〔土御門泰重卿記〕

一 八月一日、日蝕、初寅七刻、加時卯三刻也、日出卯一刻五分ナレハ、蝕六分ニテ候故、日出卯一刻五分ニ蝕之、鉢明白見申候、殊更前將軍他方蝕之由、被仰付マシキコニ候ナト、被仰候處、諍論出來、トカク一日之蝕ヨキ證據ナシト被申候處、明白ニテ満足不過之候、日出卯一刻ナレハ、加時復末マテハ卯七刻四十六分、よて候間、見間敷事更ニ無之候、傳長老古則詩聯ナトヲハ知候共、他之道ヲ難知候、無用サシテ也、

〔言緒卿記〕

八月大一日、乙巳、天晴、日蝕也、
八月一日、日帶蝕、十五分内十三分、寅卯辰、日出卯時、所見十二分、

〔節季蝕記〕

八〇朝野舊聞哀稿、八百十八所載 八月一日、日帶蝕、十五分内十三分、寅卯辰、日出卯時、所見十二分、

公家衆物ヲ獻シ、八朔ヲ賀シ奉ル、家康亦馬ヲ獻ズ、

〔中院通村日記〕

一 八朔、早旦八朔風俗禁中十帖丁子二斤進上、女御十帖錫瓶一双進上、依宣中御宰相、御障母正忌、障、母正忌、番理仍參請取、渡菊黃門、少時有番衆御尋候、予之由申入了、今日牛飼童彌一丸千ナフ丸候御禮、於清涼殿西庭有此事、北第二間撤格子垂簾、女中内侍被候之、兩人庭上ニ跪御禮了、メテタイ、如此二

元和元年八月一日

四〇五

日蝕ニツキ土御門泰重ト金地院崇傳ノ異見

八朔ノ御賀

牛飼童參候、賀辭ヲ賜フ

元和元年八月一日

四〇六

泰重御札
ヲ獻ズ

禁中ヨリ
家康ニ物
ヲ賜フ

勅作ノ燒
物

山科言緒
院御所ニ
參賀ス

參禮ノ公
家衆及ビ
門跡衆

前大樹大御所也

音自簾中被仰即退、自東關御馬進上、如例年、馬毛御使□□□被候兩傳奏、
〔土御門泰重御記〕 一 元和元年八月、八朔之御禮禁中、院御所、女院御所、國
母此御四所へ進上、以上札かず五十枚入也、

一日、院御所へ御禮、則御對面、國母へ御禮、御留守也、禁中御番、從將軍御馬進
上、清涼殿階前左右馬寮口取、其作法有之畢、從禁中、將軍へ被遣候物ハ、中鷹
一束、長柄チャウシ、ヒシヤダ、橋ヲ銅ニメツキヲサシ、鈴ノヤウ實ヲ五ツシ
テ、其中ニ勅作ノ燒物、其橋ニ枝葉御座候、三色被遣、御使兩傳奏也、

〔孝亮宿禰日次記〕 四 八月大一日、乙巳、晴、依將軍家八朔御馬參、傳奏披露
有之云々、自極薦忠利御太刀獻上、下札姓名ニ有書之、札披露、太刀即被返下
儀也、參所々御禮、

〔附錄〕

〔言緒卿記〕 八月大一日、乙巳、天晴、日燭也、御對面仙洞、次近衛殿、同政所、二條殿、女御
御所、女院御所參ル、

親王、公家衆、門跡等、二條城ニ抵リ、八朔ヲ賀シ、家康ノ東歸ヲ餞ス、

〔駿府記〕 八月朔日、出御南殿、御禮二條殿、近衛殿、八條殿伏見殿、鷹司殿、一條

殿、九條殿、其後門跡衆妙法院、梶井宮、竹内曼珠院、一乘院、三寶院、青蓮院、大乘
院、隨心院云々、其後諸公家衆各御禮、其後信乘院門跡御禮、

〔中院通村日記〕 一 七月朔日、今日昵近衆御禮也、予如何之由語冷泉、可罷

出云々、仍進物調之、大鷹大緒三具包長高檀紙、大緒如此書也、於廣間御對面、親

王攝家門跡公家衆濟々、殿上人ハ於御書院在此事、依御草臥云々、○中略、南

カ、コトニ書院へ渡御之時、於予有御氣色、又宸前諸家御禮於書院申御禮、有

御氣色、令御供出廣間者也、

〔言緒卿記〕 八月大一日、乙巳、天晴、日燭也、前大樹へ各御餞ノ進物アリ、予少

將條五ツ儘持參申了、

〔義演准后日記〕 九十 八月朔日、晴、大御所爲御暇乞、諸門跡出仕、智門、竹門、予

一乘院、青蓮院、隨心院、勸修寺御禮、此已前、先二條當關白、次近衛左大臣、次八

條一品親王、次伏見親王、次鷹司大閤、次九條殿、次一條殿、凡此通次第御禮ノ

由傳聞了、今度法度、大臣ノ下親王ニ相定了、仍、左大臣ノ下八條宮被着云々、

群參以外也、近日御下府云、八朔云、進物以下驚目了、午刻已前歸宿坊、暫休息、

歸寺了、

元和元年八月一日

四〇七

親王大
座次ニ
ノッキ
法度
ノ實行

〔梵舜日記〕^{九十} 八月大一日、乙巳、天晴、予二條之御城へ罷出、次塗師紹佐五、五ツ、鏡屋助左衛門^{錫香合}持來也、次諸門跡諸公家悉御禮也、

〔土御門泰重卿記〕^一 八月一日、公家衆、御攝家、門跡、二條城へ進物御持參候、御禮御座候、雖然予父子、家君之御煩之故不參候、各御不審之事候、

〔附録〕

〔言緒卿記〕 八月二日、丙午、陰、前大樹へ被出衆、廣橋大納言、三條大納言、冷泉中納言、中院宰相中將、予等也、

三日、丁未、天晴、前大樹へ被參衆、六條中納言、冷泉中納言、中院宰相中將、久脩朝臣、予、定好朝臣、孝治等也、

〔土御門泰重卿記〕^一 八月三日、晴、天、家君二條へ出仕也、晚ニ雨降也、

〔梵舜日記〕^{九十} 八月二日、丙午、天晴、二條之御城へ罷出、

三日、丁未、天晴、二條之御城へ罷出、

南蠻人、二條城ニ家康ニ謁ス、

〔駿府記〕 八月朔日、出御南殿、^{○中略、八朔ノ禮、}其後黑舟南蠻人御目見云々、

〔中院通村日記〕^一 七月朔日、^{○中略、通村、二條登、}今日黑船々人大將歟上^カ

公家衆家康ニ謁ス

黒舟南蠻人

上乗大將

物ヲ家康ニ獻ズ

和蘭人家康ニ謁ス

乗大將トやらん云者五六輩申御禮、昨日も參、然共無御對面、予、冷等、此時於西方縁ニ見物、^{此處ニハ、長老、唯心、南光、其外御家人等之、}外無他人、雖然於予者、依冷誘引候彼所、

〔梵舜日記〕^{九十} 七月卅日、甲辰、天晴、二條之御城へ罷出、無御出座、南蠻人爲御禮罷出、黒船來候由也、種々進物無比類也、

〔參考〕

〔駿府記〕 閏六月廿九日、黒舟着岸之由、自長崎註進、後藤少三郎言上之、

○以下和蘭人上京シテ、家康ニ謁スルコト并ニ葡萄牙船來泊及ビ西班牙船ノ事ニカ、ル、

DIARY OF RICHARD COOKS.

Vol. I. pp. 22, 33, 35, 36, 43, 49, 50, 51, 52, 75, 76.

August 8. [1615]— * * * * * We had news this day

that the Portingales of Amacau have taken the bark *Jaccatra*, * * * * *
 But, within 2 howres after, the bark *Jaccatra* arrived on the coast of Firando, and brought in a Portingall junk which came from Champa, wherein both Chinas and Japons are marreners. She took her on this coast 3 daies past, at an iland called Sta. Clare. Her lading is black wood, I think ebony. It is thought the Portingales will complaine to the Emperour, because the Hollanders take them within his dominions.

August 9.— * * * * *
And about midnight past the other Holland shipp, called the *Ancusen*, of som 300 tonns, arrived in the roade (or harbor) of Cochi. And after nowne both shippes came into the harbour of Firando. And I went aboard of them, and carid 2 barrills wine, a hoggs, 5 hense, and 10 loves bread to the greate ship; 1 barrell wyne and the lyke quantety of the rest to the littell ship.

September 1.— * * * * *
Capt. Speck came to English howse, being ready to go up to Miaco.

September 4.— * * * * * And Capt. Speck with other merchant came aboard her [the English ship *Hozander*], he being ready to departe for Miaco: and he presently did, and had 3 peeces ordnance for a farewell, and we the lyke when we returned ashore. And they shot 3 peeces more after out of the Duch howse. * * * * *

September 5.— * * * * *
Capt. Speck departed towards Miaco, and had 2 vollers small shot out of the *Jacatra* and 5 peeces ordnance out of their greate ship, and charged againe and gave 3.

October 17.— Before nowne Capt. Speck returned from Miaco, and had 3 peeces shot out of Duch howse and 6 out of greate shipp for a welcom. I went to the Duch howse to vizeet hym, and he tould me, yf he had wanted but 2 howers tyme at his arival at

Miaco, that the Emperor had byn gon before he had com; and that he with his owne mouth tould him that the Portingall junck they had taken was good prize, both men and goods, and all other they took hereafter to be the lyke, both of them and Spaniards, yf they had not his passe, but, having it, not to meddell with them.

July 14. [1615]— * * * * *
Ther was reportes geven out that 2 shippes were seen ofe at sea neare Langasague, whereof Jno. Yoosen advised Capt. Speck. Soe he sent out a penisse to look out for them; but I esteem it to be common Japon news, which most an end prove lyes. Yet the Duch expect a ship from Bantam or Molnees, besides the bark *Jacatra* from Pattania and a junck.

August 5.— Thear is reportes geven out that the Portingal shipp is arrived at Langasague from Amacau, and presently after Capt. Speck wrot me a letter that it is the same greate shipp which was there the last yeare; but, as Jno. Yoosen hath advised hym, she is not soe well laden as she was the yeare past, but, as it should seeme, cometh more to fetch away the lagg they left heare the last yeare then for any thing else.

August 8.— * * * * *
And he [the China Captain, Andrea Dittis] adviseth me that 4 juncks are arrived at Langasague from Chancheu, which with this ship from Amacau, will cause all matters to be sould cheape.

August 20.—I received a letter from Capt. Adames from Cochin, dated this day, how a bark with Spaniards from Langasague put into that roade and came from Malhia in shipping. * * * * *

〔リチャルド・コックス日記〕一六一五年

八月八日、元年中略、新曆六月二十四日ニシテ、元和本日、天川のポルトガル人ジャカトラ號を捕獲せりと、報を得たり、略中然るに、其後二時間を経ざるに、ジャカトラ號は、平戸海岸に到着し、且占城より來りしポルトガル船一隻を伴ひ來れり、該船の船員は、支那人及び日本人にして、ジャカトラ號は、三日以前、此の海岸のサンタ・クレールと稱する島にて、該船を捕へしなり、其積荷は、黒き木なり、予の考にては、之は黒檀なるべし、ポルトガル人は、皇帝の領内に於て、蘭人が拿捕を行ひしとにつき、皇帝に訴ふるところあるべしと思はる、

八月九日、元年中略、元和元年閏六月夜半を過ぎし頃、アンキウーセンと稱せる約三百噸の和蘭船、河内の港に著せり、而して午後に至り、右二隻共平戸に入港せり、予は兩船に至り、大船には酒二樽、豚一頭、家鶏五羽、竝にパン十箇

蘭船捕獲
テ平戸ニ
入港ス

蘭船平戸
ニ入港ス

蘭船長
平戸ヲ發
シテ京都
ニ赴ク

すべつく
平戸ニ
歸著ス

すべつく
家康ニ
謁ス

葡船拿捕

小船には酒一樽竝に其他の品同量を贈りたり、略○下

九月一日、元年中略、元和元年七月キヤプテン・スベックスは、京都に上るべき準備をなし、英國商館に來れり、

九月四日、元年中略、元和元年七月キヤプテン・スベックスは、將に京都に向け出發せんとし、他の商人一人と共に、同船○英國船に來れり、而して彼は間もなく出發せしが、其際送別の爲め、大砲三門を發射せり、吾等が陸に歸る時も亦同様なりき、其後又、和蘭商館より三門を發砲したりき、略○下

九月五日、元年中略、元和元年七月キヤプテン・スベックスは、京都に向け出發せしが、ジャカトラ號より二回小銃の一齊發射をあし、又彼等の大船よりは、砲五門を發射し、更に裝藥して三門を發射せり、

十月十七日、元年中略、元和元年十月午前キヤプテン・スベックスは、京都より歸來し、和蘭商館より大砲三門、大船より六門を發射して、彼を歓迎せり、予は和蘭商館に赴きて、彼を訪問せしが、彼は予に次の如く語りぬ、彼の京都到着が、若し二時間遅かりせば、皇帝は其の到着前、既に出發せられしならん、又皇帝は自ら彼に向ひて、彼等が拿捕せしポルトガル船は、其乗員及び貨物共

ニツキ家
康ノ命

元和元年八月一日

四一四

に善き鹵獲物なり、又今後彼等の拿捕すべきものは、通航免状を有せざる限り、ポルトガル人及びイスパニヤ人に屬するものは、之と同じかるべし、されども通航免状を有するものは、決して手を加ふべからずと語れり、略

葡船來航

葡船長崎
ニ著ス

七月十四日、○中略、新曆二十四日ニシテ、元和元年六月二十九日ニ當ル、二艘の船、長崎附近の海上に現れしとの報あり、ヤン・ヨーセンよりキャプテン・スペックスに之を通知せり、因てスペックスは、之を索めん爲め、ピネス船を派遣せり、然れども予は之を以て例の日本の報道にして、後に虚報たること判明すべきものと認め、但し蘭人はパタニヤよりジャカトラ號外ジャンク一艘の來る以外は、バンナム又はモロッカ諸島よりも、一船の來航を豫期せり、
八月五日、○元和元年閏六月、ポルトガル船、天川より長崎に著せりとの報あり、其後間もなくキャプテン・スペックスより、書面を以て、該船は昨年長崎より來りし大船と同一のものありとの通知あり、然れどもヤン・ヨーセンが、彼○すべつくよ告げし所より依るは、該船は昨年○すべつくの如き多數の積荷あり、

西班牙船
來航

寧ろ昨年當地に殘し置きしものを搭載し去る爲めに來れるが如し、
八月八日、○中略、元和元年閏六月、又彼○支那頭人あんすは、ジャンク四艘漳州より長崎に著せしことを告げたり、此は天川より來りし船と共に、悉べての貨物の廉賣を餘儀なくするに至るべし、○下略

八月廿日、○元和元年七月七日ニ當ル、予は本日附、河内發のキャプテン・アダムの書狀を受取れり、書中には、イスパニヤ人の乗組める小船一艘、長崎より同港に入港せしこと、又彼等は船にてマニラより來りしことを記せり、○下略

○本年閏六月二十一日、西班牙國王ノ使節浦賀ニ來り、次デ、家康ニ謁スルコト、慶長十八年九月十五日、伊達政宗、支倉常長ヲ羅馬ニ遣ス條ノいすばにや使節ノ項ニ見ユ、

二日、○丙午、家康、大德寺ノ僧宗眼○天叔、紹長○松嶽、宗珀○玉室、ヲ召シテ、佛法ヲ聽ク、

〔駿府記〕 八月二日、○中略、中院通村源氏物語ヲ講ズルコト、其後紫野大德寺

長老天叔、松嶽、玉室召三人、一人宛佛法之事令聞給、南光坊僧正、金地院御次之間伺候云々、

元和元年八月二日

四一五

幕府、鹿苑院ヲ相國寺長老西堂ノ輪番所トナス、尋テ、顯暲叔鹿苑院ヲ退ク、

〔鹿苑日録〕五二十 八月二日、鹿苑院、相國長老西堂衆可爲輪番之旨、金地院

板伊州、以兩判發申達□□□、○傍注ハ、本書ノ表紙ニ、コレト同様

日野唯心
駿府ニ赴ク

八日、老父唯心○日野 今日下向駿府、於日大納言殿爲餞送、見設朝炊、予亦赴矣、廣

橋大納言殿來臨、愚拙近日爲退當院、匆忙不能送老父之行、於日亞相之宅而別、

顯暲退院

十一日、今日遣諸道具於慈照院、退鹿苑而到慈照院、

〔本光國師日記〕八十

鹿苑院輪番ノ順序

鹿苑院輪番之儀被仰出ニ付、長老西堂之前後御尋候、長老者先、西堂者可爲其次と存候、但貴寺之御法度者不存候、恐々謹言、

八月廿四日

板倉伊賀守

金地院

相國寺

尊報

〔鹿苑僧錄歷代記〕 听叔顯暲嗣有節保 元和元乙八月十一日、听叔退院

○顯暲鹿苑ニ入院スルコト、慶長十八年二月九日ニ其條アリ、

三日、丁未家康、二條昭實ノ子康道、九條忠榮ノ子忠象ニ、各、銀ヲ贈ル、

〔孝亮宿禰日次記〕四 八月三日、丁未、晴、自將軍大御所、白銀百枚宛、被進二

條殿御方御所、九條殿御方御所、

〔義演准后日記〕九十 八月四日、晴、大御所御下國、二條殿御方、九條殿御方兩

所へ銀百枚つゝ、被參云々、

四日、戊申家康、駿府ニ還ラントシ、是日、京都ヲ發ス、

〔駿府記〕 八月三日、明日四日、關東可有御下向由、被仰出云々、

四日、午刻大御所京都出御、申刻膳所渡御云々、

〔言緒卿記〕 八月四日、戊申、天晴、前大樹御下向東國、山科迄暇乞ニ被參衆、大

公家衆山
科ニ見送ル

炊御門大納言、廣橋大納言、花山院大納言、轉法輪大納言、三條大納言、日野大納言、六條中納言、飛鳥井中納言、烏丸中納言、廣橋中納言、徳大寺中納言、西洞院宰相、水無瀨前宰相、万里小路宰相、土御門左衛門佐子、高倉右衛門佐、花山院中將、飛鳥井少將、烏丸右少辨等也、

元和元年八月三日 四日

四一七

〔土御門泰重卿記〕

一 八月四日晴天、大御所駿河へ御下向珍重也、家君路次迄送被申候、晚雨降、

〔梵舜日記〕

九十 八月四日、戊申、天晴、前將軍御下向、午刻予粟田口邊罷出、

〔義演准后日記〕

九十 八月四日、晴、大御所御下國、

〔孝亮宿禰日次記〕

四 八月四日、戊申、晴、將軍大御所今日御下、也、

〔春日社司祐範記〕

八 慶長二十乙卯年日次記 八月九日、大御所様去四日ニ駿河へ御歸國、江戸將軍様去廿八日御下國也、

〔東大寺雜事記〕

二 八月四日、大御所様駿府御下向、

〔高野春秋〕

四十 八月朔日、諸將士御禮儀畢、山徒賜御暇歸峯矣、四日、神君二條出御、

〔細川家記〕

忠興八 八月十六日、忠利君へ之御書、

〔元和先鋒錄〕

二 八月四日、大御所様駿府に御發駕、和泉守御見立申上、笠城置越ニ國元に罷歸候、

〔元和先鋒錄〕

二 八月四日、大御所様駿府に御發駕、和泉守御見立申上、笠城置越ニ國元に罷歸候、

○家康ノ駿府ニ入ルコト、本月二十三日ニ其條アリ、

秀忠、江戸ニ還ル、

高野山僧侶ノ歸寺

藤堂高虎ノ歸國

秀忠江戸ヨリ家康ノ機嫌ヲ問フ

〔池田文書〕

○二 備前

今日四日、致歸城候、何時分京都出御被成候哉、御機嫌之様子承度候、此由相心得可申上候也、

八月四日

本多上野介とのへ

(秀忠) 花押

〔薩藩舊記増補〕

御二 文庫拾六番箱十二卷中

一 公方様今月四日ニ此地へ御付被成候、此表一ノ不無事ニ候ま、心也、
かるへく候、迄よし、ウハる事なく候、○上下略、伊東祐慶歸國ノコト、竝ニ國ノコト等ニカ、ル、七月十四日、及ビ是冬條ニ收、
八月廿四日、附、川越、大膳外三名宛、署名、冬書狀、
○秀忠伏見ヲ發スルコト、七月十九日ニ其條アリ、

〔参考〕

〔神君御年譜〕

五 元和元年乙卯

八月朔日、大樹至三嶋、

二日、大樹至箱根、

三日、大樹至藤澤、

元和元年八月四日

四一九

元和元年八月五日

四二〇

四日、大樹還入江戸、
〔元寛日記〕一 八月朔日府中、二日蒲原、三日三島、四日小田原、五日藤澤、六日江戸着御、

〔附録〕

〔寛政重修諸家譜〕百六十九 米倉昌繩傳五 元和元年、大坂御凱旋のとき、相

模國藤澤の御旅館にをいて、台徳院殿、父永時をめされ、義繼實子ありやと問せらるゝのところ、なきむね言上せしかば、昌繩をめされ、兄義繼が戦死のことを思ふめさるゝにより、その遺跡をたまふのよし仰をかうぶり、大番に列す、○義繼戦死スルコト、五月七番に列す、日、岡山方面戦況ノ條ニ見ユ、

五日、己家康、水口ニ入り、滯留三日、近江代官長野友秀、小野貞則、及び觀音寺住僧ヲ召シ、松平忠輝ノ長坂信時等ヲ殺害セシ事情ヲ聽ク、又、林道春ヲシテ論語ヲ講ゼシム、

家康提督湖ヲ渡ル
松平忠輝ノ秀忠ノ侍臣ヲ殺

〔駿府記〕 八月五日、朝之間小雨降、已刻從矢橋御乗船、水口御止宿、今晚仰曰、今度越後少將殿上洛之刻、於森山草津邊、江戸御家人長坂某、伊丹某不慮行合處理不盡截殺之由、始而立御耳、奇怪之由御氣色不快、仍、召本多上野介、其子細令

害セシコトヲ調査ス

問給處、右之風説雖有之、委不存之由言上、又近江代官長野内藏允、小野宗左衛門、觀音寺ヲ召、其許爲近邊之間、定可存之由被仰出處ニ、申云、上總殿御出不存、長坂某、伊丹某參會之處、前駈之者共、少將殿御前乘打仕條、狼藉號曲事截殺之云々、○駿府政事録、截殺之云々ノ下、道春奉從焉、霖雨留御、三日、道春侍談論語學而篤、時、道春三十三歳トアリ、
六日、依雨御逗留云々、
八日、同依雨御逗留云々、

〔駿府政事録〕 五 八月七日、同御逗留、○水口ニ滯留セリ、今日矢野八介、尾張宰相殿爲使節來、○此記事、駿府記ニ見エズ、

〔元和年録〕 乾 八月五日、自矢橋御舟ニある水口ニ御着、今日御陣所御上洛

之刻、草津森山ニある上總介殿御旅宿之前ニある將軍様衆長坂六兵衛、ちや伊丹彌藏と申者喧花仕、上總殿衆ニ理不盡こうされ申候由聞召、本多上野ニ御尋被成候處、努々不存由申上候間、則所之代官長野内藏助、小野宗左衛門ニ被仰付、所之者ニ御尋候へ者、何も右うされ候衆、上總殿御休を不存、傳馬ニ乗急候て通り候處を、乘打狼藉仕由申、大勢押懸切殺申候由、委細達上聞候間、殊之外御立腹也、六日、七日、八日御逗留、

家康忠輝ノ暴狀ヲ怒ル

元和元年八月五日

四二一

元和元年八月五日

四二二

〔寛政重修諸家譜〕

二百二

長坂信宅

小十郎、彦五郎、ちや利九郎、今血鎗の九郎

信次 作兵衛、小血鎗、茶利九郎、血鎗丹波守

信時

六兵衛

長坂信時

信時 母ハ上におれ、石原貞繼の女

台徳院殿より往くへきまつり、小十人を

はとむ、元和元年、大坂御陣より供奉す、ときに信時、近江國守山の驛より、上總介忠輝朝臣より前を乗打せしとく、その無禮をとかめられ、かの朝臣のためふうたふ、のちこの事兄信次、東照宮より愁訴まうするところ、かの家臣等十人を誅せらるゝの上、恨申しきむね仰をかうぬる、○信次、弟ノ横死ヲ秀忠ニ訴フルコト、九月十日條所引ノ元寛日記ニ見ユ、

〔寛政重修諸家譜〕

二百七

伊丹康直

大隅守

勝久 彌藏

勝久 母は上にねなし、岡部美濃守常慶が女、台徳院殿につかへたてまつり、小十人をつとむ、元和元年、大坂御陣に供奉するのところ、近江國守山の驛にいて、長坂六兵衛信時、富士與四右衛門信友とおなしく、馬上にして上總介忠輝朝臣の前を過り、かは、その無禮を咎められ、かの朝臣の爲に害

せらる、

〔寛政重修諸家譜〕

三百七

富士信重

又市郎、市兵衛

信友 與四右衛門

富士信友

信友 母は某氏、台徳院殿につかへたてまつり、御小性をつとめ、采地四百石を知行す、元和元年、大坂御陣のとき、近江國守山の驛にいて、長坂六兵衛信時、伊丹彌藏勝久とおなしく、上總介忠輝朝臣の前を乗うちせ、かは、其無禮を咎められ、彼家臣等に討る、年十七、

〔丙辰紀行〕

水口

去歲 ○元和元年 八月四日、大相國二條乃御所を出御ありて、翌日此所より着せ給ふ、其日より打續き雨ふりされ、三日逗留まゝ、夜更にきて、御前より余を侍り、時學而乃篇をよめと仰され、跪ひらたえんをり、能竭其力能致其身とあはれ所を、ミウから御讀ありて、能といふ字に心はたき、なきなり、おぼさりにて、忠孝をちかたし、親より力をつくし、君に身身をいさげといはれ、以侍まはされるといふ評論あはれ、と仰され、余もか乃趙苞の故事引て答へ奉り、只今わをれり、さくて、す、おぼれを

家康ノ論語解釋

元和元年八月五日

四二三

元和元年八月五日

まほり侍る、

愛生從子親義立自君臣侍讀古年雨淚痕今日人、

〔本光國師日記〕

八十

八月十一日北見五郎左衛門の知行所可渡由之折紙

來返書遣案在于左、

貴札拜見忝存候、大御所様御送ニ水口迄御出候處御機嫌能御暇被遣直

ニ御代官所へ被成御越候由尤存候然所ニ小堀遠江殿の飛脚參候夜

通ニ御上洛之由、扱々御大義共無申討候、○下略、八月十四日附北見五郎

日、幕府、河内眞觀寺ニ、寺
田千石ヲ賜フ條ニ收ム、

○家康、忠輝ノ驕惰ヲ憤リ、勸當ヲ命ズルコト、九月十日ニ其條アリ、

〔參考〕

〔雜話燭談〕

二十

上總介殿大坂出陣、付伊丹長坂誅戮、并就遲參諸將拔登

事

忠輝長坂
信時等ヲ
斬ル

○上略、忠輝、大坂出陣ノ途、花井主水ヨリ、是ヨリ御馬ヲ馳テ、江州守山ノ驛

ニ到リ玉フ、斯ル處へ、武者二騎若黨十二三人宛左右ニ立テ、馬上ニテ少將

殿ト摺合テ通リケリ、忠輝卿ノ家人是ヲ咎メ、何者ヲ下馬セヨト聲々ニ呵

血鎗九郎
來ノ名ノ由

ス、件ノ武者答テ、我ニ二人ノ主ナシ、豈下馬センヤト云テ乘通ル、少將殿ノ
兵、大ニ怒リ、汝等下馬セシト云フ、其子細ヲ聞ント、大勢ニテ追掛ル、彼士
見之、大勢ニ追掛ラレ、不叶ト思ヒケレハ、馬ヨリ飛下、彼へ其馬ヲ乗放シ、其
邊ニ茶屋ノ有ケレハ、逃込タリ、是故ニ追手ノ者、打捨テ通リケル、然ル處
へ、忠輝卿來リ玉フニ、件ノ武者走り出、太刀ヲ拔テ討テ掛ル、御供ノ軍士等
ハ、先手ノ輩追込タルコトヲ不知、狼藉者ヲ打留ント、皆太刀、長刀ヲ拔持テ取
圍ム、彼者見之、此度モ逃走ル、于時平井三郎兵衛ト云者、遁サント不透追詰、
無手ト懷ク、安西右馬允同追掛來テ、彼者、差殺ス、依之何者ト云子細
ヲ不知、皆御供シテ上洛ス、○下略

〔附錄〕

〔兵家茶話〕

四

長坂氏、姓之弓削、平岩、都築同祖也、としめ三刃額田郡大林

ヲ住す、長坂太刀帶と號す、其裔長坂彦五郎信政、清康公に仕へ、武功を勵ま
し、あそく、鎧を以て其功をあし、血鎧よ乾くとときあし、時の人稱せし、清康

公使者を賜ふて、血鎧九郎と號ス、俗茶利九郎と云、其子彦五郎信宅、神君よはらへ、

又血鎧九郎と號ス、武勇父よおとらす、其子權七郎信吉、台徳公よ仕へ奉

元和元年八月五日

四二五

四二四

り、其子彦五郎忠尙ハ、本多内記ニ仕ヘ、茶利九郎と稱セ、二男一正之、信吉嗣と成テ、權七郎と號スと也、

青木盛吉
矢橋新藏
矢橋渡海
奉行トナ

〔青木氏系圖〕

廿二代

盛吉改盛景、青木次郎、甲斐守、從五位下、辨 慶長十九年、攝劔

大坂御陣之節、家康公へ被召出、大坂兩御陣ニ、江劔矢橋渡海之奉行盛吉、矢橋新藏兩人ニ被爲仰付、大坂落城之後、江劔草津ト石部之間ニ、盛吉ヲ雖被爲召、病重ニ依ル、君命ヲ不請、

六日、庚戌家康、上皇ノ女御近衛氏ニ、酒ヲ獻ズ、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月六日、雨天、一條殿致祇候、折節從前大樹家康公、

伊豫名酒
ヲ折臣ニ
賜フ

國母様へ伊豫名酒進上、則樽御内衆被下候處、參合、國母御前、大酒衆終日御雜談とも申上、御悦喜也、予退出前後不覺候、近代沈醉也、御懇比様子辱事也、雨終日無止候、

十日、甲寅家康、名古屋ニ抵ル、徳川義利直義出デ、之ヲ迎フ、家康、滯留兩日、義利ニ美濃ノ地三萬石ヲ加賜ス、

水口ヲ發
ス

〔駿府記〕 八月九日、雨屬晴、卯刻水口出御、勢州龜山渡御云々、

十日、未明龜山出御、今晝水谷九左衛門、於四日市、獻御膳、從夫御乘船、申刻渡

御于名護屋、宰相殿爲御迎令出給云々、
十一日、名護屋御逗留、於美濃國知行三萬石、宰相殿爲御加増被遣云々、
十二日、雨降、同御逗留云々、

〔恩榮錄〕

上 元和元年

水曾谷三
萬石加賜

八月十一日
加三萬石

合六十一萬九千九百石餘

信州水曾
美濃内

尾張宰相義直卿

○本書合計
高誤アラシ

慶長十二年、移封ノ時、慶長十七年、加封ノ時、及ビ元和五年、加封ノ時、ノ祿高ヲ考フルニ、此時ハ加増三萬石ヲ合セテ、計五十六萬九千五百石ニシテ、元和五年、五萬石加増アリテ、本書ノ祿高ニ達スルガ如シ、本

〔編年大略〕

乾 慶長二十年乙卯

八月四日、神君御出京、還路被爲入名古屋城、御逗留二日、

古老傳説、御逗留二日云々、雖然同日不詳、野史雜記等云、八月四日、神君御

出京、五日水口御止宿、前夜膳所、依雨三日御逗留、九日龜山、十日被爲入名古屋

城、二日御逗留、十三日御發馬、所々御滯留、廿三日駿城御還坐、

今回於名古屋御仕置等被仰置、且濃州之内御加増三萬石被進云々、傳言、神

君被召原田右衛門、御婚禮已後、御臺所費用一日幾何乎、右衛門言上曰、一日

凡黃金壹枚云々、是故水曾谷御加増被進云々、

家康義利
ノ一日ノ
入費ヲ問
フ

元和元年八月十日

四二八

名古屋城惣曲輪御指圖も今度被仰付、尾張名古屋徳家譜異事ナシ

〔敬公實錄〕 二 元和元年乙卯

八月十二日濃州高三萬貳千貳百八拾貳石四斗五升七合、

但川並及木曾御拜領云々、

傳云、今月四日、神君名古屋御逗留之内ニ、原田右衛門被召、御婚禮以後、御臺所費用ハ一日何不ト、御尋あり、右衛門言上曰、一日凡黄金壹枚と申上ル、此故ニ木曾谷御加増可爲進ト云々、駿河与出羽之秋田と木曾ト三ヶ所、いつまも一日ニ付黄金壹枚つゝ、運上ニ付、木曾を被進云々、

右堀氏留

〔尾君御系譜〕 義直公 元和元卯八月、於美濃國三萬貳千貳百八十二石七

斗五升七合、及木曾山御拜領、山村子村等御附屬ニ相成、

○義利尾張ニ移封セラル、コト、慶長十二年閏四月二十六日ニ、美濃ノ地三萬二千石ヲ加賜セラル、コト、同十七年是歲ニ、マタ、美濃ニ於テ五萬石ヲ加増セラル、コト、元和五年五月十六日ニ、各其條アリ、マ

木曾谷ノ運上

山下道智加増

山村氏尾州家ニ屬シ木曾谷ヲ支配ス

良安邸ノ子ヲ受ク江ノ地ハ良勝邸ノ賜

マ、義利ノ名古屋ニ還ルコト、七月十四日、幕府諸大名ニ暇ヲ賜フ條ニ見ユ、

〔附錄〕

〔山下家覺書〕 大坂夏御陣落城候て、權現様御歸陣被爲遊、於二條御城、山下

道智、冬夏御陣中能相勤候由ニ、爲御褒美、御加増五百石拜領仕候、權現様

上意ニ、御加増拜領仕候者、此時尾州之諸士之内ニ、道智一人之由、道智常

々申候、○上下略、元祿十四年八月二十日、織田宮内宛、山下道智書狀

〔山村系圖傳〕 濃信 良勝 元和元年、以木曾令賜源亞相義直卿、是以爲尾

陽侯之附庸、自斯之後、世綜戎於福島關、而服事尾陽、則宅福島、以爲木曾境内

之督也、歲首寒暑使者、致于江府、(到カ)厥筐搗栗氷餅、賜以御書、

〔木曾舊記錄〕 四信濃 良安公 初良弘公、子 同年尾州に御附屬仍る御屋

敷地御拜領、四十坪

〔岐岨風土記〕 一信濃 山村家系譜 良勝 山村甚 元和元年乙卯夏御陣ニモ、

同ク命セラル、○慶長十九年大坂冬役、從 同年、江府芝金杉ニテ、屋敷地二千

四百廿三坪拜領ス、同年神君ノ命ニ依テ、父子尾藩ニ附屬ス、

元和元年八月十日

四二九

長安木曾
ノ代官ヲ
辭セシメ
トテ請フ

木曾ハ家
康直領ト
同様

〔心計記〕

○山村傳記

七郎右衛門長安

大坂御陣二三年前、慶長年中ニ、

木曾を尾張様に被爲進候付、本多佐渡守殿大久保十兵衛殿を以言上被成候ハ、此度木曾谷中、尾張様に被爲進候就夫拙者御代官之儀差上申度奉存候、御關所之儀ハ、木曾御先手仕候依戰忠被仰付候へ、御關所者何分ニモ相守可申候ト被仰上候處、尤ニ被思召候、併御子様に被進候へ者、御直領同意之事候、其上御恩賞ニ御朱印を以被仰付候間、只今之通り、末々共に相守候様ニと、兩御所様上意之旨被仰出之、勿論尾張様も、右之趣、成瀬隼人正殿を以、被仰渡候故、當時ニ至リ御勤被成候、尾張様始、此筋御通被遊候へハ、御膳御上御一宿被成候、其節御腰物御上被成候、あふより御腰物被下候、并一通り之御時服被下候、何も御紋付、御隱居様歟、奥様御座候へハ、夫々被下物有之候、家老中其外給人七八人程つ、御目見御座候、其内家老中ハ、御時服一宛被下候、

興禪寺

長福寺

定勝寺

所之物一色つ、差上、御目見被申上候刻、御時服一宛被下候、

右ハ始、御通御祝儀也、古來、如此候、又其節之首尾ニ寄、御拜領物も有之

候、

此儀ハささはり、事にてハ無之候、

○木曾代官山村長安ノ義利ニ附屬セラル、コト、慶長十六年四月二日、長安、筑摩郡宮越以下五村ノ法規ヲ定ムル條ノ附録ニ見ユ、

十二日、^丙幕府、攝津味舌邑主織田長益ノ封ヲ分チ、四子長政ニ、大和攝津

ノ地、五子尙長ニ、大和ノ地、各一萬石ヲ賜フ、

〔續武家補任〕

上十三

從五位下

^{織田}平長政

^{源五長益}入道

元和元年月、分封

一萬石、^{解織田}

〔續武家補任〕

上十六

從五位下

^{織田}平尙長

^{源五長益}入道

元和元年八月十

二日、分封一萬石、

〔恩榮錄〕

上

元和元年

分知一萬石

大和

^{有樂四男}織田丹後守長政

分知一萬石

大和

^{同五男}織田武藏守尙長

〔寛政重修諸家譜〕

上四百九

織田長益

^{有樂}刺髮

元和元年の役よ、仰よより

て京師あり、のち一萬石を四男長政よ、一萬石を五男尙長よわちあふ

同尙長

織田長政

、其餘の一萬石をもつて、養老の料とす、

長政丹後守 元和元年、父の封地大和國式上、山邊、攝津國嶋下三郡のうちよをいて、一萬石をわうちまひ、廩米の官よおさめらる、

尙長武藏守 元和元年八月十二日、父長益の封地大和國式上、山邊二郡のうちよをいて、一萬石をわうち賜ひ、後式上郡柳本を居所よ定む、

〔織田家譜〕

源吾從四位下侍從平長益入道有樂ハ、備後守信秀ノ十一男、

贈太政大臣信長ノ弟ナリ、略 元和元乙卯年八月十二日、長益所領三萬石

ノ内、四男左衛門佐長政ニ和弐戒重後芝村、一萬石、五男大和守尙長ニ和弐

柳本一萬石ヲ分、自ラ一萬石ヲ領ス、長益ノ意、頼長ノ嫡子三五郎長好ハ、嫡

孫ナルヲ以テ、時ヲ待チ幕府ニ請テ、コレニ讓ラントス、頼長カツテ大坂ニ

在リシ故ヲ以テ遅々ス、會遽ニ病テ卒ス、年七十五、葬洛東建仁寺、法名如庵

有樂號正傳院、時ニ元和七辛酉年十二月十三日ナリ、故ニ宿志ヲ果サス、後

コレヲ公收セラル、

一萬石ハ
好長孫ニ
讓ラント
ス

南光坊天
海ノ奏請
ニヨル

聽聞ノ衆
目ヲ驚
ス
庚申待

土御門泰
重御物忌
ヲ獻ズ

〔織田家譜〕 長政 元和元年乙卯八月十二日、父長益所領之内配分食一萬石采地於大和國城上郡、山邊郡之内、及攝津島下郡之内、居和弐戒重、尙長 元和元年乙卯八月十二日、父長益所領之内、配分食一萬石采地於大和國式上郡、山邊郡、宇陀郡之内、居于本州柳本、

○長益卒スルコト、元和七年十二月十三日ニ其條アリ、

十六日、庚申、上皇源氏物語ヲ講シ給フ、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月十六日、朝齋、御庚申、依召院參、予、西洞院少納言、

山科三人、御とき此衆也、晝ハ叡山南光房望申、辱モ太上天皇源氏物語御講

尺聽聞衆阿野宰相、中院宰相、右衛門佐予、則院御所へ御本申出聽聞、皆々驚

目耳候申下刻雨降、從禁中召候由承候へ共不參候、

〔言緒卿記〕

八月十六日、庚申、雨、庚申待ニ參、源氏物語御講被成、南光坊被所

望云々、聽聞之衆南光坊、阿野宰相、中院宰相、時直朝臣、予、永慶朝臣、親顯泰重

等也、

十八日、壬戌、御靈祭、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月十八日、雨天、御靈御祭禮、御物忌進上也、禁中三

枚院御所へ廿枚、女院御所へ廿枚、國母へ廿枚つゝ也、未刻雨降罷也、御祭禮御輿御渡、珍重也、

二十日、子、甲院御所甲子御遊アリ、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月廿日、晴天、甲子、則院御所へ致祇候候、悉ひすま

ハ、御見物、各々見物也、西洞院父子、山科右衛門佐、甘露寺、園侍從、北畠祭主、予、傀儡相終、夜マテ如常、其内西洞院宰相、同子、山科祭主、予也、鷄鳴之時分退出申候、

〔言緒卿記〕

八月廿日、甲子、仙洞ヨリ被召間致伺候、エヘスカキアリ、次甲子

待御慰ニ被參衆、西洞院宰相、同少納言、予、種忠、泰重等也、

○院御所甲子待御遊ノ、本年中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合敘ス、

〔土御門泰重卿記〕

一 十月廿一日、晴天、御甲子、各々禁中祇候、予計院參仕

也、晚雨降也、

○禁中甲子待ノコト、正月十七日ニ其條アリ、

二十一日、丑、乙禁中天台宗論議アリ、

〔言緒卿記〕

八月廿日、甲子、明日禁中ニ天台宗論議被申故、元服間、同記録御

夷廻シ御見物

傀儡

夷昇

南光坊天海證義

八月二十三日天台宗論議

湯島天神

酒事仕了、

廿一日、乙丑、天晴、禁中天台宗論議アリ、各參、予モ參了、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月廿一日、晴天、禁中御論議在之也、叡山衆、尤南光

房正義者也、講師ヤクシユ院也、於小御所在之也、於題不轉安心成佛果否事、予祭主召也、

〔孝亮宿禰日次記〕

四 八月廿一日、乙丑、晴、於禁裏、召台家僧論議有之、極鵠

忠利御召參之、

○禁中天台宗論議ノ、本月中ニカ、ルモノ、便宜左ニ合敘ス、

〔言緒卿記〕

八月廿三日、丁卯、天晴、禁中天台宗論議アリ、予御理申、令不參了、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月廿三日、晴天、依召朝參、如一昨日、山衆論議役者

正義、南光坊、講師、竹林房、題ハ四門得道、有非空非亦有空門非非有門

足利學校禪珠

寒江戶ニ抵リ、秀忠ニ謁ス、

〔寒松日記〕

一 八月十九日、江戸參府、棹河口船過湯島天神、到旅店、

廿日、遣書於伯州、(寄山邊)

廿一日、早從伯州書來、晝登城進梨、

元和元年八月二十二日 二十三日

四三六

廿二日、齋了、往佐州、喚予於臥内、晤語々々、了出時、賜綿衣與袴、歸時過對州主、(安藤重信) 第皆不值、於倡菴、晚炊、歸時以輿送贈、予江邊、晚景眺望而已、

廿九日、夜半雨到曉止、早出芝阜、過桶河百塚、黃昏沙路、黑入庠門、

〔寒松稿〕

四 元和元年乙卯八月二十一日、入江戸金城、謁見右府將軍、

蓮社、合宗如竹林、殘生、樗散、鬢毛侵、拔城、猛將還軍旅、天下英雄無二心、

二十二日、(丙寅)南光坊天海、禁中ニ摩訶止觀圓頓章ヲ講ズ、

〔言緒卿記〕

八月廿二日、(丙寅)天晴、禁中圓頓者講尺、南光坊被申故參了、

二十三日、(丁卯)家康、駿府ニ入ル、明日、秀忠、酒井忠利ヲ遣シテ、其歸城ヲ賀ス、

〔駿府記〕

八月十三日、屬晴、巳刻名護屋御動座、岡崎着御云々、

十四日、參州吉田渡御、明日、遠州中泉可有、着御之由被仰出云々、

十五日、中泉渡御云々、

十六日、御滯留云々、

十七日、依雨御逗留云々、

十八日、同雨降云々、

禪珠大坂
平定ヲ賀ス

名古屋
出立ス

駿府ニ著
ス

十九日、御逗留云々、

廿日、懸河渡御云々、

廿一日、駿州田中着御云々、

廿二日、御逗留云々、

廿三日、午刻駿府着御云々、

〔本光國師日記〕

八十 九月朔日、(略) 後藤庄三、八月廿三日之狀、田中、來、

上様御機嫌能由我等儀も、御懇之上意共之由申來、

一 上様先月廿三日ニ駿府へ被成御着座由、廿四日之書狀、内膳所、參候上、

下略、九月四日附崇傳宛、板倉勝重書狀、家康、二十三日、駿府著ノコト、九月六日附板倉勝重宛、九月十五日附、本多正純宛、及、同日附、後藤光次宛、等ノ崇

傳、書狀案ニ見エタレド、
モ、異事無キヲ以テ略ス、

〔寛政重修諸家譜〕

一六 酒井忠利、(與七郎) 元和元年、大坂凱旋の後、東照

宮駿府ヲ歸らせられた、ぬふによ、八月二十四日、台徳院殿の御使として、彼地

にいさる、このとに御留守をうけ、ぬえりし、勞を賞せらきて、十五夜の御

茶壺を賜ふ、

秀忠ノ使
利者酒井忠

元和元年八月二十三日

四三七

元和元年八月二十三日

四三八

○家康ノ京都ヲ發スルコト、三日ニ、名古屋ニ著スルコト、十日ニ、各、其條アリ、

〔参考〕

〔駿國雜志〕

御事蹟

安倍郡

町頭

安倍郡府中ヨあり、

略中

町頭ノ始及

府中御由緒ノ書、

安倍川彌勒町龜屋五郎左衛門ノ藏書ヲ以て是ヲ記す

駿府御由緒ノ譯ケ乍恐奉申上候、

略上

一元和元卯年、大坂御歸陣ノ節、駿府町中名主トモ、爲御祝儀御出迎奉申

上候節、乍恐上様御通掛リ御目見被爲仰付、難有次第奉承知傳候御事、

越前ノ御家門様方御通掛ケ御目見被爲仰付、難有次第奉承知傳候御

事、

尾州様、紀州様、安部川端龜屋五郎左衛門方ニ御輿被爲掛候、其節御目

見被爲仰付、難有次第奉承知傳候事、

一右其節二三日以前ニ御通り筋掃除仕、御當日、乍恐御馳走數砂仕候段、

奉承知傳候御事、右御當着被爲遊候砌、乍恐爲御祝儀町中名主共麻上

駿府ノ名主等出迎フ

家康名主等ノ祝賀ヲ受ク

駿府總中ニ錢ヲ川與フ

下着仕、御城大手御門外迄相詰罷在候ニ、御窺申上候所、權現様大手御門西方御物見御殿ニ御出座被爲遊、御上覽被爲遊候ニ、あれ成は町頭トモ歟ト御意被爲成候段、其節ノ町御奉行并出志摩守様、彦坂九右衛門様○當時ノ駿府町奉行ハ彦坂光正ニシテ、井出正次ノ御取次ニ被仰聞、奉承知難有次第、夫ノ以來駿府名主トモ儀者、町頭ノ銘目仕候、其節爲御祝儀、惣町中壹軒役ニ付、御錢壹貫文宛被下置、町頭モ壹人ニ付、御錢壹貫文宛被下置、難有町中繁昌仕候段、奉承知傳候御事、略中

駿府新通三丁目

願人 堺屋太兵衛印

同所兩替町壹丁目

願人 吉田屋七兵衛印

寶曆十一年巳十二月

御奉行所様

〔駿國雜志〕

四十七之三

佛閣 安倍郡

府中寺

安倍郡府中傳馬町ニ有リ、

玉桂山花

陽院ト號ス、略中

華陽院由緒書云、

(元和元年)

同年九月、於當院大坂忠死ノ兩死爲靈位御法事罷出候御法要式四拾八夜

元和元年八月二十三日

四三九

元和元年八月二十三日

四四〇

を相勤申候、即御陣中御所持之黒本尊、從當御城奉遷座候、右之御佛を本尊と被遊候、只今増上寺御祈願佛是也、其節當院へ御制札之御書物を被下置候時之御奉行彦坂九兵衛殿、竹村志摩守殿ニ御座候、御書物ニ御判御座候、表之御札ニ者奉行与御座候、其文ニ曰、

禁制

- 一 鎮護法要不可有怠慢事
 - 一 殺生之事
 - 一 於當寺中狼藉之事
 - 一 竹木伐取之事
 - 一 對衆僧致非儀事
- 右於背者、急度可爲罪科者也、

元和元年九月

奉行

〔元寬日記〕

一 同廿四日、自秀忠公爲上使被遣酒井備後守忠利ヲ駿府、被伺御機嫌、其次被仰云、去年人質ニ出大野修理亮カ二男彌十郎ヲハ誅戮可仕由被仰遣、家康公御機嫌御快然タリ、備後守ニ十五夜ノ御壺ヲ被下、御返

中島重春
家康ニ認
ス

江戸傳馬
役ノ者家
康ヲ濱松
ニ迎フ
馬込勘解
由

事被遊、忠利歸ル、

〔附録〕

〔寛永諸家系圖傳〕

五八 中島重春 與五

元和元年、大坂御歸陣の時、重春

九歳より、三州吉田よをひて、初々大權現よ謁し奉時、仰よいをく、幸に小笠原權の丞○小笠原權之丞、耶蘇教ヲ奉ズルヲ以テ誅セラル、コト、長十七年三月二十一日、幕府、耶蘇教ヲ禁ズル條ニ見ユ、り没收の船あり、重春をしてこれ没守らしめよ、板倉内膳正重昌申け、重春いまた幼少に、船手此事没勤めかたし、これよ依るゑ、はらく其事をやめ、其後年經え、父重好の役をたためて、六百石没領せ、

〔驛遞志稿〕

考證

大坂落城ノ日、江戸傳馬役勘解由、其部下ノ人夫五百人

ヲ率テ、遠州濱松驛馬込橋ニ至リ、源家康ノ還駕ヲ迎ヘ之ヲ賀ス、家康大ニ悦ビ、其地名ヲ賜テ、其苗字ト爲ス、爾後馬込勘解由ト稱ス、御傳馬方舊記、

〔石橋文書〕

江〇遠

當國見付町御年貢、先年ノ御定納ニ仕來り候様子、御尋ニ付申上候、

略〇中

一見付畑方之儀、石地ニ有、地面惡敷候、六百貫文之御年貢御納所難成迷

元和元年八月二十三日

四四一

見付町役
年貢ノ減
額ヲ訴フ
新畑ノ開
墾

元和元年八月二十三日

四四二

或仕候ニ付、權現様大坂御歸陣之御時、六百貫文之内、御召らし被爲下候様ニと、中泉御殿ニ御訴訟申上候得者、其節御上意被爲遊候者、一度御定納ニ被爲仰付候上者、六百貫文之内御召らし不被爲遊候間、見付原ニ新畑を切發し、本畑之たしニ仕、未々まで、六百貫文御上納仕候得と、永井右近様、嶋田越前守様、淺井七平様、大岡兵藏様、右四人を御使ニ被爲仰付候、其時分者、六百貫文之御年貢錢上ケ申候儀、迷惑仕、町中續かなく御座候得共、右之通り被爲仰付候故、新畑を切り、茶之木、松之木、杯植置、其餘慶を以、六百貫文之定納仕申候、其時之御代官者、豐嶋作右衛門様ニ御座候、其後紀州様御知行ニ相渡り申候得共、前々之通、無御相違御定納仕申候御事、○中

延寶二年、七月

見付町

問屋判

年寄判

組頭判

家康淺間
社ニ參詣
ス

〔駿河志料〕

四十郡
安倍郡

淺間新宮

駿州總社

元和元乙卯年八月廿五日御

廣光ノ鎗
ヲ賜ハル
増上寺了
的ヲシテ
鞘ニ無字
ヲ書シム

社參、神主兵部少輔、宮内少輔召レテ、御懇ノ尊命ヲ蒙レリト云々、

家康、秋元泰朝ニ命ジ、中國西國ノ沿海ヲ巡視セシム、

〔寛政重修諸家譜〕

九百五
十八

秋元泰朝

但馬守

○上文ハ、大坂殘黨搜索ノコトニカ、ル、七月二十四日ノコ

條ニ、八月二十三日、又中國西國等の海上をあらたむるき旨仰をかうぬり、廣光の御鎗をたゝひ、其鞘に増上寺了的に命せられて、無此字を書しめら

二十四日、辰家康、麾下諸士ニ命ジ、大坂役敗走ノ徒ヲ投票セシム、

〔駿府記〕

八月廿四日、於大坂表、敗軍之輩、自他見聞入札可仕、但意趣遺恨最

負偏頗無之、書付可差上旨、誓紙可仕由被仰出、仍松平右衛門佐正久、板倉内膳正重昌、秋元但馬守泰勝奉行之云々、

〔元和年錄〕

乾

八月廿三日、駿府御着翌日、於大坂表、御供之衆剛臆之次第、

最負偏頗無之、以誓紙入札ニ仕候へ由被仰付、

〔本光國師日記〕

八十

駿府ニも御着座以後、今度之御陣場穿鑿迄ニ御座候由候、○上下略、九月四日、附、崇傳宛、板倉

元和元年八月二十四日

四四三

家康入札
ヲ一覽シ
タル後自
封ス

元和元年八月二十四日

四四六

一貳百石
 一百五十石
 一三百石
 一貳百石
 一百五十石
 一貳百五十石
 一貳百石
 一貳百石
 一百五十石
 一百石
 一百石
 一百石
 一百石
 一百石

古屋介大夫
 今枝權之介
 久保孫右衛門
 松崎七兵衛
 田中安左衛門
 遠藤理左衛門
 中井角左衛門
 鷲尾茂左衛門
 芦村彌左衛門
 豐岡平左衛門
 野村藤右衛門
 上原甚内
 八太九郎右衛門
 伊藤勘四郎
 尾關勘三郎

一百五十石
 一貳百石

高橋右衛門七
 楠本七左衛門

合三千八百五十石

申二月十八日

勝成

黑印

○印文水野
勝成寶永叶

〔徵古雜抄〕

十一中
古文書舊記類

以上

大坂古參奉公人青木千松、京町中何方成共借屋不苦者也、

卯九月六日

板

伊

賀

(勝重)
印

○家康、豐臣氏臣屬ヲ采祿スルコト、七月是月ニ幕府、大坂籠城新參諸士ヲ赦免スルコト、元和九年閏八月二十八日ニ各其條アリ、

〔參考〕

〔須藤姓喜多村氏傳〕

攝津州西成郡野里村、長喜多村氏三右衛門政信、遠尋濫陽、則鎌足公之裔孫、而保元平治之間得佳名者、山内須藤刑部丞俊通、世稱於十六條河原討死、之累葉也、受箕裘業、携弓箭道、其傳漸古、近分支派、則父者喜多村久助秀政、武藝之勇士、而永正大永之頃、屬細川家抽軍忠、以來綿々居野

元和元年八月二十四日

四四七

勝重
大坂
青木
千松
ノ住
京
都
許
ス

野里
喜多
村
長
信

政信秀賴
ノ眷顧ヲ
受ク

里村政信迨弱冠則松長彈正少弼久秀聞其由緒強加冠世私烏帽丁其四十
 八歲預秀賴之感賞者也後陽成天皇御宇十一月廿五日即位慶長十九甲寅
 之冬將有事于大坂當于此時片桐東市正且元獨出衆而通志於東照神君而
 引率諸卒乖離群士僑居攝州嶋下郡茨木館就中小出大和守吉英主于泉州
 岸和田城深湟壘堅石壁守之雖然勢微而請援兵於京城惣司諸司代也板倉伊賀
 守勝重々々曰東關之諸勢未競幸而且元在中途冀欲合力於吉英云々且元
 不獲已而遣左右之家長其一多羅尾半左衛門經河內路之山根出堺表被討
 云々其二牧野治右衛門率三十七騎之群卒分手將赴之臨攝州河邊郡尼崎
 欲艤船渡之時尼崎城主建部内匠頭光重與且元有卻故欲遂宿意私下號令
 使失舟行之通路因茲群卒踟躕矣秀賴聞之含命於大野修理治長曰片桐士
 卒不能漏一人欲使追伐而米村六兵衛同治大夫同市丞重富篠崎大膳等已
 渡野里河短兵競來之間政信點船伺河水中流而相遇米村等回顧則片桐勢
 速越神崎河既臨毛馬村進退失途將飯于茨木前鐵炮後弓矢整鑿鋒輝兵刃
 靜引退於是米村市丞歲二十有一不顧前後不問左右驀直把鑿棹前敵乘船
 而渡佃河注曰沈舟爲失謀云々以不欲追敵軍之跡政信向米村之父六兵衛曰賢郎

政信且元
ノ兵ヲ擊
ツ

政信奮戰
ス

心剛而雖勵勇氣進退未中度恐有失制之言未終自掣鑿先進渡川後群卒一
 途逐亡追奔已近豐嶋郡伊丹城步卒統領嶋傳右衛門揚高處振旄喚曰前見
 者片桐之旄主喜之助乎速開昨橫膝交肩之傍輩今握拳扼腕之讎敵皆是惜
 名思義故也互勿搆臆念急欲決勝負不引早返言未果嗚呼天哉中鉄炮被疵
 重痛扶歸于大坂爲之初軍政信前驅向敵軍鉄炮如雨中馬鼻頭馬辟易雖然
 政信強把手綱倚鞍圓繞三返謂之輪乘下馬光吉五助見此形勢急飛下我馬令乘
 之於戲主將不通志於衆爭今有此事乎與小山田高家之事蹟可并案者也政
 信乘此勢進猶急馬上而斬落敵者三人日將暮深投敵地若被遮跡則雖悔無
 益制諸卒欲引廻處米村市丞討日比野加左衛門獲首後預賞者黃金一枚此間牧野治
 右衛門勇銳而不亂伍相支可謂諸士之酋也今不討之死何休臨其砌則鄉民
 橫棒子熊手等相集如堵墻似窺左右政信下知曰通志於府君何有猶豫粵群
 卒相挑軍始散矣治右衛門亦偏無欲逃之氣望一茂樹喚曰平生之交今日相
 窮互不得退而合鑿相支相突被疵共狂政信乘懸牧野之胸上加力斬不徹此
 乃前依討敵首也急奪敵刀倒立少時嘘倚息時自後一人來曰氣息奄々我將
 助成之再三政信怒目奮發終殞首分捕彼刀今存實十月十四日黃昏也年四

政信牧野
ヲ討ツ
治右衛門

元和元年八月二十四日

四五〇

十餘哀哉勇士惜哉意氣其軍令也始言斬捨終觸捕首幸而此首不委地而遂
 實檢政信之卒香川彌次右衛門松嶋金右衛門都筑六大夫共獲首各賜賞者
 黃金一枚宛政信一番鎧一番頸并獲牧野治右衛門之首者忠勤最爲第一賚
 吳服二重黃金十枚首級合廿三入政信之手者十九後聞之當于此時尼崎城
 主建部內匠頭光重與副士下間越前守相議越守曰大坂勢幸在我地寔是籠
 中鳥網裡魚也爭得逃之速欲亡之怒眼切齒有欲進之心建部曰源大君使僕
 守此城若伺此間大坂勢競來被掠奪我城則生面目死耻辱也古謂大行不顧
 細謹片桐小也何得失大未出一騎而止矣同年十月晦日備前岡山城主池田
 左衛門督忠繼中嶋大和田村寄警船伺間逆成卒催兵變之處政信遽馳馬率
 群民不移矧刻下一大繩子分破民屋使火消滅拉敵軍者其功不可勝計就中
 阿部仁右衛門宮田平七是相司也共豫二十騎宛石田玄齋後賜吳服一名文黃
 金一枚任足輕大事聞大坂之間府君命大野修理治長使政信之伯父喜多村
 將依政信吹舉也善太夫俊久召政信於城內困欵至矣盡矣時政信之子秀成小名勘太郎後號
 三年霜月廿二始得拜高顏辱爲時賞賜政信以鎧黑糸鞍馬具皆吳服重大旗四百
 日五十六歲卒本有吉弓張五百鎧五百鈇炮五百黃金三百枚同臘月船場表河邊着船多商賣
 例云々

秀賴政信
父子ノ戰
功ヲ賞ス

政信毛利
勝永ト肥
後橋ヲ守

政信京橋
口ヲ守ル

肥後橋以南三百間之軍營也爲要害燒崩數十箇所之橋後以南與毛利豐前
 守儀成同屯然敵兵雲臻徘徊願慶寺之松林斥堠曰顧視左右卽今揚船群卒
 也諸軍器之模樣頗四度路也政信與毛利豐牧相議曰開軍門出一陣則不得
 一支退散者也時請船場惣將大野主馬治房曰諸將未進先駭之諸卒也願勵
 一戰之功驚天下耳目云々治房曰今少時相待令府君臨之傍有竹田永翁者
 謂之曰吾子速馳開府君永翁怒罵曰今也臨一戰之期何爲赴城中只言主馬
 趨之云々毛利豐前守儀成不忍見之不竟騰驤坐牀切齒謂政信曰我比年潦
 倒而不扶持群卒吾子是中嶋之惣將也諸卒太夥矣今試之可也粵政信使我
 勢一々纏帛額作部伍豐牧感曰使令諸卒太堪欽羨我今不持如此勢兵雖落
 魄之身金銀未囊冀教諸卒樂之奈良酒三大樽白銀百枚欲施諸卒願之諸卒
 則不配十之一不若返納不受之酒樽足味一河之水衆大悅時塙團右衛門直
 次進曰今奉惣將主馬也何不用嚴旨而叨相議否忿然政信出座曰足下誰未
 向顏今日初度也夫爲將者以士卒之勦揚名譽今有一戰功則是將之勇銳也
 其何爲違旨擬議移時止矣後聞之蜂須賀阿波守至鎮相謀曰先驅郡卒往々
 徘徊則城中侮少勢開門打出則速可決勝負之一事也云々政信退船場後京

元和元年八月二十四日

四五一

政信ノ順才

池田氏關ヲ設ケテ大坂逃走者ヲ檢ス

政信關吏ヲ欺キテ走ル

大坂敗卒逃匿ノ狀

橋以東三百間之軍營也、櫓四箇所有之、曾命木村彌一右衛門、佐藤才次兩士、依爲要害辭之、非政信不得堅守之居焉云々、謂之青屋口昔青紺屋居之云々、惣構疎難堅守、欲挂大壁、苦無繩子、政信急揚千帖敷壘、解裡牀蓆、即時營之、人皆爲一時之奇謀云々、大坂城兵火沒落後、有故將赴于阿州、路經播州明石郡垂見邊、則池田武藏守輝直令構關所、留敗軍士卒、不覺迫之、僞曰、我是東關者、有要用、將赴于西國假託某所、某者而更非大坂之卒、陳謝再三、關吏曰、池田武藏守內然多賀長大夫、則把某國某將之書來通之、又請質人、乃出猶子同姓虎福使待歸云々、此間家書印綬、等竊分破云々、恐知敵人也、質關吏問質人幼子小子虎福後號、前人氏姓爲誰、幼子忽覺對曰、如政信之言、暫後有水主之輩二十餘許、相携而來、關吏防之、水主曰、下賤之輩豈有何事、某所某者也、願免之得相通、則可授□獲云々、關吏問之、水主曰、前退者大坂軍將喜多村某也、關吏驚愕追之太急、政信已遁、虎口速走、過兎原住吉神廟之前、丁于此時大雨漂車軸、傍海濱則有甕舍之牛欄、數人並枕眠、隱處其間、亭主室深不知之、自意前投宿人也、追者急馳過、不能探索也、前臥數人亦大坂敗卒也、相互求匿、一人語曰、我有西海之便路、難奈無腰纏、政信曰、吾須營路費、汝宜借浦上漁舟、帆腹含風、容易到淡州津名郡窟、俗書岩屋、敗卒

阿波ニ匿ル

赦サレテ野里村ニ遷住ス子孫ニ遺誠ス

井上小左衛門父子

依能案内、相謀得全命、後行阿州那東郡荒田野、妻子隱在斯、把手互嗚咽、漸歷數月、尋探大坂敗人太急矣、政信意、愁逢無名之卒、嬰俘囚、則足污舊名、不若歸粉里、受命於執事、棹孤舟上矣、于時松平下總守忠明來督此邦、有故人賢齋者、關忠明之顧、使之具述始終、事聞、源大君曰、既往不答、彼若自佗邦來服秀賴、則無所逃罪、速可誅戮之、在境內與力則隱便也、難挾野心、一味同心之條、尤神妙也、依別恩、竟許得安堵、居野里村云々、後淀城主大江姓永井信濃守尙政、雖有佳招不赴之、迨其死期、舉一家之子弟曰、汝等謹聞、我昔逢厄難十數、莫今安座而將赴彼岸、孔夫子曰、死生有命、富貴在天、誠哉此言、以往爲我子孫者、守忠孝、專仁義、勿挾臆念、姉妹兄弟、奴婢僮僕、如一子、勿離親族、佗無所陳說、如眠而卒、歲七十有六、自號三惠、使假名不實是寬永十九年壬午臘月十有九日也、

〔明良洪範〕九 大坂落城後、神君仰出サレケルハ、諸所ニ散在ノ諸浪人、諸家ニテ抱ヘ度キ者ハ、勝手次第抱ヘ申ベシト也、是神君寬仁大度ニシテ、勇士ヲ慈愛シ給フ御下知也、其浪人ノ中、井上小左衛門、同ク長子治兵衛共兩入ハ、二條ノ御城ヘ召出サレケル、今ノ井上新五郎其子孫也、二男瀨兵衛ハ、黒田家ニ仕フ、其外諸浪人諸家ヘ抱ヘラレ、妻子ヲ養ヒケルモ、是偏ヘニ神

元和元年八月二十四日

四五四

君ノ御仁惠也、

筑前博多ノ商島井茂勝室宗歿ス、

〔島井宗室畫像讚〕三〇筑前島井俊

江月作宗室畫像贊

端翁宗室居士肖像

其行其操克始克終、慈潤江河浩渺、仰高山嶽穹崇、誦了六藝、喉襟譬之關西孔夫子、坐斷十五餘席、可謂汝南載侍中、好學幾有志、解經又不窮、紫府接隣、覃詩思于一夜梅樹、烏津卜隱、馳吟興于十里松風、喫茶去底、奴視郝真際、圍棋悟處、笑倒遠錄公、肩搭衲衣、形容卓爾、俗而僧々、而俗、身停几案、工夫綿密、同中異々、中同、親者明十日、聽者達四聰、花色即空、空即色、畫成冬日瑞雲紅、

居士者、筑之前州冷泉津一故人也、昔時扣吾龍寶諸老門、爲道志深、寔可嘉尚而已、是故橫嶽山裡創建一字矣、開山國師塔處、庵曰瑞雲、不改厥舊名、而號瑞雲菴、加之山野廿年以降耐久也、今茲仲秋念四日、俄然而易簣、其親眷命工使描幻容、徵讚於余、遠寄此一幀來、展而觀之、則雪鬢天資猶如對余而朝、揆暮揆之時、感慨之所責、可默而辭乎、信口亂道、書以還之、瑞雲庵者也、

元和元年乙卯蜡月兩十四日

宗室佛道志ス

前大德江月叟宗玩書于龍光之室印

〔島井宗室墓碑銘〕前〇筑

宗室墓碑銘

端翁宗室居士之墓

是虛白軒端翁宗室居士之墓也、居士姓島井、名茂勝、稱德太夫、筑博多人也、家世業賈、以財雄稱豪富、居士才且武、望高風逸、名聲籍甚、藩主長政源侯賜俸五十石、居士復能留心我教、外宗五升堂、本寺崇福寺、嘗在古橫岳罹災、烏有、長政源侯一新于此地、若夫瑞雲庵、則未改作、居士出資若干、以重建焉、以其所受俸五十石、附諸瑞雲菴、元和元年乙卯八月念四日、以疾終于家、葬於瑞雲庵、居士娶神谷道悉女、生二男、伯信、吉、仲信、清、命猶瓜瓞綿々、今茲寶曆甲申十四年、則當居士一百五十年忌之辰、以多經年所故墓殆崩、乃今新焉、併叙其梗概、以勒石云、

橫岳蔭德隱識

〔宗室居士畫像贊〕三〇筑前島井俊

居士元來麗蘊公、西江吸至叫心空、

常吟虛白軒前月、大坐無端稱主翁、

元和元年八月二十四日

四五五

宗室ノ人ト爲リ

黒田長政ニ仕フ

瑞雲菴ヲ建ツ

元和元年八月二十四日

四五六

虛白軒主端翁宗室居士遺像
孝孫請贊詞書一拙偈以塞其白云

元和乙卯元年臘月念四日

前龍寶江月叟宗玩印

○朝鮮ノ役ニ當リ、秀吉、博多津内ノ倉庫ヲ明ケ置クベキコトヲ宗室ニ命ズルコト、文祿元年正月二十四日ニ其條アリ、マタ、石田三成、宗室ト私交アルコト、慶長三年六月二十二日、三成兩筑ニ入り、納租ノ制ヲ定ムル條ニ、宗義智、誓書ヲ宗室ニ與フルコト、本年正月三日、義智卒スル條ニ、宗室、古田重然ト交誼アルコト、六月十一日、重然死ヲ賜ハル條ニ、筑紫廣門ノ誓書ヲ宗室ニ與フルコト、同九年四月二十三日、廣門卒スル條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕

部シ之 島井宗室

○島井文書(筑前) 慶長拾五年甲戌正月十五日異見狀

〔島井文書〕

○坤 筑前

〔包紙〕 宗室老徳左衛門へ異見狀

生中心得身持可致分別事

一生中いゝぬも貞心正ちき候はんの事不及申、親兩人宗怡兩人兄弟親類、いゝぬもかうくむつましき、其外知音之衆、いせん外方之寄合よも、人をうやまいぬりくさり、いんきん可仕候、ひろうずいぬのふるまい、少も仕ぬくも、第一うそをつきたとい人の、いりきうせたる事成共、うそよ似たる事、少も申出事無用、惣ゝ口うぬい言葉おゝき人老、人のきらう事候、我ためよもあらぬ物ニ候、少も見たる事知たる事成共、以來せうぜきよ成候事ハ、人之尋候共、申ぬく候、第一人の不うぬん中言あとい、

元和元年八月二十四日

四七七

宗室其子

貞心律儀
懇懃ナル
ベキコト

元和元年八月二十四日

四五八

人の申候共、返事も耳よもき、入るぬく候、
 一 五十ニ及候まで、後生縁うひ候事無用候、老人ハ可然候、浄土宗禪宗あとの
 ハ可然候する、其外ハ無用候、第一きりまさんニ、たとい道由宗怡、いり様
 よす、められ候共、曾以無用候、其故ハ十歳ニ成候へハ、そやあうしごて
 をゆい、侍まきそぬるきそとゆい、後生とて候て、日を暮し夜をあうし、家
 を打すて寺まいり、こんたきをくびりけ、面目よ仕候事、一段とくるく
 候、其上所帯あげき候人の、第一之目ざひひニ候、後生今生之目きまへ候
 てぬる人老、十人ニ一人モ稀ある事候、此世よ生きさる鳥類ちくるいま
 ても、眼前のなけき計仕候人間も、あやぢりあき事候間、先今生よてハ、今
 生之外聞うしあひぬ分別第一候、來世之事ハ、佛祖もあらぬと被仰候況
 凡人之知る事にて無之候、相うぬいて、後生ざんまい及五十候まで、無用
 するへき事、付、人ハ二、三、十、廿、よても死候、不至四十五死候て、後生如何
 可存也、
 一生中をくち双六、惣別けのあそひ無用候、碁將碁平法うとひまいの一
 ふいよいさるまで、四十までハ無用候、何さるけいのう成共、及五十候者

元和元年八月二十四日

四五九

くるくらす候、松原あそひ川くり月見花見、惣あ見物事、更以無用候、上
 手ノまい等、上手の能あとい、七日のあそいに二日計はくるしうらす候、
 縦佛神ニまいり候とも、小者一人よて參候へ、慰うてらニハ、佛神モあう
 ち有ぬき事、
 一 四十までハ、いさゝかの事も、あやうある事無用候、惣あ我ふんさいる過
 する心もち身持、一段惡事候併商事をうそくまうけ候事ハ、人よもあ
 らぬやうよりせき候する専用候、それさへ以、唐南蠻よて人のまうけさ
 るをうら山敷おもひ、過分ニ良子共やり、第一船をあそて、唐南蠻よやり
 候事、中々生中のきらい事さるへく候、五百め一貫めつゝも、宗怡あとの
 中ニ候て遣候事ハ、宗怡次第候、それも貳メめあらハ、二所三所よも遣候
 へ、一所よハ無用候、其外之事、何事も我ふんさいの半分よとの身もち、其
 内よも可然候、たとい世ハ餘めり入さるハ惡候間、少ハさし出候へと、人
 の助言候共、中々さし出ぬく候、及五十候までハ、いりあもひりそく候
 て、物すきをつこうすき、茶のゆきれいすき、くまいある事、刀きささ
 いしやう等、少もなつこうよて、目よ立候ハ、中々無用候、第一武器更以不

入事候、たとい人より被下さるいゝやう刀成共、賣候て良子よあゝ候て、もち候へく候、四十まで木綿き物しせんあら糸ふし糸の織物あとの、少もさし出候て、人のぬまた、ぬきる物へ、くるしうらす候家も、あゆむゆさんあく、うゑうきもあまのくちめ計ゆいあをし候へ、家屋敷作候事、曾以無用候、及五十候て、其方まうけん次第候、何さる事ニ付、我ちうらの出来候て、如何様よも分別さるへく候、それとても多分之人皆死する時よ、ひんぢうする物候、我ちうら才覺よて仕出し候ても、死期よ成候まで、もちと、けさる人さ、十人廿人よ一人もあき事候、況親ととり候人、やうて、あよあゝ、後々ひんぢうよきまり死するものよて候、其分別第一候事、

一 四十まで、人をつふるまい、むさと人のふるまいよ参ぬく候、一年よ一度二度、親兄弟親類へ申請、親類中へも可参候、それもあけく、と参候する事無用候、第一夜をあゝ計事、とく慰事ニ、兄弟衆よひ候共、参ぬき事、

一人の持たる道具不しうり候ぬく候、人へ給候共、親類衆之外之衆のを、

振舞ノ誠

持道具ノ

交友ノ心得

節儉ヲ勸

少ももらい取ぬく候、我持さる物も、出し候ぬく候、よき物れたゝあゝ置、人よ見を候ぬく候事、

一生、中知音候する人、あきあいすき所帯あけきの人、さし出ぬ人、ちき慥ある人、さし出す心持よくうつくしき人、ふろく入魂もくるしうらす候、又生、中知音仕ぬき人、いさういうらの人、物とめ候人、心底あゝまにくちある人、中言をゆふ人、くむれいある人、大上戸うそつき、官家すきの人、さつとさうしやとせん小うさすき、口うぬしき人、大うさやう之人々、同座よも居ぬしき事、付平 法人

一生、中むさと用もあき所へ出入、よそあるき無用候、但殿様へしせん、何そ御着之類、不珍候共、あまひ、鯛左様之類、成共、新をもとめさし出可申候、井上周防殿、小川内藏殿へ、是又しせん可参候、其不ろは年始歳末各あまさるへく候、とろく内計ニ居候て、朝夕うぬの下の火をも我とたき、あきをもけし、たき物薪等も、むさとたけ候へぬやうよ、家の内うら等、ちとあくと成共、取あつめ、あまのきれ、ちとあまのき、すさよきらせ、ちりもあうきあまになむせ、きのきれ竹のおま、五分まで、ああつめ置

買物并ニ
消費方ノ
心得

あらはせ、薪ウ、リ焼物よも可仕候、紙のきれハ五分三分も取あつめ、す
きウへし、ぬ可仕候、我々仕さるやうよ分別、いさ、ウの物も、つねへよあ
らぬやうよ可仕事、

一 常住薪たき物二分三分のさけ、こい、あるひも町ウい濱の物材木等
ウい候共、我と出候て、ウい、ウい、ぬも、ぬきりウい候て、其代たウきやせき
を能お不へ、其後よハ、誰よウい、せても、其代のやせきたウきを、居あウら
知る事候、さ候へハ、下人よもぬウき候、ぬ、ウき候、壽貞ハ生中薪焼物、
と聖福寺門之前よて被買候、人の所帯ハ、薪す、油と申候へ共、第一薪ウ
専用候、たきやうよて、過分ちウい候、一日よめ、あるよ、ウい、不と、
とたきお不え、ウい、不と成共、其分下女よ渡候てたウせ候へ、但壹月よ
ウ不との時、もリさん用候する事、但たき、たき物も、あま、きとくちた
るウ悪候、ひ、さる薪をウい候へ、薪、柴、えぎ、こぎの類、可然候、柴、あ、と、
ウや焼物、ウ徳よて候、酒を作、ミ、をにさせ候、米、一石よ薪、ウい、不と
よてよきと、
候て、其後、其さん用、たウせ、す、ミ、を、も、を、させ、請取候へ、候、いつ、道

造酒買取
召使人ノ
コト

よも、我と、あ、ん、ら、う、候、ハ、す、ハ、所、帯、ハ、成、ぬ、ウ、候、事、

一 酒を作り、あ、ち、を、取、候、共、米、ハ、我、と、も、え、ウ、リ、人、よ、計、を、候、と、も、少、も、目、も、え
あ、さ、す、候、て、可、然、候、ウ、ウ、ウ、け、よ、て、何、さ、る、事、も、さ、せ、候、ぬ、ウ、候、下、人、下、女
よ、い、さ、る、ま、て、皆、ウ、ぬ、す、人、と、可、心、得、候、酒、作、候、者、ウ、し、米、置、候、所、を、作、じ
や、う、を、さ、し、こ、い、ウ、も、ぬ、を、む、物、ニ、あ、さ、ぬ、ウ、候、時、ゆ、さ、ん、仕、ぬ、ウ、候、
ち、を、取、候、共、さ、せ、ら、ぬ、刀、
茶のゆ道具、田地、あ、と、不、及、申、候、惣、別、人、共、あ、ま、さ、め、ウ、つ、ウ、い、候、事、無、用、候、
第一、女子、多、置、候、事、無、用、候、女、房、衆、あ、る、ウ、ま、候、共、下、女、二、人、お、と、こ、壹、人
之、外、曾、以、無、用、候、其、方、子、共、出、來、候、共、い、ウ、や、う、あ、と、ウ、つ、く、ウ、き、物、き、せ、候、
ぬ、し、く、候、是、又、よ、ふ、よ、あ、る、き、候、共、お、ち、二、下、女、壹、人、相、そ、へ、あ、る、ウ、せ、候、へ、
さ、し、ウ、さ、ま、不、リ、刀、等、も、さ、せ、候、事、中、々、無、用、候、
ら、へ、き、せ、あ、る、ウ、せ、候、へ、候、事、

飯米味増
鹽消費ノ
心得

一 朝夕飯米一年よ一人別壹石八斗よ定り候へ共、多分むし物あるひハ大
麥、く、
て、二、候、へ、共、多、候、あ、百、十、人、不、と、よ、て、も、一、段、能、候、塩、ハ、百、五、十、人、よ、て、可、然

候、多分ぬりこそ五斗こそ無由斷こしらへくじせ候へ、朝夕こそをすらせ能々こし候て汁よ可仕候、其こそかすよ塩を入、大こん、うふら、うじ、あせひ、とうくじ、ひともし何成共、けはりくす、あせ、うじのすて候を取あつめ、其こそろすに降け候て、朝夕の下人共のさいよさせ、あるひはくきあとい、いせんよくるしうらす候、又米のたつき時、い、そうすいをくじせ候へ、壽貞一生そうすいくじれると申候、但そうすいくじせ候よ、先其方夫婦くい候へて、い不可然候、かさよめしをもりくい候するぬも、先そうすいをすはり候て、少成共くい候はず、下人のお不えも如何候、何之道よも、其分別専用候、我々母あとも、むろし、皆其分よて候つる、我々も若き時、下人同前之めし計よへ候つる事、付、あぢすき無用事、大

一 我々つうい残さるも此も、とらせ候て、宗怡へ預け、如何様よも少つ、商事、宗怡次第ニ可仕候、其内少々請取所帯ニ少も仕入、たやをきうい物共候者、うい置候て、よふへ不遣、商賣あるひはあちを取、少ハ酒をも作候て可然候、あうり口之物よて、たつきあきあい物、生中うい候ぬし候、やまき物、當時賣候の事とも、きつういあき物候、第一あちもあきよ、少も人

よろし候ぬし候、我々遺言と申候て、知音親類よもろし候ぬし候、平戸殿あところ御用共あら、道由宗怡へも談合候て、可立御用候、其外御家中へハ少も無用候、

一人ハ少成共、もとて有時よ所帯よ心うけ、商賣無由斷、世のうせき專するき事、生中之役よて候、もとての有時ハゆさんよて、不き物もうい、仕度事をろ、さす、万くじれい、不し、いま、よ候て、やうてつうい、るら、其時よあところき、後くじいあけき候ても、うせき候する便もあ、けま、を候する物あ、候て、い、後ハこつ、き、あるぬし候、左様之身をあらぬうけもの、人の不うこうもさせず候、何そ有時ろせき商、所帯をくめるぬの兩輪のとくあけき候する事、専用候、い、ぬ、け、ま、を、袋、よ、物、を、持、め、置、候、て、も、人、間、の、衣、食、ハ、調、候、へ、て、不、叶、候、其、時、ハ、取、出、つ、う、い、候、へ、て、ハ、叶、ま、し、く、候、武、士、ハ、領、地、を、出、候、商、人、を、ま、う、け、候、へ、て、ハ、袋、よ、入、置、さ、る、物、即、時、よ、皆、よ、可、成、候、又、ま、う、け、さ、る、物、を、袋、よ、い、ろ、と、入、候、共、む、さ、と、不、入、用、よ、つ、う、ひ、ら、し、候、者、底、あ、き、袋、よ、物、入、さ、る、同、前、さ、る、へ、く、候、何、事、其、分、別、第、一、候、事、

元和元年八月二十四日

一朝老早々起候て、暮候者則ふせり候へ、させらぬ仕事もあきよ、あふらをついやし候事不入事候、用もあきふ夜あるき、人の所へ長居候事、夜るひるともよ無用候、第一さしとてさる用老、一刻ものむし候へて調候へ、後よ調候する、明日可仕と存候事、時刻不移可調事、

一生中身もちいりぬもろろ物を取らんと候するよも、人よけす候て、我と立居候する事、旅あよて、けり硯こさ袋等、それとけり候へ、馬よものらす、多分五里三里うちよて、とくく商人もあよみあらひ候て可然物候、それら若き時、馬よ乗さる事無と、道之のむいり不と、お不え、馬ちんいり不と、たごせんひるめし之代船ちん、そこくの事書付、お不え候へ、人を遣候時、せんちん駄ちんつういを知る用候、宿々の丁主の名までもお不え候する事、旅あよ人の商物事傳候共、少も無用候、無餘儀知音親類不通事あらえ、不及是非候、事傳物も少も賣るぎ買るぎ仕ぬしき事、

一いつまよても、しせん寄合時、いさうい口論出来候者、初めゆるりて立退早々歸り候へ、親類兄弟あらひ不及是非候、なんくりあよと其外何さる事

むつりしき所へ出ぬし候、たとい人之無躰をゆいりけ、少々ちまよよくニ成候とも、まらぬ躰よて、少之返事よも及候へて、とりあひ候まし候、人のひまうものれくひやうものと申候共、宗室遺言十七ヶ條之書物そむき候事、せいし之罰如何候由可申候事、

一生申夫婦中いりぬも能候て、兩人おもひあひ候て、同前所帶をあけき、商賣よ心りけ、待まし無由斷様よ可仕候、二人いさうい中惡候て、何さる事よも、情ハ入ぬし候、所帶ハやうてもちまづ候する事、又我々死候て、則其方名字をあらため、神屋と名乗候へ、我々心得候、嶋井ハ我々一世よて相果候、但神や不名乗候者、前田と名乗候てくるしりらす候、其方次第候事、付、何事よ付ても、病者よてハ成まし候、何時成共、年中五度六度不斷灸治薬のし候する事、

以上

右十七ヶ條之内、爲一非宗室用候、其方爲生中守令遺言候、夫弓矢取之名人ハ、先まくるき時之用心手とてを第一ニ分別を極め、弓矢を被取出と承候、縦まけ候てモ、我國をも不失、人數をもうさせ候、無思案之武士ハ、少も無其分別、むさと人之國をも取るきと計心得、取り、りま

元和元年八月二十四日

元和元年八月二十四日

四六八

け候へハ、持たる國まで被取、身をも相果と申候、ほましくさよ、双六之上手の手とてよ、かさんと打廻らば、まけいと打廻ると書置候是其理也、其方事先所帯を待まし、夜白心つけ、其上よて商買無由斷可仕候、若ふも悪良子もうしおい候共、少成共所帯ぬ仕入、残さる物よて、又取立候事も可成候、良子まうけ候すると計心得、少もあよたいよ不殘、不しき物をもつ、仕度事をも存分のま、調候ハ、一日之内ニ身上相果可申候、とろく先すりきりえて候する時の用心分別専用也、双六上手之手とておもひあせ候へ、乍恐右之十七ヶ條爲其方ニハ、太子之御憲法よもおとり候ぬく候、毎日ニ一度モ二度モ取出令披見、失念候ぬく候、於同心、此内一ヶ條も生中相違仕ぬきと寶印之うらをかへし、誓紙候て可給候、拙者死候て、棺中ニ入るきため也、仍る遺言如件、

虚白軒

慶長拾五年 甲戌正月十五日

宗室(花押)

神屋徳左衛門とのへ

島井氏ノ
由緒
祖先

宗室秀吉
ニ講ス

右^印十七章端翁宗室自ら筆して、子孫の訓戒よあさふる處なり、ほとり其詞誠實商侶の模範とすへ、支事侍る、一日予横岳よ詣て、紫師ヲ謁し、るよ、此卷を予に見せ給ひ、むしそこなひし改改を補ひ一軸とし、彼の家よあへし授くへし、あられハ律存みむらきよまん料よ、別よ書寫せん事を予よそあり給ふ、よりに元本此とく副本を製して、嶋井某よかへし授け侍る、依る拙詞を卷尾ぬ加ふるものならし、

安永八己亥年南呂廿四日

藤真山^印

〔神屋文書〕

前 筑 嶋井家由緒書

- 一 先祖者左大臣藤原房前公五十一代修理亮茂教之裔也、茂教子藤左京進茂昌、其子主計介茂由、其子主税介茂親、其子安之進茂豊、其子次郎右衛門茂久、此時嶋井と相改申候、其子徳太夫茂勝、祝髪して宗叱又宗室と改名仕申候、いつ之頃より博多に引越參候哉、相知不申候、
- 一 太閤様天正十五年亥六月四日、薩摩より御歸懸ケ、箱崎社内へ御在陣被爲遊、宗室に御目見被仰付、難有蒙御意候、同日御肴一折鮮魚二頭猩々緋
- 一 一反献上仕候處、御満悦被爲遊、御次ニ御吸物御頂戴被仰付候事、

元和元年八月二十四日

四六九

博多ノ町
割ニ與ル

箱崎陣中
ノ茶會ニ
列ス

秀吉ニ物
ヲ獻ズ

元和元年八月二十四日

四七〇

一 太閤様より博多町割被仰出、宗室事代々當所居住之事故、是迄之通表口
 三拾間入三拾間之屋敷、改此度拜領被仰付、町並諸役御免被仰付候事、
 一 太閤様箱崎於御陣所、御茶之御會宗室宗湛被爲召候事、
 一 太閤様之唐扇一本(宗室同シ)照布二反奉獻候處、御朱印一通、石田治部少輔様ヲ以
 頂戴被仰付候事、

唐扇一本照布二端到來之(儀カ)悅思召候、猶石田治部少輔可申候也、

十一月廿三日 御朱印

嶋井宗室

一 太閤様之金襴白地一卷、尙又歲暮爲御祝儀、照布三端奉獻候處、御朱印兩
 通頂戴仕申候、

金襴白地一卷遠路到來、誠喜〇嶋井文書コノ被ノ一字アリ、間思召候、猶石田治部少
 輔可申候也、

卯月廿九日 御朱印

嶋井宗叱

爲歲暮之祝儀、照布三端到來之(儀カ)悅思召候、猶施藥院可申候也、

十二月廿六日 御朱印

嶋井宗室

秀吉ニ召
サレテ大
坂ニ赴キ
朝鮮ノ地
ヲ問ハル
ル

小早川隆
景ト宗室

一 太閤様大坂御城より宗室御召被遊ニ付、夜ヲ日ヨ繼ル罷登候様、石田治
 部少輔様より被仰越候間、罷登候處、近々朝鮮御征伐被思召立候付、宗室
 ニハ數度渡海仕候者之儀ニ付、地理等之儀、委敷御尋被仰付候事、
 但、其節御渡被仰付候諸國關所往來御切手、于今所持仕居申候、
 一天正十六年二月廿五日、小早川隆景様名嶋御城御普請始リ、依之爲御見
 廻、白練一樽、御肴一折、并煮染差上候處、其節御相伴被仰付、風味能との御
 誼ニ有、宜敷被爲聞召上候事、

一 同年二月八日、隆景様御城被成、蜂須賀阿波守様相伴ニ有、御茶差上候事、
 一 隆景様より之御書數通所持仕居申候、

一 千利休より宗室に當て候書狀所持仕居申候、右文段之内、山崎ノ大坂に
 秀吉公御越被遊候時、宗室に罷登候様御意之趣とも申來居候事、

一 太閤様之宗對馬守様(義智)極内々重キ御頼入之儀依有之、宗室方に對馬守

宗義智秀
吉ヘノ執
成ヲ宗室

千利休ト
宗室

元和元年八月二十四日

四七一

ニ依頼ス

元和元年八月二十四日

四七二

様御出御止宿被成候上、晝夜御頼筋御咄被成候ニ付、宗室御請合申上置、其後大坂に罷登、右之次第太閤様に申上候處、首尾能調義致候付、其段對馬守様に申上候處、御悅之餘り、宗室に當り申候御起請文一通被仰付、于今所持仕申候、

家康宗室
ニ軍扇ヲ
與フ

一 伏見御城御成就ニ付、爲御祝儀、四月二日堺諸白一斗入二樽、御肴一折、宗室より奉獻候處、遙々罷登、過分ニ被爲思召上、權現様御手自御軍配扇一拜領被仰付、御酒頂戴被仰付、御盃ハ吞取と御意被爲遊候付、難有御盃吞取仕候事、

一 長政様福岡御城御造營御取懸被遊候付、宗室、宗湛より寸志銀差出候處、御側ニ被爲召、厚キ蒙御意候事、

黒田長政
宗室ニ祿
ヲ給セン
トス
宗室祿ヲ
割イテ瑞
雲庵ニ寄
附ス

一 長政様御代、宗室に御知行三百石拜領被仰付、頂戴仕居申候處、何之御奉公後不申上、御知行頂戴仕候儀、恐多奉存候ニ付、差上度旨御願申上候處、不苦候間、頂戴仕候様被爲仰付候得共、達多御斷申上、右三百石之内五十石、瑞雲庵宗室開基也に御寄附被遊被爲下候様御願申上候處、宗室儀御城ニ被召出、小河内藏允殿被仰渡候ハ、其方儀知行差上候段、神妙ニ被思

召上候、願之通、五十石ハ瑞雲庵に御寄附被遊候、自然子孫ニ到難儀仕候節ハ、御見捨被遊間敷旨、御意之趣被仰渡候事、

但、五十石于今瑞雲庵に被下候事、

一 如水様御不例之節、爲伺御機嫌、兩樽一折差上之處、長政様より御書頂戴被仰付、于今所持仕候、

爲見廻書狀并兩樽一折到來、令祝着候、如水煩彌快氣候間、不可有氣遣候、猶重疊可申聞候也、

十二月廿七日

御名御判

宗室

一 慶長七年、崇福寺開山堂、宗室建立仕候處、爲御褒美、長政様より大豆百俵拜領被仰付、難有御禮申上、右大豆ハ瑞雲庵に寺納仕候事、

一 宗室悴徳左衛門儀病死仕候ニ付、孫權平ハ跡式被仰付候様御願申上候處、願之通權平ニ相續被仰付、依之爲御禮金子貳十枚、并小早川隆景様より宗室に被下置候昔眞壺差上申候處、金子ハ權平に被下候間、賣買之助ケニモ可仕旨、眞壺ハ權平幼少之間、入申時ハ御返可被遊旨、親類中ニ被

元和元年八月二十四日

四七三

崇福寺開
立山堂ヲ建
ス

宗室小早
川隆景ヨ
リ眞壺ヲ
奉獻ス

元和元年八月二十四日

四七四

仰渡候御奉書御返書所持仕候、

尙以真壺之儀、此度御戻可被成候得共、左様ニ多者、各心懸リニ可
存候間、被召置候由被仰出候、以上、

御狀拜見申候、然者徳左衛門跡式之儀、有体ニ被聞召上、悴權平ニ跡式
被仰付ニ付、爲御禮一人被差上候、就夫何ニ多も徳左衛門道具之内ニ
多、御用ニ立申もの上ケ申度被存候得共、差立たる道具無之ニ付多、先
年小早川隆景より宗室ヨ被下置候昔真壺、并金子廿枚相添被上候、一
段御満足被思召候、併金子之儀者權平ニ被下候間、賣買之指合ニも可
仕之由被仰出候、壺之儀後、權平幼少之間、先夫迄者被召置、成人仕入申
時分者、御戻し可被成之由被仰出候、其御心得可有候、何後親類中に右
之一通可被仰渡候、恐々謹言、

黒田美作守

卯月九日

一和(花押)

井上主馬允

正存(花押)

高木市三郎殿

同 五郎右衛門殿

徳永宗伴老

信長ニ京
都ニ召サ
ル

一 於京都本能寺、信長公ハ御茶被下罷出居候處、明智光秀反逆ニ多、信長公
御他界、其節御床ニ有之候弘法大師筆千字文持歸所持仕候處、後年東長
蜜寺ニ寄附仕候事、

大友氏宗
室ニ檜柴
ノ茶入ヲ
所望ス

一 檜柴茶入大友家より御所望之書簡、于今所持仕候、○中略、十二月二十八日附、宗室宛、宗元、宗仍
連署書狀、及ビ六月二十日附、宗室宛、宗易書
狀等ニカ、ル、島井文書ニヨリ下ニ掲ゲ、

一天正十五亥年、大乘寺本尊觀世音尊像、宗室妻彩色寄附仕候、其後ハ御上
ヨリ御修覆被仰付候、其段尊像脊ニ書記有之候事、○中略

一 忠之様御代、貞室ハ先祖ハ所持仕來候日、出唐繪御覽可被遊旨被仰出、
右之繪差上候處、應御意候間、當分御預リ被爲遊候旨被仰渡差上置候事、
一セひうの真壺、先祖より所持仕來候處、忠之様御覽可被爲遊旨被仰出
候處、嶋井南鐐と名御改被成、應御意候間、御預リ被遊候旨被仰渡差上置
候事、

真壺島井
南鐐

元和元年八月二十四日

四七五

軍扇ヲ黒
田重政ニ
獻ズ

元和元年八月二十四日

四七六

一 權現様ノ宗室に頂戴被仰付候御軍配御團扇若殿様御元服被爲遊候節、御祝儀ニ差上申候處、則被召上、御館ニ御酒御吸物頂戴被仰付、其節三人扶持頂戴被仰付候御書出、左之通、

嶋井久左衛門

伏見於御城從權現様、先祖宗室拜領仕候御軍配團扇、今度左京様ニ差上度之旨相願、寄^寄特に被思召候、則被召上候、依之三人扶持永代被下置候事、

虛白院ノ
建立

一 四代目善兵衛、聖福寺之内虛白院と申寺、建立仕候事、○中略

十一代目

嶋井善藏茂軌

宗室ノ傳

〔石城志〕

八事考 上 嶋井傳

博多町役
ヲ許サル

嶋井宗室ハ、○中略、宗室ノ家系ニカ、豪商よして最權勢ありしといへり、豊臣秀吉公西國下向の頃、箱崎松原に於て點茶を獻じ、又我宅よも屈請をり、天正六年博多町經營ありし時、濱口町上よおつて、表口十三間半入三十間の家宅を太閤より賜はり、永く町役を許さまぬ、文祿の頃、太閤、肥前名護屋

家康宗室
スノ家ニ宿

宗義智筑
紫廣門宗
室ニ誓書
ヲ與フ

阿蘭陀抛
銀ノ證文
十七ヶ條
ノ遺書

へ至り給ひし時ハ、東照源君、此家よ御駕蒞止め給ひぬ、此故よ、後年宗室上洛せし時、伏見の城に於て、源君より軍配扇を下し賜りぬ、^{金地葵子孫の御紋付}家よ持傳へし、近年重政公に捧奉りぬ、又太閤の御書三通、石田三成ノ書簡五通、淺野長政一通、大友宗麟七八通、同義統一通、同家臣の書簡數通、又宗對馬守義智、筑紫廣門誓紙の神文あり、本州怡土郡深江城主草野中務大輔、鎮永より甲斐藤圓扉分之内三町、吉井村三町の地を附屬せる文書あり、又宗麟より浦々津々諸役免除の書あり、其内よ兩筑の事取捌等致をへきとの文言あり、又肥前平戸松浦源次郎信より、宗室ヨ嫡男徳左衛門に信吉といふ實名を賜ひし書あり、其外唐人阿蘭陀抛銀の證文等あり、いさゆりましけまハあるさに、宗室曾々、其子徳左衛門に十七ヶ條の遺書を與へぬ、今見たり、専ら儉約を守り、生業没怠らば、父母兄弟よ孝悌を盡し、親族朋友に恭敬を致せよと、俗語平話を以て書り、其のつうら聖賢の教よも叶侍りぬまハ、宗室ヨ性質の篤厚ある事推量るべし、博多記云、○中略、宗室命ヲ受ケテ、秀吉ノ朝鮮征伐ヲ家記を見るよ、如水公、長政公、忠之公も、曾て此家よ駕蒞うぬりし給ひし事あり、又長政公、祿百五十石を賜りぬれとも、

元和元年八月二十四日

四七七

元和元年八月二十四日

四七八

宗室虛白
院ヲ建ツ
トノ説
宗室夫妻
ノ墓
宗室ノ子
孫

堅く辭して受む、その内五十石ハ崇福寺の開山堂に寄附いさげべきよ
公聽に達しなれハ、則瑞雲庵の寺産とあさしめ給ふ、是宗室に建立せる所
あまハ也、又聖福寺塔頭虚白院を建立す、故に宗室法名虚白院瑞翁と云ハ
妙室夫婦の墓ハ瑞雲庵にあり、宗室子徳左衛門信吉、其子權平正則、其子善
兵衛茂武、其子善兵衛茂恭、其子吉兵衛某、其子久左衛門茂壽、其子今の善兵
衛茂也、當國君繼高公より、久左衛門に三人扶持を下し給ふ、今の善兵衛に
至るも又茲より、此家にありし名器等の事ハ、土産門に附録を合を考ふ

〔横岳志〕

前 筑 横嶽山本末寺院 塔頭

瑞雲菴

瑞雲菴 開山大應國師塔所、慶長十七壬子年、江月玩和尚再興、檀越博多巨

商嶋井宗室

〔石城志〕

地理考下 博多 博多町通路并町名

東町下

家數二十二軒 間數百十二間六尺壹寸

嶋井宗室に初に取來し町故に宗室町ともいへり、

博多宗室町

茶湯ヲ千
宗易ニ學
ブ

〔古今茶入系譜〕

上 千宗易

博多宗室 博多に住ス、

〔博多記〕

島井宗室の事

秋月種實
種實茶入
ヲ取ル
種實種實
ヲ秀吉ニ
獻ズ
宗室石田
三成ノ旨
ヲ受ケテ
秀吉ノ朝
鮮征伐ヲ
諫ム

島井宗室の家は、名物種實の茶入持來りしを、秋月種實所望申といへとも、
遣し不申に付、秋月より押掛とらんと風聞故に、嶋井一家の者とも集り、宗
室に異見を致し、秋月に遣し可申と使者を遣し候得ハ、秋月より取來ル、
宗室數寄屋にて饗應して、種實の茶入を渡し、使者門外に出ると否、數寄屋
を崩せし也、種實の茶入の禮物として、大豆百俵參候由、其後秀吉公嶋津御
征伐に御下向之時、秋月種實、嘉麻郡芥田村迄罷出、種實の茶入差上降參致
しけるこそ、○種實、種實ヲ獻ズルコト、天正十五年、秀吉公大坂の御城を嶋
井宗室御呼被成候に付、夜を日し繼て登る所、大坂川口より、石田治部少輔
出向ひ、宗室に申様、此度其方御呼被成候ハ、朝鮮國征伐の思召よて、其方朝
鮮にも毎度渡海致候事に付、委細御尋可被成候、ケ様可申上とて、一々申
含候、秀吉公御對面被遊、朝鮮征伐思召立に付、其方御呼被成候、存之通一々
可申上との御説に付、宗室申上候ハ、朝鮮の韃靼に比し、き、要害の地よて、中

元和元年八月二十四日

四七九

元和元年八月二十四日

四八〇

日本との違ひ申、征伐の義の御止り可然と、石田の教之通り申上候得
ハ、以之外御機嫌損じ、我思ひ立て、唐土四百餘州を攻潰さん事掌を返ス
か如く、商人故ニ其義不存と被仰、奥ニ御入被成候也、是よりして宗室ハ御
前遠くありけるとそ、

〔島井文書〕

○坤 筑前

尙々、彼一幅相調候やうニ才覺專一候、巨細池邊宗元可申候、
爲音信段子一端到來喜悅候、殊舊冬者種々無心之儀共申候處、銘々調給候、
是又満足候、必當春上待入候、然者宗柏所持候雪繪之事申候、何とウ以才覺
可被申調事肝要候、箱貳ニ可被申澄候、何とウ才覺專要候、從此跡申候
一儀者不調候共、彼儀者成立候様故實頼入候、細々雖申度候、餘急候條、必追
る具可申候、恐々謹言、

二月二日

宗麟(花押)

嶋井宗叱

下國以後、節々可申遣候之處、養性氣故、無音之様候、漸本腹候之條、必來春者

宗麟宗室
ニ依鳴シ
テ繪畫ヲ
求ム

上待入候、隨ゝ紹悅就一種之儀、道叱其方へ入魂候へ共、未一着之由承候、如
存知五畿内依錯亂、每事氣仕之由候て、上洛差急候、尤存候間、早々落着肝要
候、殊道叱申談候員數之上、二三貫目もかさまれ、早速相調專一候、隨分道叱
へハ、異見可申候、氣仕有間敷候、濃々雖申度候、餘急便候條、省略候、恐々謹言、

十二月廿四日

宗麟(花押)

宗叱

天王寺屋道叱申拵一儀、至紹悅能々入魂肝要候、依彼一到來、道叱事、急度可
罷上之條、其元無油斷申調專要候、舊冬宗麟被仰遣候之間、旁以可然様馳
走可悅喜候、恐々謹言、

正月十四日

義統(花押)

宗叱

爲音信雪魚二尺到來悅入候、先度者長々在國辛勞之儀候、仍る題目之事、委
者從吉弘鎮信、池邊宗元所可申候之條、可得其意候、恐々謹言、

元和元年八月二十四日

四八一

元和元年八月二十四日

十一月廿八日

宗叱

宗麟(花押)

四八二

宗麟(柴ノ茶入ヲ所望ス)

態飛脚差下候仍、宗(吉弘鎮信)就一幅之儀、其方入性候故、輕々令落着候事、馳走感入候、何様來春一人差遣、辛勞之段、重疊可申候開候て、加兵衛入道一段満足不及申候、委者宗宗可申候隨る去年宗柴之儀申候處、其刻相滯候て、于今無曲候之條、是非成就候様申拵簡要候、巨細之儀者宗宗、宗元可達候間、不及口能候、必來春一人差下、これ又具可申候、恐々謹言、

十二月廿八日

宗叱

宗麟(朱印)

能用一書候、然者宗柴之儀、可被召置之由、先年以來被仰出候處、少入組付の差過候つ、既御所望之段、自他無隱事候間、成就候様、宗叱才覺肝要之通上意候、遠國之儀候條、互そらさやあよ、此度ツメ様躰迄申入候、ケン銀四十貫目、爲下馬志賀葉ツホ可被差遣之由候、於此分者、可被申調之由、去春言上

候條、首尾無相違様、彌堅可被申拵候、不可有御油斷候、恐々謹言、

十二月廿八日

宗元

宗仍

嶋井宗叱 床下

〔島井文書〕

○乾 筑前

玄以齋

宗叱

らる床下

鎮信

尙々、其元口切時分之條、種々御遊會察申候、爰元ハ大風以後取亂、茶湯さる宗併今朝道叱へ、宗佐同前參候、茶給候、一入面白さ不及言語候、彼墨跡拜見申候、於座中も、甫齋噂申出さる迄候、自宗元ハ後便返事可申之由候、追々灰ふるい又對馬さうけ二三望存候、猶重々可申候、此外不申候、

先十九之御狀、慥相届、如面前再三披閱本望候、

一御歸國以後、早々以書音成共可申之處、當殿様致御供、田舎へ滞留故、無音不及是非候、

元和元年八月二十四日

四八三

大友家臣 吉弘鎮信 交ト宗室ノ

道叱ノ茶會

一從御屋形様御詔之一儀之事兩人以熟談、至對馬被申越之由、寂無余儀存候、到來候者、早々注進專一候是の御左右被成御待候、隨分御馳走肝要々々、

一當殿様被仰付儀、是又無油斷被申遣之由尤候、必急度以御書可被仰出候、一道叱内々之儀無承引候哉、不及是非候、これ不澄候者、拙者心懸も徒事迄候、何とそ以御才覺一左右待申候、

一母下向候、種々雜談御承、一入浦山敷迄候、馳、母も下國之由候間、即可有御面談候、

一さや此事、無御失念承候、大悅候、彌頼申候、

一御免御書之事、先書如申候、内々申伺候處、後日ため候間、母存知專一之由候間、道叱以談合、母下向候刻、調候様ニと宗叱被申置と、前後首尾能様申調候、さや自母も被申上候、馳、可調候間、母之様成て渡可申候、右之首尾合候様、母へ重、御入魂專一候、不及申候、

一彼ニ御詔之風爐種々急候へ共、さや一ツ仕そこあ候て、又々調候故遅々候、隨分急出來次第、下可申候、非油斷候、

一珍看到來候を待申候、未口切不申上候、近日と存計候、

一先日詔申候ツムキ、モメン、さらさぬも不苦候、さうま之用所候、をめんハ十五、さん程、ツムキハ五、さん程望候、委ハ綾部可申候、

一道叱登、不遣度候てる布濟々大望候、綾部心懸可申候、其刻ハ御心寄頼奉存候、

一御船繩之儀、入夫參候ハ、早々御進上專一候、無油斷之趣御次之時を可申上候、

一御約束候天目、無失念御懇ニ蒙仰候、珍重候、必渡海次第奉待候、

一不つけんふるきこそ一入よて候由、壽も被申候間、便之時登可給候、種々無心之儀共申入候、口惜候、

一爰元相應御用之事共可承候、自然餘方へ仰候者、うらま事可申候、何事も
く用口上候、恐々謹言、

十月晦日

鎮信

嶋井

宗叱 參 床下

追多茶巾布一疋送給候、每度御懇意之次第大悅候、玄蕃允在津之條、萬事節々可申承候間、只今不及多筆候々々、猶々一儀之事、其方義下國候條、能々有見聞御思惟可然奉存候、此外不申候、

綾部玄蕃允上國砌之細書、具令披見珍重候、

一御分國中、津々浦々、殊津内諸御免之御書之儀、重々申調、只今差進之候、可有御頂戴事專一候、忝上意候間、拙者迄満足此事候、

一風爐無異儀下着之次第、重々示給、尤存知候、近日一會可被相催候哉、御心中察存候、

一梅岩事、對州迄歸朝候哉、今月其表へ可有渡海候歟、千秋萬歲候、仍、セイタカ出入之儀ニ付、御紙面之續令承知候、梅岩心底之趣、校量申計候、

一自其方被申下候段、玄蕃允具申聞候、於樣躰者、細碎口上ニ申候間、玄蕃允可申達候、

一道叱事、可被罷下之由、雖被成御書候、未上着候哉、近日自叱後書狀到來候つと共、右之首尾無之候キ、併必可有下國与樂申事候、叱下着候者、宗叱可

大友氏卜
宗室

有御上國之由、是又本望候、

一津中座敷彌出來候歟、各執心案中存候、拙者津内へ下向候事ハ、更難事成候、毎日躰上ノ猫兒及候間、不任心底身上、可有御察候、無是非候々々、

一當殿樣御一種之御開未御座候、於御興行者、必可申入候、將又道叱一軸之事、葉柴藤吉郎へ者、不相留被返、爰元へ後到來候、就中□□浦上右兵衛尉事被致下向、天下之沙汰銘々令承知候、洛中今程平安之由候間、乍承知事專一候、

一貴邊御無事之條、可御心安候、人自何方後珍無御到來候、信萬方今日迄者、御靜謐之條、尤目出候、

一於當津中、不慮之篇目出來之通、無是非候、但此方裁判中之事候間、兎角之段、更氣仕無之子細候、併邪正能々有御見聞、玄蕃允へ御密通可爲本望候、猶期來便閣筆候、恐々謹言、

九月十九日

宗似(花押)

宗叱 〇〇申給へ

〔島井文書〕

〇坤 筑前

大友氏宗
室ニ領内
通行ノ免
許狀ヲ授

元和元年八月二十四日

四八八

御領中關所之事、至嶋井宗叱被成御免許候、無異儀可有勘過候、恐々謹言、

嶋拾右衛門尉

十月十四日

鎮述(花押)

諸關奉行中

宗室ト千
宗易

〔島井文書〕

○乾
○筑前

追申候、ふくさのきぬ一包^{十ヶ}進之候、何ニも御用之事候ハ、可承候、
御ゆるしく候、以上、

御狀拜見、誠ニ御床しく存折節本望至候、仍、卷物一端贈給候、爰調法ニ候、
御下後、以書狀成共可申入處ニ、好便無之故無其儀候、其方珍御事も無之
候哉、唯今ハ秀吉公從山崎、大坂へ移被申候、細々見舞を申事候て、堺ニも、
あゝと無之候、おろしき躰共ニ候、然者細々秀公御うを共ニて候、
あはれ今一度御上候へうと、今より朝暮存儀ニ候、秀公もゆるしかり
よて候、

一子細候て、宗久茶入、秀吉へ被上申候、定る各々可被申候、

一去年ハならゑその事度々候つる、唯今ハ初^(花方)近日徳川殿より來候、珍唐

秀吉宗室
スノ噂ヲナ

檜柴ノ茶
入

家康初花
ノ茶入ヲ
秀吉ニ贈

物到來ニ候、我等うゝへハ不珍候、年來に迄様々迷惑迄ニ候、人の上よて
候ハ、可申物をと申計ニ候、唯今大坂ニ少用候て、立あうら一筆申候、恐
惶謹言、

六月廿日

宗易(花押)

從大坂

宗叱尊老
御回答用

以上

就一軸之儀、御詮之趣態以飛脚申入候、寂前北野茄子ニ金子五十枚相副可
被下之由、雖被仰出候、其方ニ茄子所持之段申上候之處、重ゑ又金子五十枚
ニ般若壺可被下之由御詮ニ候、右之壺者利休自平野道老三十枚ニとり申
候、其方ニ壺無御用候者、於此方金子三十枚ニ賣候て可進之候、其分ニ候へ
ハ、金子八十枚ニ候、今程銀よて金一枚五百目宛ニ候、然者貳千貫ニ相當申
候、縱少御存分ニ無之候共、關白様ハ御用捨ゑるへく候間、御同心尤候、然者

秀吉宗室
所藏ノ軸
物ヲ所望
ス

宗易ノ周
旋

元和元年八月二十四日

四八九

元和元年八月二十四日

四九〇

遠路之儀候之間、此度一軸之事被上不可然候、同ハ貴所御持上可然候へ共、
それハ可爲御造作之間、別人ニ御上專一候、不可有御油斷候、恐々謹言、

(天正十六年)
壬五月十九日

宗易(花押)
宗傳(花押)

利休

宗易

嶋井宗(高カ)□老 參 几下

〔島井文書〕

○坤 筑前

宗室中風
ヲ病ム

此間一兩度貴老御事、上様被成御尋候、中風煩申候由言上候由候然者、竊ニ
貴老代官衆持參候、此方よて段子壹卷相添て進上候、則被成御朱印候、可有
御頂戴候、猶後音之刻可申候間、不能一二候、使者へ申入候、恐々謹言、

三月廿一日

宗知(花押)

瓢隱齋

宗知

宗□老 床下

〔島井文書〕

○乾 筑前

秀吉宗室
ヲ茶會ニ
招ク

宗納へ申候、平野左兵へ此通申、貴所へ便宜ニ可參候、
來廿八日、上様被成御上洛候、御茶之湯之御道具被持、於京都被成御茶之湯、
博多之宗叱ニ見せさせらるへき由、昨日十八日ニ被仰出候、於御望者、各同
道候て御上尤候、自然宗叱其元ニ被居候者、此由申度候、爲其一筆進申候、恐
々謹言、

正月十九日

宮法印(花押)

志不也

宗悅

宗納

宗及

宗也 床下

宗室高麗
渡海

嶋井宗室事、御用被仰付、至高麗渡海候、然者彼仁宿本之儀、誰々ニよらず御
陣取可被相除之旨被仰出候、可有其御心得候、恐々謹言、

石田治部少輔

元和元年八月二十四日

四九一

元和元年八月二十四日

正月廿五日

博多町中

御陣取衆御中

三成(花押)

四九二

以上

内々所望候津内御置目之御朱印唯今下候地下中へ能可被渡候隨其方
身上之儀先日西郡久左衛門被下候刻具申候疎意存間敷候又其方上候事
如被申候金吾殿下向已後可然候何事も氣遣成る儀有間敷候ゆるく在
津之覺悟尤候又八木之儀申上候此方高直ニ候而拔群様違候間米者皆々
取上候分ニ候爰許一段靜ニ候小攝仕合能候羽對事涯分馳走候子細此使
者生嶋甚四郎可申候年寄中近日上らせ候間委曲可申聞候也

正月廿九日

治部少(花押)

宗室

今度中納言殿十日之御滞留よて其地可有御下向之由昨日自鶴新栗四所

松原茶屋

到來候然間津内之者共爰許不能上着候於其許祝儀可相調候松原茶屋之
事可爲肝要之由増右治少内儀候之間馳走專用候委細桂宮所へ申下候謹
言

八月十四日

隆景(花押)

宗室

宗湛

已上

去廿日之御狀令拜見候黒岩之茶被詰候壺之口被切ニ付て一袋被懸御意
則ひうせ候て給可申候去年之より味少もされ申之由相心得申候然者先
度被仰越候段二郎兵衛事も年内中ニハ下着可申と存候間此えのを以可
申候將又近日福岡へ可參候何も其節可申述候恐々謹言

寺志摩守

霜月廿三日

廣高(花押)

嶋井宗室老 御返報

元和元年八月二十四日

四九三

宗室寺澤
廣高二黒
岩ノ茶ヲ
贈ル

秀吉宗室
ヲシテ博
多津ヲ支
配セシム

〔附録〕

〔島井文書〕

○乾 筑前

加冠

信吉

慶長拾三年

松浦源三郎

十二月十三日

〔傳信〕
信花押

嶋井德左衛門尉殿

〇宗室
養子

〔石城志〕

九事考 上 島井傳

補 德左衛門實ハ神屋道幽ノ嫡子也、宗室外孫ナリ、妻ハ高木草三郎姉、實子權平十七歳、ふく早世也、此時跡目論あり、神屋吉左衛門子善兵衛ハ、法名、眞室道幽ノ外孫、ふて、德左衛門ノ甥也、又惣左衛門と云ハ、道幽ノ三男、道壽ノ子也、德左衛門ノさめ、ふハ甥也、德左衛門後家惣左衛門に左袒して、訴論及ひしハ、善兵衛ノ本家を繼い、惣左衛門に家財を分與へせしめらる、後室ハ上座郡寶珠山ノ螢居せり、又權平ノ部屋を作らんとて、大坂みて、切組船、ふく積下し、る、權平死せし故、則、虚白院ニ寄附して、今の客殿を建立

宗室ノ養子、德左衛門加冠

宗室ノ外孫、德左衛門、死後ノ家督争ヒ

せりと云、

二十七日、辛未禁中能樂アリ、

〔土御門泰重卿記〕

一 八月廿五日、晴天、從禁中、廿七日、御能之御振廻也、

廿七日、御能、天氣少曇、然共雨不降、大夫堀家宗治也、子孫二郎も仕候、親宗治上手之由、風聞也、外様内々不殘、於紫宸殿見物仕候、午前時雨降、見物散亂申候、又頓多時雨晴也、未刻計ニ、從院御所様御聯句一順被下候、雖御能之内、綴出持參仕候、近比火急御事候、

後朝御能

廿八日、御能御ハヤシ大夫父子御扇被下候、廣橋大納言御階之前直相渡被

申候、三番以後雨降、夕迄不罷候、御能相果、則天酌攝家親王門跡女中諸家堂上之衆、一人不殘、天酌ニテ御酒被下候、忝事也、今度之御能、女中方々御申沙汰と承及候、

〔言緒卿記〕

八月廿七日、辛未小雨、禁中御能アリ、御局衆申沙汰也、内々外様

不殘被參了、

廿八日、壬申、雨、禁中御能アリ、外様内々各被參了、

〔孝亮宿禰日次記〕

四 八月廿六日、庚午、晴、明日有御猿樂、忠利可參仕由、自

長橋局有召、

廿七日、辛未曇有小雨於禁裏有御猿樂、太夫ホリケ忠利依召參之、

廿八日、壬申晴、御猿樂後朝也、御能十番有之、被下御扇、

二十八日、申、壬青蓮院門跡權僧正尊純法親王ヲ大僧正ニ任ズ、

〔華頂要略〕門主傳二十五 圓智院二品法親王諱尊純 後陽成院御猶子

二品邦房親王爲子、實者尊悟親王始梶井門主也、尊悟又貞齋云云御子、母福正院

尼、葵氏

師主二品尊朝親王、良恕親王受法灌頂弟子、

元和元年乙卯八月廿八日、任大僧正、不經上官、上卿日野大納言資勝卿奉行藏人

頭左中辨藤原兼賢朝臣、

〔續史愚抄〕五十三 八月廿八日、壬申、青蓮院權僧正尊純、梶井應胤親

也、轉大僧正、口宣上卿日野大納言資勝、奉行藏人頭左中辨兼賢朝臣、兼賢朝臣

錄、

○尊純法親王ノ權僧正ニ任ゼラル、コト、慶長十五年九月二十八日

第十一所收補遺、ニ大僧正ヲ辭スルコト、元和二年七月二十六日ニ其條

上卿日野
資勝卿
奉行廣橋
兼賢

京都ヲ發
ス

歸京ス

酒迎ノ御
振舞

アリ、

三十日、戊、甲權大納言一條兼遐、伊勢神宮ニ詣ス、是日、上皇ノ女御近衛氏、

酒迎ノ饗アリ、尋デ、兼遐、近衛氏ヲ岡崎ニ享シ奉ル、

〔土御門泰重卿記〕一 八月十九日、晴天、一條殿御參宮、則明日也、爲御錢、吉

野紙二さを進上申候、御暇乞致祇候候、

廿日、晴天、一條殿御參宮、天氣能珍重也、

廿七日、一條殿從神宮御歸、皆々驚入候、

廿八日、從一條殿御祓のじ五日被下候、

廿九日、雨天、一條殿致祇候候、明日御酒迎申候、予人數也、終日居申候、三鉢詩

御習被成候、晚雨晴申候也、

卅日、晴天、爲御酒迎御振舞、皆々申合入目申付候、三重之箱又栗粉餅三百臺

ニスへ持參申候、公家衆ニハ、廣橋中納言、中御門宰相、中院宰相、予、櫛器御相

伴也、上ハ先國母様、十宮様、一條殿、孝光照院殿政所様也、酒ニ成、上下入亂亂酒

よて御座候、予規模ある鉢也、予盃孝照院殿指也、無勿鉢也、醉中是非不覺候

故也、

酒迎ノ御返

歩行ノ體ニテ還御

高松宮ト稱ス

元和元年八月是月

四九八

九月五日、晴天、從一條殿酒迎御返として、國母^ミへ御盃御上候、予、白川二位、万里小路大納言入道、嗣良朝臣、依召御供、岡前と云所にて御遊山也、終日御酒宴、光孝院殿、曇華院殿、大聖院殿、政所殿御相伴、御振舞アリ、還御夜入て御歸候、御忍ニテ女中中臈之内御まき候て、歩行之躰にて御歸、御供予、嗣良、万入也、橋之の御手引申候、夜半之時分雨降、

是月、皇弟濟祐親王御元服アリ、名ヲ好仁ト改メラル、

〔有栖川宮御家系〕

後陽成天皇第七皇子好仁親王

元和元年八月□日御元服、

十三歳改名好仁、

稱號高松殿同日任彈正尹、

或本是日紋二品、

○親王宣下ノコト、慶長十七年十二月二十六日ニ其條アリ、

幕府、山城下鴨社條規ヲ定ム、

〔鴨脚光敷文書〕

城〇山

定

下鴨神宮御境内

一不可伐採森林竹木事、

一不可放飼牛馬并草苜事、

一諸殺生禁斷之事、

一毎月十六日掃除等、嚴重可被沙汰、并白砂壹駄宛可被入神前庭、若背此式

日令懈怠者、爲過怠白砂拾駄宛可被入之事、

一物忌重事可被任當社先規之例、諸式社法之次第、聊不可有相違事、

一恒例之神事不可被陵廢、若違例之社家在之者、令改易、彼社恩之地可被附

御修理料事、

一御修理等事、聊不可有油斷事、

右條々、任先規之例相定訖、若於違犯之輩者、可被處嚴科之旨、依仰下知如

件、

元和元年八月日

伊賀守源(花押)

當社祝造營奉行中

幕府、安藤重信ニ常陸下野近江ノ地ニ萬石ヲ加賜ス、

〔寛永諸家系圖傳〕

九二十

安藤重信

對馬守

(元和元年)

同年八月、常陸國鹿島、下野國結

城、近江國山上みく、二万石此御加増をたまひけり、三万五千石を領す、〇諸

家譜異事ナシ、

元和元年八月是月

四九九

元和元年八月是月

五〇〇

〔安藤平家譜〕

重信略○中 元和元年乙卯八月、於常陸國鹿島郡鹿島、下野國結城郡結城、近江國神崎郡山上三箇庄二万石ヲ加賜フ、高合三万六千六百石、

〔恩榮錄〕

上 元和元年

五月 加一万石

合四万石 下總結城、常陸鹿島、江州山上

安藤對馬守重信

○重信ノ一萬石ヲ加賜セラル、コト、慶長十七年是歲ニ其條アリ、

伏見城番交替アリ、

〔寛政重修諸家譜〕

七 松平藤信吉安房守

軍大坂○大坂 終てのち、又伏見を守

松平信吉
成田泰之

り、八月、成田左馬助泰之と代り參府に、

〔寛永諸家系圖傳〕

六 松平信吉安房守

同年五月、大坂より伏見よりへり

て、又御番を勤む、同年八月、伏見の城番を成田左馬助よりして江戸に歸る、

大澤基雄

〔寛永諸家系圖傳〕

二百 大澤基雄忠次郎、生國同前

凱旋大坂○大坂の時、鈞命より、

土岐定義

〔寛永諸家系圖傳〕

三十 土岐定義山城守

元和元年八月十二日より、同三年八月十二日迄伏見の城に在番、

〔譜牒餘錄〕

五十二 土岐伊豫守

土岐與五郎定義略

○中 同年八月より、同三年丁巳

柘植清廣

〔譜牒餘錄後編〕

二十三 大御番

六番米津周防守組

權現様々、天正七

年三月、於三州岡崎、祖父柘植三之丞御目見仕、中略、關ヶ原役、御歸陣之節、江州長原之御殿ニ到、御知行拜領仕、直ニ伏見御城御定番被仰付、同心廿人召連、伏見ニ罷在、御定番相勤申候、大坂御陣之節も御供仕、大坂兩年之御陣御利運以後、又伏見之御定番相勤申候、寛政重修諸家譜異事ナシ、

元和元年八月是月

五〇一

七日、辛巳下總飯田邑主青山成重卒ス、幕府、其遺領ヲ沒收シ、後、男成次ニ一千石ヲ賜フ、

〔寛政重修諸家譜〕

七百三十一

青山忠重牛之助、牛太夫

成重初忠頼、平八郎、七右衛門、圖書助、從五位下、

成次満千代、作十郎

成重 實は服部平藏正信ウ二男、母は青山平大夫忠教の女、元龜二年、忠重

戰死して子あり、東照宮此仰ヨよマて、忠重ウ嗣とナり、御近習に列せ、天

正十二年よマ台徳院殿の御傳をシとム、十八年、東照宮關東御入國ノ、

ち、下總國香取郡のうちをイて、采地三千石をたまひ、文祿四年、台徳院

殿聚樂乃御館ノ御逗留のあひニ、七月、豊臣秀次逆意あリ乃とシ、謀をか

まへて取登てまつらハむとモ、去レによりて潛ニ伏見にモむクせタぬ

ふノとき、成重も御供ニ列せ、慶長六年九月、下總國のうちをイて、二千

石の地を加へらセ、八年十二月、從五位下に叙、圖書助にあらハむ、十年

二月、洛ノ乃ハらセとシぬノときも供奉ニ、十三年二月、駿府城修築のと

青山氏ノ

成重ノ履歴
家康ノ命ニ依リ忠重ノ後ヲ嗣グ
秀忠ノ傳トナル

敘任
駿府城修築ヲ監ス

奉書加判ノ列トナス

大久保長安ノ事ニ連坐ス

大坂冬役ニ從軍セテ果サズ

夏役病ニ罹リテ從軍セズ

成次
秀忠ノ小性トナル

き、仰をうキてこト没監シ、十二月二十五日、下總國のうちにおいて、五千石の地を加増あり、すへて一萬石を領し、奉書に加判をへキむ、林仰をかうぬル、十七年三月十三日、駿府よハもむハせタぬノとき、去レひたてテあり、後、去レ御使リさレれて、駿府に行、十八年八月、大久保石見長安ノ事に坐して、御勘氣かうぬリ、加恩の地七千石を削らセ、下總國香取郡の采地ヲ屏居せ、十九年十月、大坂御陣ノとき、本多佐渡守正信ノ指揮によリて、むカの御所とよシぬノひキてあり、此ところ、御勘氣の身にあリて、旅宿に幕うちし事、其ノかりあキ没とあめらセ、掛川の驛より采地ノかへる、元和元年乃役ノを、御供ニ候をシむク、正信御内慮をモりて傳ふといへトも、病ノありて去レあリひたてあり、此と没得ハ、九月七日、采地香取郡飯田をイて死セ、年六十七、いまニ恩免賜して死スにより、采地を沒收せらレ、妻を北條家臣恒岡越後守常自ノ女、

成次 母を常自ノ女、慶長四年、そレめて台徳院殿ニまみテ、意ヲてまつテ、時

七、九年三月、御小性とシて、十八年八月、父とおハり、御勘氣をかうぬル、

元和元年九月七日

父ト共ニ
勅セラル
後救サレ
大坂役ニ
戦功ヲ樹
テ賞セラ
ル

元和元年九月七日

元和元年三月、赦免_レて寄合_ニ列_レ、五月七日、大坂御陣のとき、二丸_ヲをいて奮戦_シ、甲首一級を得たり、御凱旋_ノ後、伏見城_ヲめさ_シて黄金をせぬ_ヒ、十二月、父_ノ舊領_ヲ乃ち下總國香取郡_ニをいて、千石_ノ地をせぬ_フ、三年五月二十六日、采地の御朱印を下_サる、○寛永諸家系圖傳異事ナシ、
○成重、加増セラル、コト、慶長十三年十二月二十五日_ニ、大久保長安_ニ連縁_シテ、屏居_ヲ命ゼラル、コト、同十八年八月_ニ、各、其條アリ、

五〇四

〔参考〕

〔花押彙纂〕

部ア之 青山成重



○熊谷正太郎氏所藏花押帖

一六中

成重ノ人
ト爲リ

出頭人ニ
名字ヲ授
クル例

〔將軍御外戚傳〕

乾

將軍秀忠公御母堂寶臺院殿之御事

服部氏 源姓

某服部

某服部

某服部

某服部 平太夫、簀笠之介、

成重 服部 七右衛門、後號 青山圖書頭、

成次 母 青山 七右衛門、初號 作十郎、

女子 若名 於相方、西郷局、
寶臺院贈一品大夫人、

成重 成重ハ、其身才覺發明、故ニ兄簀笠之介隱居時、大神君命依テ、奉仕秀忠公、段々御取立有テ、一萬石賜、青山伯耆守忠俊名字ヲ授與シテ、服部ヲ避テ、青山氏ニ改、敘從五位下、號 青山圖書頭、且執權加判ノ末席ニ列シ、屢軍功ヲ勵ス、慶長十三申十二月日、土井利勝三倍ノ御加恩有テ、二万石ト成、安藤重勝_(信方)、青山成重三倍ノ御加恩有テ、一萬石ト成、公命ニ依テ、七右衛門、門、青山伯耆守名字ヲ授與セシハ、大藏藤十郎長安ニ、大久保相模守忠隣

元和元年九月七日

五〇五

成重モト
猿樂者ト
秀忠ニ小
鼓ヲ教フ

金地院崇
傳成重ノ
明屋敷ニ
逗留ス

平河口

本多正純
ノ隣宅

元和元年九月七日

五〇六

名字ヲ與ヘ、笈助兵衛職藤ニ榊原式部大夫康政名字ヲ與ヘ格也、

成次 將軍家奉仕然ルニ父卒去後家督ニ付、不埒有テ知行沒收セラレ、

〔聞見集〕坤 青山圖書殿と申人、是も猿樂ふく、小鼓の上手よて、將軍様御

若年之ふ、御あらひあされ、そまより御前よく、のちくふハ青山常陸殿

同名ニ被成、一こ流き出頭人のかまよて候はる、

〔本光國師日記〕八十

昨晚者御使者忝存候、拙老知足院ニ罷居候儀、大御所様被開召、御城近所ニ

罷居候様ニ御誼ニ付、青山圖書殿明屋敷ヘ罷移候様ニ御仰越候、忝

儀共ニ候、如何様ニも御意次第ニ候、○下略、十月十四日附、土井利勝宛、崇傳

七日ニ其

〔附箋〕 江戸平川口青山圖書助屋敷ヘ金地院移

拙老儀、□月□日駿府を罷立、同十一日ニ江戸ヘ下着仕候、則其晚る兩御所

様ヘ致出仕候、爲上意、本上州之隣青山圖書明屋敷ヘ逗留申罷居候、○上下一

月十三日附、細川忠興宛、崇傳書狀案、

八日、壬午南光坊天海、上皇ノ女御近衛氏ニ候ス、

〔土御門泰重卿記〕 九月八日、晴天、國母魚ヘ南光坊參候、則罷出候、

水野忠元、秀忠ノ使者トシテ、駿府ニ抵リ、家康ニ謁ス、家康、秀忠麾下ノ

大坂役功罪糾問ノコトヲ問フ、マタ、忠元ヲ下總山川ニ封ズ、

〔駿府記〕 九月八日、從幕府爲御使水野監物參府、召御前、今度大坂表諸軍御

穿鑿令問給所、近日急度入札被仰付、御穿鑿御尤之由被仰、自幕下、右之段被

仰御答云々、○秀忠麾下諸士ノ大坂役ニ於ケル功罪ヲ

〔不揚錄〕三 年譜上 豐烈公年譜

乙、元和元年公四十歳 九月八日、幕下御使トシテ、駿府ニ到ラセラレ、○中

元、近日江戸ニテモ、大坂役ニ於ケル功罪ノ穿鑿ア、是日、下總國山川ノ城ヲ

賜ヒ、三萬石ヲ領シ、御政務ニ預リ給フ、此ヨリ前ハ、封地ニ、中村源太左衛門、皆

昌清、忠元公御代、皆川ニテ、貳百五拾石、老役、召出トアリ、其頃ハ、御領地、何

人系圖、執政ノ部ニ、忠元公ト井上主計、頭正、就西丸、春、執政、將軍家ヘ、奉リ、諸家、大、秘、政

録等ニ、忠元公御老中ト書セシ、八月、御側、然、其、事、何、ノ、玉、フ、ト、ア、ル、事、ヲ、シ、カ、ラ

ス、御家ノ私記ニ、元和元年九月八日、御側、御用、人トイフ、稱ハ、此、稱、ナ、キ、ニ、似、タ、リ、唯、一、統、武、鑑、御、側、御、用、人、ト、イ、フ、タ

元和元年九月八日

五〇七

秀忠ノ使
者トシテ
駿府ニ赴

平右京大夫輝貞、松平計頭、水野忠榮トアリテ、其役人前録ノ處ニ、御近習出頭ト題シ、其中ニ井上主計頭、水野監物トアリテ、シカル時ハ、元和寛永ノ頃ニ、御近習出頭ト稱シ、後ニ御側御用人ト改メ、稱シ、御近習出頭トイフ、藩翰譜忠元ノ傳ニ、西城ニ移ラセ給ヒ、御側御用人ト改メ、御近習出頭トイフ、藩翰譜忠元ノ傳ニ、ヘタリ、唯御近習出頭家私記ニ、傳ル所、御側御用人トイフ、藩翰譜忠元ノ傳ニ、文ニ、アケスシテ、此ニ註スルノミ、澁井孝徳カ國史、水野忠元職官表侍中ノ表ニ、慶長十九年、水野忠元、又知政事ノ表ニ、元和九年、水野忠元、奉行トナス、是又、何ニ據ラズ、

〔寛政重修諸家譜〕

三百三十三

水野忠元 監物

○上略、元和元年、大坂役ニ從軍シ、後、西城書院番頭トナル

カコトニ、そのち、采地を轉シ、下野國山川ハ、呈譜、下總國、結城ハ、兩國、鹿沼、板橋、下野、見、古、今、山川、結城、鹿沼、板橋、近江國のうちにをい、る、を、べて、三萬五千石を賜ハ、政務を、の、り、を、き、く、

九日、重陽和歌御會

未、癸

○忠元、小性組番頭ト爲ルコト、慶長十一年十一月是月ニ其條アリ、

〔續史愚抄〕

五十三 後水尾院上

九月九日、癸未、和歌御會、題翫宮庭菊、奉行三條西

大納言 實條 飛注

〔言緒卿記〕

九月八日、壬午、天晴、明日禁中懷紙重九同詠翫宮庭和詞、内藏頭

藤原言緒置露の色、茂、うさ、きて、八重も猶、ふ、の、へ、此庭、り、句、ふ、を、ら、菊、三行

三字也、

九日、癸未、天晴、禁中當番參了、次ニ仙洞へ參、御對面也、

〔附録〕

〔土御門泰重卿記〕

九月九日、晴、天院御所様、女御様、一條殿政所殿、重陽

御禮ニ參候、皆御對面也、夕ニ二條殿、廣橋大納言門外迄參候、

秀忠ノ使者水野忠元、駿府城ニ候シ、重陽ヲ賀ス、徳川義利直、白鳥ヲ獻ズ、

〔駿府記〕

九月八日、從幕下爲御使水野監物參府、

九日、尾張宰相殿、白鳥被進、是者自以鐵炮令放給云々、今日如例諸士各出仕、南殿出御、仍、伴白鳥御料理可被下由、日野入道唯心、大澤少將、畠山長門

守、土岐左馬助、同市正、三好因幡守、猪子内匠頭、本田

若狹守、堀丹後守直奇、市橋下總守賜饗、志賀御茶壺口令切給、賜御茶、今

朝從將軍家、重陽御服被進、水野監物爲御使云々、○元和年錄、異事ナシ、

〔附録〕

〔黒田御用記〕

○乾、筑前、竹森貞右衛門所持

追ふ申遣候、

黒田氏ヨ
ノ駿府ヘ
獻上物

元和元年九月九日

五一〇

一方々への重陽小袖之目錄、并書狀調遣候此方々之目錄、銘々それくの
色付を仕、懇ニ送狀相調、其方ニ殘置候うちの者ニ渡候て可持せ下候、駿
府之分ハ、平野勘左衛門へ送狀調可遣候、江戸之分ハ、淡路守所へ可申遣
候、

一女房共大満(長政)万吉(高政)おとし小袖ともハ、い何ものどくやうせい後家宗味宗
悦ニ調させ下可申候、右衛門佐我等之小袖かさきぬ袴也、爰元可調下候、
前後
略ス、

慶長廿年八月五日

長政御墨判

竹森清左衛門殿

篠田七郎右衛門所持

以上

祝儀吳服
ヲ銀子ニ
テ上ル

其方ニ直ニ申聞候かと覺候得共、又申遣候、駿府へと、自去年大御所様御子
息様達御女房衆、何れ吳服を銀子にて上ケ申候、左候得ハ、其地ニも、重陽之
吳服ハ、とや申付候間、當歳暮之吳服より、向後ハ將軍様、御臺様、若君様其外

御城へあかり候分之吳服ハ、それく、銀子成共金子にて成共、上ケ申度
候間、内儀對馬殿迄得御意候、對州御指圖左右を可仕候、銀子にて上ケ候
て可然との儀ニ候ハ、吳服申付間敷候也、

八月六日

長政御黒印

篠田安左衛門とのへ

十日、申、甲是ヨリ先、家康、松平忠輝ノ驕惰ヲ憤リ、松平勝隆ヲ越後ニ遣シ
テ、之ヲ責メ、勘當ヲ命ズ、是日、勝隆駿府ニ復命ス、尋デ、忠輝、居城高田ヲ
去リテ、武藏深谷ニ屏居シ、後マタ、上野、藤岡ニ移ル、

〔駿府記〕 九月十日、降、少雨松平忠輝(勝隆)左衛門出御前、是者先日爲御使、赴越後、今度
越後少將殿、將軍家御家人二人、理不盡成敗之處、何猥之儀有之哉、向後御中
違之由被仰遣處、以外仰天雖有之御陳法、無御承引、結句御立腹、尙自將軍家
可被仰旨被仰云々、

〔元和年録〕

乾

九月小朔日、大御所様松平忠左衛門を御敷奇屋へ被召、越

後へ御上使被遣、忠左衛門父大隅上總殿之御家老故、輝ノ幕府、重勝ヲ以テ忠
城ニ居ラシムルコト、慶長十、輝ノ家臣トナシ、三條忠左衛門を以、御勘道之由被仰遣、御意之趣ハ、
七年十月二十日ニ其條アリ、

元和元年九月十日

五一一

秀忠ノ侍
臣ヲ斬リ
シテ數ム
忠輝驚駭
シテ陳謝
ス
將軍ヨリ
ノ命ヲ待
タシム隆
家康勝隆
ニ内命ヲ
傳フ
忠輝ノ罪
狀

忠輝京都ヲ發シテ歸國ノ途ニ就ク將軍ノ使者松平重則越後ニ赴ク

家康ノ怒解ケズ深谷ニ屏居ス

藤岡ニ移ル

勝隆越後ヲ命ゼラシメテ忠輝武勇

誰も不承候へ共、今度大坂ニ一戰之刻、御遲參被成、手ノ御逢不被成、御合戰以後、御着到、又御入數崩其上、味方打少々仕、御上洛之時分、於森山、將軍様御家來衆を御成敗、其喧嘩相手をも切腹不被仰付候事共と及承處也、

八日、上總殿ハ、將軍様御立之日、○七月十九日京御立、北國通を越後ニ御歸國被成

候處、以鈴木刑部御使者として、江戸へ被遣、自將軍様、松平内膳(重則)爲上使、越後

に致發足處、松平忠左衛門、大御所様爲御使、先三條之城へ着、父大隅致同道、

上總殿へ參、大御所様上意之趣申上、上總殿以外ニ御仰天被成、御陳法之

御返答數ヶ條被仰上間、忠左衛門、九月十日ニ駿府へ罷歸、御返事申上候へ、

(號カ)彌御所様御立腹被成、御勘道之由被仰出間、上總殿越後を御出被成、武州深

谷へ御籠居被成、御訖言被仰上、

十月、上總殿深谷御座候へ共、大御所様御鷹場ニ近所候間、不可然之由ニ有、

上州藤岡ニ御座被成、小大膳古屋敷ニ御籠居被成、

重隆○大膳守松平忠隆三男、家老越後三條城主

〔譜牒餘録〕四十二 松平修理亮 勝隆忠左衛門、從五位下、出雲守

(元和元)同年八月、駿府御城御圍に忠左衛門被爲召、上意之趣者、上總介殿御事、常々

武勇ニ御達之由、世以る其聞有之、當夏大坂再亂之節、於城中後恐候、大和

リノ開エア

家康病床ニ勝隆ノ復命ヲ聽ク

秀忠松平重則ヲ藤岡ニ遣ス

口に者、城中隨一之者共出張之旨被開召、御快被思召之處、上總介殿御入數

一度も手ノ合不申、此段無御本意被思召候、殊去夏御陣付、台徳院様御發向

上總介殿供奉之節、於江州森山、御家人長坂氏伊丹等乘打仕之由ニ有、爲御

討候儀被對台徳院様、甚御不禮被思召候、依之向後御勘當被遊之間、此旨

越州高田に罷越、上總介殿に可申達之旨、御直被仰付、即日駿府を發足、高田

に罷越、右之趣上總介殿に相達之處、種々御陳防之御請、御座候、歸府之節者、

權現様御病中被成、御座之間、御寢所之邊に被爲召、御請致言上候、

〔松平大隅守家傳〕八〇朝野舊聞哀稿、八百十九所載 松平忠左衛門勝隆、元和元乙卯年八

月廿四日、駿府御城内山里之御數寄屋に被爲召、上總介忠輝殿に御隱密之

御使被仰付、即日發足、越後高田に罷越、上意之趣申上、歸府之節者、神君御不

例ニ付、御寢所に被爲召、御請言上、

〔寛政重修諸家譜〕七十 松平能重則、内膳正、大隅守、○松平 元和三年、上

總介忠輝朝臣、上野國藤岡に蟄居し給ふ、重則、近藤石見守秀用と祀なり、

御使をうぎたぬはりて藤岡よりいひ給ふ、

松平勝隆
越後ニ使ス

元和元年九月十日

五二四

勝隆 出雲守、○松平大 元和元年九月朔日、勝隆、上總介忠輝朝臣御勘當の御使をうき登ぬり、たゞちに父重勝の居城越後國三條に於てもむき相具して忠輝朝臣のおえせし高田城にいさり、たせ茂傳へ、十日、駿府にかへて御志々へ茂申に、

秀忠近藤
秀用ヲ藤岡ニ遣ス

〔寛政重修諸家譜〕

八二四

近藤秀用 石見

ノ○上略、大坂夏役、そ此、ち松

平上總介忠輝朝臣、上野國藤岡に蟄居ありしと記、台徳院殿乃御使をうけたまへり、あ彼地にいさり、○下略、元和二年七月、忠輝ヲ警護シ

○家康、忠輝ノ長坂信時ヲ慘殺セシ事情ヲ聽クコト、八月五日ニ、忠輝伊勢朝熊ニ配セララル、コト、元和二年七月六日ニ、各、其條アリ、マタ、忠輝、大坂夏役ニ從ヒテ、戰期ニ遅レ、家康ノ不興ヲ蒙ルコト、本年五月六日、片山道明寺合戰ノ條ニ見ユ、

〔参考〕

〔伊達家文書〕

二

(端裏内封ウハ書)

松陸奥守様 貴御

花主水正

(花押)

忠輝病ム

尙々、少將殿も昨夜さんく相煩被申候、乍去今朝も少よく御座候間、可御心安候、以上、

伊達政宗
忠輝ニ面會ヲ求ム

尊書拜受仕候、如仰天氣よく御座候、御満足乍恐奉察候、然者十日十一日之内、何ニても少將殿被參候様ニと被仰下候、尤御紙面之趣、則可爲申開候、いり様明日致參上可申上候、恐惶頓首、

六月五日

(花井義雄)

(花押)

(端裏内封ウハ書)

松平陸奥守様 回答

越後少將

忠輝

尊書忝存候、十三日、飛鳥井殿へ可參之旨、重々被入御念通、誠以辱存候、然共煩然々も無之故、御前へも不罷出候、其段頼存候、猶期後音之刻候、恐惶謹言、

六月十日

忠輝(花押)

尙以、御懇意之御書狀忝存候、巨細重々可得御意候、以上、

爲御見廻御使者被下候、遠路節々被入御念候段、忝次第、難申謝候、然々我々

元和元年九月十日

五二五

忠輝京都
ニ滞留ス
家康ニ謁
セズ

本多正信
父子七井
利勝忠輝
ノ爲メニ
斡旋ス

元和元年九月十日

五一六

儀于今不致御目見罷在事候、如仰本佐州父子、土井大炊助、何も如在無之候、
江戶へ大御所様還御之上、○家康ノ放鷹ヨリ江戶ニ還ルコ各相談ニ、具
ニ様子可申上由候間、御氣遣被成間敷候、將又猪子喜左衛門ニ直談可申候
得共、從方々使者參會不申候間、無其儀候、猶期後音之節候、恐惶謹言、

(元和元年)
霜月廿一日

松平上總介
忠輝(花押)

松平陸奥守様 御報

〔伊達山治家記録〕

五下 此月廿一日、越後少將殿ヨリ御返翰進セラル、少

大坂表ノ
儀ニツキ
テ勘當

將殿大坂表ノ義ニ就テ、今ニ大神君ヨリ御勘當ニシテ、御佗言ノ内ナル故

忠輝駿府
ニ赴キテ
勘當フ敷
サレシコ
トヲ請フ

ニ、公ヨリ節々御使札ニ及ハルト云々、御返翰左ニ載ス、到着ノ日不知、公ノ
御案文不傳、○中略

藤岡ニ屏
居シテナ
ホ宥免フ

越後少將殿大坂表ノ義ニ就テ、大神君ノ御勘當アリ、駿府へ御越シ、八幡ニ

請フ

御座シ、種々御佗言仰上ラル、御免許ナシ、駿河ニ御座シテハ、猶御機嫌惡敷

越後ニ歸
ル

ニ就テ御歸リ、上州藤岡へ御越、御籠居有テ、御國へモ歸リ玉ハス、御佗言仰

上ラル、公方ヨリ松平内膳殿ヲ上使トシテ、御見廻ニ遣サレ、間モナク近藤

石見守殿ヲ以テ、藤岡ニ御座シテハ、彌以テ大御所御機嫌惡敷キ間、先ツ越
後へ御歸リ然ルヘキ由上意アリ、因テ畏リ奉ラルノ旨御請仰上ラレ、即チ
越後へ御歸リ、其後大神君ヨリ、松平忠左衛門殿ヲ御使トシテ、彌以テノ御
勘當ナリ、此時大神君、忠左衛門殿一人御數寄屋へ召寄セラル、御直ニ御尤
メノ條々仰聞ラル、誰モ承ハラス、如何様ノ上意ニヤ不知、大形ハ今度若キ
御人ノ一方ノ大將ニテ御座アリナカラ油斷セラレ、御押シ前遅引シ、家中
高名一人モ無ク、御旗本衆ト家中ノ者、森山ニ於テ喧嘩、御旗本衆三人マテ
相果スニ、相手ヲ御吟味切腹ヲモ御申付ラレス、重々曲事ノ由御尤メト見
ヘタリト云々、忠左衛門殿父大隅守殿ハ、少將殿御家老ニ仰付ラレ、越後三
條ニ在城ス、即チ忠左衛門殿越後へ參ラレ、父大隅守殿ト同道ニ罷出テ、上
意ノ旨ヲ申達セラレ、因テ少將殿ハ、其翌日ニ伊勢ノ淺妻へ御越ナリ、松平
大隅守殿ハ三條へ罷歸ラレ、御家中ノ仕置等申付ラレ、松平出羽守殿前口
玄蕃殿以下ト、同ク江戶へ參ラル、扱越後へハ、侍從忠昌朝臣、松平伊
堀丹後
守郎殿直寄、信州へハ、佐久間備前守殿、安次在番仰付ラル、上使ハ阿部四郎五
郎殿ナリ、爰ニ松平筑後守殿、山田隼人佐殿、鹽刑部殿、此三人屋敷越後高田

越後ニ歸
ル
勝隆家康
ノ旨ヲ傳
フ

元和元年九月十日

五一七

忠輝ニハ
ニ遊ブ
忠輝ニハ
歸封ノ命
ナシ

家康忠輝
ノ驕情ヲ
數ム

中納言ニモヘノボリ玉ハンニ、吾計モトノ少將ニテアラシク、武道故人々ニ位階ヲ越サレテ、世人ニ顔ヲ守ラレンコト惜キ次第也ト思召テ、右ノ作病ヲナサレケルトナン、サレハ兩御所ニテモ、少將殿御推量ノ通ニ思召レテ、内々ニテ御目付ヲ付ヲカレ候エハ、御參内ノ日ニハ、少將殿嵯峨邊エ、河逍遙ニ出サセ玉ヒケリ、其由ヲ横目衆言上有ケレハ、兩御所御氣色ニ應セスシテ有ケレ、洛中ニテモ何レ仰出サレス、各諸大名衆エハ御暇ニテ、國々在所々々エ罷下ラレケリ、兩御所ニ^(モカ)還御ノ所ニ、少將殿計エトカクノ御コトモ仰出サレノナカリシカハ、是非ナクヲボサレテ、近江越前能登越中ヲヘテ、越後ノ高田へ飯城シ玉ヒヌ、

〔玉滴隱見〕

五

忠輝卿被糺積惡 付 三人之義士之事

○上略、家康水口ニテ、忠輝ガ信時ヲ慘殺セシコトヲ問フ、大御所ヨリ、上總コトニカ、ル、八月五日ノ條ニ收メタル駿府記ニ同ジ、大御所ヨリ、上總介殿へ上使トシテ近藤平左衛門ヲ以テ仰遣サレケルハ、今度大坂表へ出陣ノ尅、江劔守山邊ニ於テ、將軍近所ニ召仕レ候小性ナル長坂血鎧カ弟、其方へ慮外シタルト號シ、成敗ノコト、言語道斷ノ所存也、大御所御在世ノ内ニサへ、將軍ニ對セラレ、右之通ノ我儘致サセ候間、况哉御亡命ノ後ヲ御推量

家康信時
殺害ノ下
手人ヲ出
ダサシム

徒ノ者三
人下手人
トシテ出

ナサレタリ、是第一也、第二ニハ京都ニ於テ參内ノ供奉ノ義異儀ニ及ハレ、作病ヲ搆へ、其日ニ至テ嵯峨へ河狩ニ出ラレシコト、第三ニ御暇ノ義何レ仰出サレサル處ニ、北國ノ脇道ヲ罷下ラレ候コト、此義ハ兼テ御制禁ノ段、一門ノ歴々并諸大名へモ重疊仰含ラレシ所ニ、違背ノコト、次ニ六十万石ノ進退ニテ、臺所不自由之由、不覺悟之至也、第一ニハ將軍ノ兒姓ヲ切候テ、討捨ニ致サセ指置候義ニ無之候ノ條、早々解死人ヲ出サレ候へト仰出サレ候エハ、少將殿上意ノ趣ヲ逐一承伏有テ、御請ニ當惑シ玉ヒ、守山ニノ長坂ヲ討タルハ、一二百人步行侍之吏ナレハ、何レヲサシテ解死人ニ出スヘキ覺悟ナシト迷惑シ玉ヒシト也、又世上ニテノ了簡ニハ、此義ヲ強テ少將殿ノ御苦勞ニカケス、御步行頭ノ内ヨリ罷出テ、然ルヘカラントノ取沙汰申候ヲ、彼頭成ケル山田將監ト富永大學、其由ヲ傳聞、罷出ヘシト存シ候處ヲ、亦御步行衆ノ内ニテ其義ヲ承リ、左候ハ、ゲシ人ニ吾ラ共出申サントテ、三人申合、其訴訟申ニ付テ、則上總介殿へ其由ヲ申上ケレハ、神妙ナリト感シ玉ヒケリ、尤諸人忠節ノ三輩共トテ讚美シケルトナン、扱彼者ニ差添遣スヘキモノニハ、誰カ宜シカラント御工夫有テ、思召出サレ候ハ、先年大御所ヨ

小澤水右衛門松岡
清右衛門
送フシテ護
セシム

護送ニツ
キ二人間
ノ異論

元和元年九月十日

五二二

リ附置レタル小澤水右衛門、カレハ數度ノ高名覺ノ者也、亦松岡清右衛門ト申者ハ、伊達政宗ノ講代ノ侍ナルカ、政宗ノ勸氣ヲカウムリテ、少將殿ヲ頼ミ參候也、カレ亦勇士ノ譽レ有由ヲ少將殿聞及ヒ玉ヒケレハ、右ノ兩人ヲ彼歩行ノ三人へ御附候テ遣ハサルヘキ旨仰出サレケリ、其時水右衛門申候ハ、右三人ノ者ニ繩ヲ御カケ候ハ、召列參ルヘシ、サモナク候ハ、迷惑ノ由申上ル、亦清右衛門申候ハ、拙者ニ於テハ、左様ニカレヲ氣遣ニハ存セス候間、其儘ニテ召連參ルヘシト申候ヘハ、猶モ水右衛門ハ、上様ヘゲシ人トテ相出サレ候者ヲ、放シ囚人ニテハ御爲モ如何ニ存奉リ候、其上自然ノコモ候ヘハ、吾等共、不念故、人々ノ批判ニ預ランコト眼前也ト申候ヘハ、亦清右衛門申候ハ、彼三人ハ義士也、其忠侍ニ繩ヲ掛召ツレントハ、吾等ハ申難シ、トカク拙者ハ、拙者カ分別次第ニ同道セント云、何モ清右衛門カ申分ヲ尤也ト感シケルトナリ、此長僉義ヲ、右ノ三人承リ、其内一人洞庵ト云寺へ駈入テ申ケルニ、殿様ノ御タメ存奉リ候ヘバコソ、其相手ニハアラ子臣、ゲシ人ニハ出タリ、ツレホト忠義ヲ含タル侍臣ニ、繩ヲカケテ駿府江戸ヲ引ワタサレ、刑罪ニ行レンハ、生前ノ耻辱タルヘシ、今ニ於テハ御檢

家康松平
重則ヲシ
テ忠輝ノ
病ヲ訪ハ
シム

家康激怒
ス

使ヲ申請、此寺ニ切腹仕ヘキ由ヲ申シ切テ、寺ヲ罷出サルニ依テ、是非ナク相殘ル二人ヲハ、清右衛門カ存分ノ通ニ落居相スンテ同道シケルトナシ、扱右兩人ノ死刑ノコト留書ニ見ヘ申サス候、故ニ、コトニ略ス者也、

〔柏崎物語〕

八〇朝野舊聞哀稿
百十九所載

大坂夏御陣翌年之四月、上總殿少シ病氣

之由聞る故、家康公より御見廻、松平内膳を被遣、是は松平覺雲之兄（勝頼）トて、後は大隅と云人あり、時に松平覺雲事、其時は傳三郎と申を、傳三郎參れとて、家康公召御前へ出られ、さあさへ參れとて、御表へ被召連、小性衆御腰物を持參れ、さあさへとて自身御差候て、御數寄屋へ被召連、御兩吟（吟）よて被仰、其方親上總殿居る成れ、其筋目よて可承、今度森山ニ身、身者、兩入成敗、彌必定上總殿被仰付たる事、沙汰之限りあり、定て子細を可存、申上よと、さあさへ承り候へ、乘打之子細より、御成敗被成由承候と申上る、殊之外御逆鱗之躰よて、涙を御流し、例之御手の御指をかませられて、沙汰の限りれ、大坂よても沙汰之限と有り、將軍の思召處も如何、其上へき者と、思召よ、大坂よても沙汰之限と有り、將軍の思召處も如何、其上人馬より下、自分も乗物よ、下りて時宜可有儀、何そや乘打を咎る、

元和元年九月十日

五二三

忠輝ノ辨
解

元和元年九月十日

五二四

傍輩への不禮あり、逆、大ひも怒り給ひ、此段を參て申せとあり、覺雲下向の時、越後の高田よて大隅上らるふ行逢て、此段の事よ參るとあり、苦々敷事と大隅被申、夫より覺雲參り、御口上を申上られ、森山ニある事ハ、御自分よ被仰付事ニある少もなし、跡ニある御聞被成、後悔せんをなし、大坂之事も、正宗よ頼ミ居申により、油斷之様よ思召事も御尤也、御自分よ無念よ思召也、御不興御尤也、宜様よ可申上逆、覺雲ハ退出を、罷歸て御返事を申上る、彌御不興なり、

〔附録〕

〔鹽尻〕

三四十

寂林院の少將、忠輝、上總介難波の役、御家臣皆陣を出し、軍を旋る

事をあらはに、互よ不知案内のとも多くゆつりあひたるを、他州の兵士よ笑され侍りしと或記もあり、戰國の時と更よ神君の御子よてまじませしう、は、うゝる拙き事有へきとも覺へさりし、或老若曰、我是を聞、忠輝朝臣毎う、あらけあくじらせ給ふのミよて、將帥の器は、まささりしうは、其御家人ハ皆擊殺の小勇よ進む輩をかりありし、且彼等所々の戰場よ功名をあらひし、批殺折挫群よ超るる猛士あれとも、一生兵士を都督し、隊伍よ指揮

忠輝ノ人
ト爲リニ
對スル評

せし事なく、師を簡ひ兵を治る人あかりし故、啓殿振旅の方をあらせ、主人さぬく、一手の將となり給へとも、如何して軍を備へ戦をあせへきを辨さりし不とも、無案内の事あり也しと、當時世よ沙汰し侍る由聞侍ると語りき、○下

〔松平金彌親能由緒書〕

八〇朝野舊聞哀稿
百十六所載

親能父を五郎兵衛親直と云、親

直父を上野介親廣と云、三州長澤城主備中守親則七代之孫也、金彌親能室老木崎殿といふ、木崎殿ハ東照宮此御妹市場殿の娘あり、金彌所々ニある武功有之といへとも、萬事我儘人ニある御取立無之ニ依る、不足有之、浪客と成、市場殿化粧田上州木崎と云、所百五拾石有之を、金彌殿に被進、木崎に引籠あてし處、元和元年大坂夏御陣之節、本多佐渡守を以御供被相願、則上總介忠輝卿之手よ付、大坂に被相越候處、上總介殿大坂御不首尾故よ、金彌殿ニ後手合無之、本意なく被存、歸路信州洗馬ニある、鐵砲ニある二ツ玉を込、足ニある引ッ手を引、胸を打貫自殺、元和元年乙卯年七月廿四日也、時よ五十歳、良月院殿と號せ、

松平親能
忠輝ニ屬
シ功ナキ
ヲ耻ヂテ
自殺ス

佐竹義宣、伊達政宗、最上家親、鷹ヲ家康ニ獻ズ、尋テ、細川忠興、織田常

元和元年九月十日

五二五

元和元年九月十日

五二六

佐竹義宣
伊達政宗
最上家親

細川忠興

天海家康
織田常真
井伊直孝

島津家久
硫黃ヲ家
康ニ獻ズ

眞雄、井伊直孝、島津家久モ亦物ヲ獻ズ、

〔駿府記〕

九月十日、少雨降佐竹右京大夫義宣、大鷹二聯獻之、松平陸奥守政宗

大鷹一聯獻之、（正統）上駿河守家親、大鷹二聯獻之、本多上野介、安藤帶刀披露之

云々、○家康、放鷹ヲ行フコト、本月十日、二十九日ノ條等ニ散見ス、

十五日、諸士如例出仕、雖然無出御羽柴越中守忠興、御服廿獻之、本多上野介

披露之云々、○駿府政事錄、廿

廿五日、南光坊僧正出仕、於前殿御雜談、織田常真御對面、進物繻珍十卷被進

之、井伊掃部助直孝獻御服十領、銀子二百枚云々、○駿府政事錄、二百枚ヲ千兩ニ作ル、

〔細川家記〕

十四八月 九月十五日、家康公へ御小袖十重御獻上、本多上野介

御披露有之候、

〔薩藩舊記増補〕

二御文庫ニ番箱家久公一卷ノ中
家久公御譜中ニ在リ

以上

尊札致拜見候、仍大御所様鷹之目之硫磺五百斤御進上被成候、則致披露候處、遠路之儀、早々被入御念旨、不大形御珍重ニ被思召、殘所無御座御仕合御座候間、御心安可思召候、然者今度大坂之儀、兩御所様思召御儘ニ被仰付、御

機嫌能御歸陣被成候儀、目出度思召候由、御紙面之通懇申上候、然る去比在京中、御仕合能、早々御歸國被成候儀、御満足之段奉察存候、將又大御所様爲御鷹野、今日廿九日ニ駿府御立關東へ御下向被成候、此表相替儀無御座候、相應之御用等御座候者、可被仰付候、不可存疎意候、猶期後音之節候條、不能一二候恐惶謹言、

朱カキ

元和元年

九月廿九日

本多上野介

正純判

島津陸奥守様 貴報

〔附録〕

〔本光國師日記〕

八十

一松茸木鍊、此叢首座ニもさせ下申候、そこ存不申候者、被成御上可被下候、萬一そこ存申候ハ、御上左までニなされ可被下候、○上下略、眞觀寺建

ル、九月十五日附、後藤庄三郎宛崇傳書狀案

〔駿府記〕

九月十八日、今日從幕下蛤二籠被進之云々、

十一日、酉松平忠輝、彌彦神社ニ社領ヲ寄附ス、

元和元年九月十一日

五二七

崇傳松茸
木鍊ヲ家
康ニ獻ズ

秀忠蛤
家康ニ獻
ズ

元和元年九月十二日

五二八

〔彌彥神社文書〕

後越

彌彥大明神領之夏、越後國於蒲原郡内五百石令寄附畢、全可有社納、神供祭禮并修理等、任先例旨、聊不可有懈怠者也、彌可勵國家安治之懇祈狀如件、

慶長廿年九月十一日

忠輝

印

彌彥大明神

社人中

十二日、丙戌家康、駿府城ニ曹洞宗法問ヲ聽ク、

〔駿府記〕 九月十二日、曹洞宗有法問、題本來面目、宗關、松董、

〔文政寺社芝泉書上〕 八〇朝野舊聞哀稿 元和元年九月十二日、宗關和尙於

御前法問、大坂御開陣御祝儀之法問也、本則者本來面目也、是又駿府政事錄八卷ニ有之、

〔附錄〕

〔本光國師日記〕 八〇 八月十五日、一乘院殿八月十四日之御書來、則返書遣

ス、大藏一覽拜領忝之由申來、

〔駿府記〕 九月十一日、〇駿府政事錄トアリ、松董宗觀出御前、則松薰大藏一

覽一部拜領、道春奉之云々、

大坂開陣
祝儀ノ法
問

女御近衛
氏一條家
フニ幸シ給

鷹ノ料
心等ニ
放鷹ニ
二日
放鷹

〔文政寺社芝泉書上〕

八〇朝野舊聞哀稿

元和元乙卯年九月十一日、於御前

大藏一覽講釋被爲仰付、全部講釋畢之日爲御褒美、青銅并被物等拜領、右大

藏一覽集林道春奉之頂戴、駿府政事錄第八卷ニ顯然也、又曰、大藏一覽集全

部拾卷、右者開山宗關和尙、元和元乙卯年九月十一日拜領、林道春奉之、〇家

道春ニ命ジテ、大藏一覽ヲ印刷セシムルコト、三月二十一日ニ其

條アリ、又之ヲ諸寺諸上人ニ賜フコト、同條所收ノ駿府記ニ見ユ、

〔土御門泰重卿記〕

九月十三日、晴天、一條殿致祇候、國母様、一條殿御學

文御精不入候、由仰よて御折檻、御前居候て、何共迷惑仕候、漸々連マシテ御

前罷立候、

十四日、戊子家康、駿府城外ニ放鷹ス、後屢、放鷹ス、

〔駿府記〕 九月十四日、從早天山鷹出御云々、

十八日、早天御放鷹出御、雁四令摺給、已刻還御云々、

十九日、頃日令擊給鶴御料理、日野唯心其外安西衆賜饗云々、

廿一日、自早天御放鷹、鶴一雁四鳴、其外鷺鶉令摺給云々、

十九日、巳癸禁中能樂アリ、

元和元年九月十三日、十四日、十九日

五二九

〔義演准后日記〕

九十

九月十八日、出京明日於禁中御能爲出仕也、御樽三荷

菓子折一合進上之、

出御御覽

十九日、辰刻參内、鈍色如常、脇白樂天大夫小進、本願寺坊官也、金春與爭之、當時上手

也、驚目畢、十番在之、天子出御、初獻關白以下御相伴、八條宮、關白ノ向座ニ被

着了、關白二條殿御周旋御内證云々、二獻度法中御相伴、天酌ニテ悉被下之、

至藏人了、凡百人計モ被召出歟、數刻也、及半晚了、三番マテ大雨降、四番ヨリ

屬晴、舞臺樂屋ヤ子アリ、仍御能_レ在之、見物モ笠ヲ御免、群集了、

廿日、後朝御能參内、先ウタヒハヤシニテ、其已後御能、卯羽十二番入夜、箒御

能已後、盡被召出、御酌九條殿、大御酒及深更了、

見物ノ衆ニ笠ヲ許サル後朝御能

〔言緒卿記〕

九月十九日、癸巳、雨禁中御能アリ、内々外様不殘參了、

廿日、甲午、天晴、禁中御能アリ、各參了、

〔孝亮宿禰日次記〕

四

九月十六日、庚寅、晴、長橋局御所洗之事有仰、即南殿

御掃除之事、仰衛士來十九日、依御猿樂參云々、

十九日、癸巳、晴、於禁裏有猿樂、太夫小進法印也、極薦參之、

廿日、甲午、晴、猿樂後朝也、忠利參之、

曆替古土御門泰重參内セズ

〔土御門泰重卿記〕

一

九月十八日、晴天、少曇也、雨未降也、中略下京四條町

ニ宿ヲ借、曆算替古也、夕雨少酒、然共遂多不降、

十九日、雨天、禁中御能之由承及候、予作病仕、不致參内候、其故ハ、曆替古之故

也、下京ニ居申候、曆道之儒者賀家、雖家業、タイテンノ故、迷惑ナカラ助其道

如此也、禁中御能、六條少進仕候、由承及候、予宗領藤松五才、長絹ニテ家君召

連參内之、由承及候、雨午以後晴申候、道僖所參申候、

廿日、晴天、禁中御能後朝也、予猶下京ニ居申候、今日モ家君藤松御同道之由

承及候、晚ニ道僖振舞被申候、四ツ時分小雨少降、

〔能之留帳〕

二

九月十九日、禁中之御能、大雨以外よて候へ共、見聞之衆不

立騒、見物有之處、笠被成御免候、則法印へも、右之旨樂屋へ勅定也、今迄於禁

庭笠御免無之由被仰出候、

翁アリ與左衛門

白樂天

法印

眞盛

同

井幹働アリ

同大又四郎小袖のこま

項羽

同

元和元年九月十九日

五三二

後朝御能
番組

春榮	源五 春榮源七
蠶	法印
果月	源五
山優婆	法印
女郎花	與左衛門
鳥頭	法印
吳服 <small>キリ</small>	源七
同廿日、後朝、天暉	
鷓鴣羽	與左衛門
清經	法印 <small>小袖ハツヒ半切</small>
江口	同 <small>小袖初籠ニあふき</small>
葵上	同 <small>後上下襦袢のり唐中白紅石</small>
小袖曾我	源五、時宗源七
自然居士	法印
舟弁慶	源五、判官源七

家屋ヲ建
築セシム

攝津大坂城主松平忠明、平野藤次郎、安井九兵衛ニ、大坂南堀河ノ支配ヲ命ズ、

〔安井文書〕 乾

以上

南堀河之内、先年寄如有來兩人ニ申付候條早々家を立させ可申候其上兩人之者古寄被立申堀河之儀候間、萬事肝煎才覺可仕候、以上、

元和元年

卯

九月十九日

平野彦太夫印
 若林八左衛門印
 稻垣與三左衛門印
 山田清大夫印

元和元年九月十九日

五三三

平野藤次殿

安井九兵衛殿

〔諸由緒〕

平野一兵衛由緒書

我々共、大坂町之内、明屋敷所持仕候様子ハ、慶長拾七子年、道頓堀川我々親共、從御公儀様申請、堀を不り取立申候、其以後御陣之刻、平野二郎兵衛伯父平野藤二郎、安井九兵衛親九兵衛大坂を立退、兩上様御陣所御用承候ニ付、爲御褒美、御陣以後勿論道頓堀川之儀ハ、兩人ニ不相替被下、其刻九兵衛ニ玉造森田町所々、焔硝場數ヶ所之明屋舖被下所持仕候、松平下總守様大坂御私領之時分ハ、御年貢ハ差上ケ不申、元和六申年、下總守様郡山に御國替以後、嶋田越前守様、久貝因幡守様、御年貢差上候、其以後年數者其時分之御證文無御座候故、存不申候、鈴木三郎九郎様ニ、大坂町之内明屋敷之御年貢差上來申候由、我々親共物語承傳候、藤二郎義、元和二年より御代官被仰付候故、右之道頓堀屋舖弟次郎兵衛親二郎兵衛に被下、九兵衛一所ニ所持仕來候、則下總守様御家老、并奉行衆連判之證文御座候、其以後、右明屋敷之内、度々御公儀御用地ニ罷成、又ハ町屋ニ相成候故、御下ケ札引共御座

道頓堀ノ開鑿

平野安井二人ノ軍用ヲ勤ム

藤次郎代官トナル

候、石高高下御座候、御尋ニ付、右之段々書付指上申候、以上、

證文之寫、道頓堀川、其時分ハ南堀川と申候、○中略、平野藤次、安井九兵衛宛、元和元年九月十九日

附、平野彦兵衛外三人連署狀ニカ、ル、

右之通相違無御座候、以上、

〔安井系譜〕

津○攝

同十七年壬子

九兵衛居宅最寄り、東堀ヨリ水津川迄上

道頓堀南堀川ヲ掘ル
安井道頓大坂ニ籠死ス
九兵衛藤次郎開鑿ヲ成就ス

下廿八町ノ間、豐臣家ヨリ申請、元榎津川ノ小溝ヲ九兵衛兄道頓、同治兵衛平野藤治等親類申合セ、自費ヲ以テ掘割、南堀川ト唱へ、運送ノ便宜ヲ開ク、ス治兵衛ハ病死シ、道頓ハ豐臣家ニ從ヒ、大阪亂ノ砌籠城仕、五月八日、落城ノ節討死仕、其後九兵衛、藤治兩人ニテ跡ヲ仕揚ケ罷在リ候、元和元年、當城松平下總守城主ト成テ、南堀在來ノ通り、兩人肝煎候様、奉行衆連判ニテ、九兵衛、藤治名當ノ折紙給フ、本紙私所持、

元和二年ヨリ、平野藤治徳川家ノ代官ヲ勤ム、○中略、木津浦ニテ鯨ヲ捕へ、家康等ニ獻ズルコトニカ、ル、十二月十一日ニ其條アリ、

下總守南堀ノ次第ヲ問レ、發起人ノ内道頓戰死致セシ其功ヲ稱セン爲、南堀ノ唱ヲ止メ、更ニ道頓堀ト改稱スヘキ旨指圖有之候、私庭中傍ラニ觀音

道頓堀ト改稱ス

元和元年九月十九日

五三六

安井九兵衛久寶寺
等三ヶ村
命ゼララル

ヲ祭リシハ、豊臣徳川攻戦ノ砌、道頓并ニ九兵衛懇意仕リシ本間仁兵衛并
善海女ノ婿トモ云、無之ニ久寶寺ノ卒人、元相州北條ノ侍後加藤清正ニ仕
フ鎗ノ達者、豊臣家エ隨ヒ、博勞ケ淵岩エ罷出、阿波ノ水軍大將森甚五兵衛
捕ラレ申、生中ニ有之觀音小像ヲ道頓并自分吊トシテ、九兵衛ニ送届ノ儀
依頼ニ付送り越シ、其已來甚五兵衛方ト、從來往復致シ來レリ、○中
元和元乙卯年、當城々主松平下總守奉行衆連名ノ折紙ヲ以テ、久寶寺、大蓮、
澁川、右三ヶ村高五千石餘ノ代官九兵衛へ被申付タリ、

右本紙私所持

并久寶寺古屋鋪地高帳村中古圖等私所持

久寶寺ヲ始メ、其近邊慶長十九年迄、寺澤志摩守代官所ニ有之ニ付、徳川家
老中衆本多佐渡守、酒井雅樂頭、安藤對馬守、土井大炊助連名折紙、

霜月廿三日附大阪表御陣取御物主衆中ノ名當ノ本紙、私所持

九兵衛兄治兵衛、道頓堀々立央、慶長八年八月病死ノ後、家來太右衛門

ト申者、道頓ニ隨ヒ籠城仕リシ始末ニ付、治兵衛跡斷絶、妻ハ寺澤志摩

守姪ニ付、子供引連レ、肥前國唐津寺澤家へ引取レリ、

徳川家康、秀忠勝利ノ上歸陣ノ砌、隨テ駿府ニ至リ、目見仕リ、四百坪ノ屋敷

屋敷地ノ
諸役ヲ免
ゼラル

安井久兵衛久寶寺
村ノ代官
命ゼララル

地諸役免セラレ、後江戸表ニ至リ、紋付時服賜レリ、

右ノ段、總年寄一統由緒書、享和二戌年十二月、家々ヨリ幕府目附方へ

差出セシ節別格

〔参考〕

〔安井文書〕

○乾攝津

追ふおえは、一ヶ村、ふ川村之儀も、無油斷納可被申候、以上、

久寶寺納所之儀、無油斷出作共ニ、被入情納可被申候、若無沙汰於有之者、其
方可爲越度候、少も油斷有間敷候、

已上

卯

十月二日

山田清大夫

印

安井九兵衛殿

以上

在々御年貢相濟不申候内、借錢一圓取引仕間敷候、并ニ御百性も有付不申

元和元年九月十九日

五三七

元和元年九月十九日

五三八

候内、借錢取引申間敷候、仍如件、

卯、
極月二日

平野彦太夫

清次(花押)

若林八左衛門



稻垣與三左衛門



山田清大夫

□(花押)

安九兵衛殿

澁河郡

庄屋中

百性中

猶々、内々御床敷御左右承度存候砌、預御狀見參と存候、而不打置詠入

もうせん

南堀川開
鑿ノ落成

申候、殊見事之もうせん一枚被懸御意候、過分ニ存候、乍早晚御懇懃成
御音信、却る迷惑仕候様子ニ存候て、當年中ニ致上洛積御物語可申候、
併御家中之様子ニ付、萬事ニ心を遣申候故、氣遣御推量之外ニ候、將
亦三郎右衛門方へ御懇之御言傳、則申渡候、忝由申事ニ候、さてく治
兵殿之事ニ、何もノ御力落、取分御後室之御心中、すいじやう申候、御跡
相違無之由ニ候間、目出度存候、くり返しく遠路兩人を御下し忝存
候、尙追々可得貴意候條、不具候、以上、

爲御見舞と兩人御下、御懇札披見本望ニ存候、如仰之其後者無音之様ニ
打過、所存之外ニ候、遠路之儀ニ候へ、以使も不申入、無沙汰申迄ニ候、
一去年江戸へ御下之由、御太儀候、御用之事相調申候旨目出候、
一其地新堀川思召被立、成就申候由、扱々御手柄よて候、尤此方へも聞へ申
候、無比類事との執沙汰ニ候、
一家なども大きニ御立候由、御書中ニ見へ申候、又兩人物語も承、御太儀ニ
存候事、

一銀子御用之由、仰給候、手前ニ無之候へ共、態々人を御下候と存、他所のを

元和元年九月十九日

五三九